

昭和42年度  
都倫研紀要

6

# 「倫理・社会」授業の事例的研究

付 生徒作文による授業反応

東京都高等学校「倫理・社会」研究会



# は　じ　め　に

会長 矢谷 芳雄

昭和39年から発足した「倫理・社会」も、すでに4年の年月を経て、ようやく定着してきたように思われます。わたくしどもの研究会も、ことして満五周年を迎え、研究と講演と公開授業とを中心に、確実な歩みをつづけてまいりました。

わたくしどもの研究会は、いつでも現場を離れず、現場の問題と取り組んだものでありました。同時にそれは、会員相互の研さんの場でもありました。わたくしどもは、それぞれ各分科会に所属して研究を深めるとともに、月例会などをとおして、分科会相互の交流をも盛んにしてまいりました。

本年度は、きたるべき学習指導要領の改定にも、大きく寄与するものを提供することをひとつのねらいとして、現段階での成果をまとめることになりました。授業はどのように行なわれているか、生徒はそれをどのように受けとめているか、これらの点を中心にしてまとめたものが、この紀要であります。

わたくしどもは、すでに五つの研究書を刊行してきました。ことしはこの紀要のほか五周年記念出版の刊行事業も進めております。両者あいまって、姉妹編として5年の歩みを集成するものとなるでありましょう。

本書を上梓するに当たって、わたくしどもの研究会のために、たえずご指導をたまわります関係各方面の方々に感謝申しあげるとともに、あい携えて研究を共にされた会員各位の労を多とし、とくに世話係の方にお礼を申しあげます。

## 研究紀要参加者名簿

会長	矢谷 芳雄	(都立上野高校長)
副会長	徳久 鉄郎	(都立東村山高校長)
副会長	和辻 夏彦	(私学研究所研究員)
顧問	武藤 一良	(都教育委員会職員課)
顧問	杉山 一人	(私立盈進高校長)
協力者	金子 守勝	(都教育研究所指導主事)
協力者	酒井 俊郎	(都教育委員会指導主事)
事務局	増田 信	(都上野高教諭)
事務局	石森 勇	(都上野高教諭)

### 第 I 分科会

※鳥山 貞夫(都向丘高)	※仙崎 武(都王子工)
野々山正司(都小山台高)	佐藤 勇(都秋川高)
山口 俊治(都練馬高)	岡本 武男(都白鷺高)

### 第 II 分科会

小鹿山 隆(都雪谷高)	鮎沢 真澄(都駒場高)
細谷 斉(都墨田川高)	秋山 明(都杉並高)
坂本 清治(都小岩高)	西村 忠(都桜町高)
※村松佛二郎(都忍岡高)	※小笠原悦郎(私日大二高)
※佐々木誠明(都桜水商)	御厨 良一(都赤城台高)

#### 第Ⅲ分科会

佐藤 哲男(都足立工) ※中村 新吉(都大山高)  
寺島 甲祐(都町田高) 杉原 安(都東高)  
渋沢 芳三(都千歳高) 田中 正彦(都深川高)  
※新井 清(都杉並高) 小川 一郎(都荻窪高)  
永上 肆朗(都四谷商) 鈴木 宜雄(都赤城台高)

#### 第Ⅳ分科会

角田 義治(都富士森高) ※井原 茂幸(都小平高)  
館野 受男(都鷺宮高) 佐原 一字(私大東文高)  
石森 勇(都上野高) 増田 信(都上野高)  
菊地 堯(都三田高) ※金井 肇(都豊多摩高)

#### 第Ⅴ分科会

角田 藤武(都九段高) 高橋 定夫(都江戸川高)  
※小島 章一(都武蔵高) 米田 成夫(都向丘高)  
渡部 武(都戸山高) ※渡辺 浩(都井草高)  
中島 清(都城南高)

#### 第Ⅵ分科会

※籠原 幸一(都城北高) 綿貫 博(都葛西高)  
森山 栄治(都池袋商) 木村 正雄(都蔵前高)  
伊藤駿一郎(都忍岡高) 浅香 育弘(都葛飾商)  
吉田 大蔵(都北高) 道広 史行(都深川商)  
※小坂橋 稔市良(都江北高)

※ この印は世話人代表

# 目 次

はじめに

会長 矢谷 芳雄

## 執筆者名簿

- I 研究テーマと研究体制
- II 研究活動の経過報告
- III 研究報告

### 第 I 分科会 「人間性の理解」

自己の形成	仙崎 武	1
パーソナリティの発展と情操	山口 俊二	5
友情	仙崎 武	9

### 第 II 分科会 「古代人の思想」

ソクラテスの思想	村松悌二郎	13
プラトンの思想	小鹿山 隆	17
アリストテレスの思想	秋山 明	21
エピクロスの思想	佐々木誠明	25
ストア派の思想	西村 忠	29
イエスの思想	沼田 俊一	33
釈迦の思想	細谷 斉	37

孔子の思想	坂本清治／	41
孟子と荀子の思想	御厨良一／	45
老子と荘子の思想	小笠原悦郎	49

第Ⅲ分科会 『近代人の思想』

ルネサンスの思想	波沢芳三／	53
宗教改革の精神	中村新吉／	57
デカルトの思想	田中正彦／	61
カントの思想	永上肆朗／	65
自然法の考え方 (ホブズ・ ロックを中心に)	小川一郎／	69
ルソーの思想	鈴木宣雄／	73
功利主義 (ベンサムとミルの 比較)	新井潜／	77
ヘーゲルの思想	寺島甲裕	81

第Ⅳ分科会 『現代人の思想』

実在と自由	井原茂幸	85
キルケゴールの宗教的実存	金井肇／	89
マルクスの思想	菊地亮／	93
ガンジーとネールの思想	佐原一字	97
現代の倫理学	石森勇／	101

第Ⅴ分科会 『日本人の思想』

親鸞の思想	米田成夫／	105
日蓮と日蓮宗	高橋定夫／	109

伊藤仁斉の思想	渡部武ノ	113
西洋近代思想の受容	渡辺浩ノ	117
西田哲学	小島章一	121

第Ⅵ分科会 『現代社会と人間関係』

大衆社会と個人	籠原幸一ノ	125
現代の社会病	浅香育弘ノ	129
大衆社会と個人	吉田大蔵ノ	133
現代の日本社会	道広史行ノ	137
家族の諸問題	綿貫 博ノ	141
職域社会の人間関係	木村正雄	145

会 則		149
事務局を担当して	事務局長 増田 信・石 森 勇	150
あ と が き		152

# I 研究テーマと研究体制について

## 〔研究テーマ〕

都倫研紀要もこれで第六集となる。本会は代々、よい世話人代表に恵まれ、「倫理・社会」授業内容の研究(大阪教育図書)や「倫理・社会」の指導と展開(講談社)などを刊行してきた。

授業に密着した地味な研究会をモットーに、今年満五周年を迎えるにあたって、もう一度、会の発足当時にたしかえり、しかも、少しでもフレッシュなものでありたいと願った。

会員の一部には、高度な学問的研究発表や論文調のものこそ紀要に値すると考えておられる方もいる。たしかに、そうであるとうなずける面もあり、五年の歩みのなかでは、そういったものもとりあげられた。しかし、わたしたちは都倫研のあるべき姿は現場の問題をとりあげることであると考え、表題のように決定したのである。

年間の授業のなかで、教師が全精魂を傾ける授業、すなわち、教師の「人生観・世界観」をもっとよく表わす<授業のまとめ>と<ねらい>を書いていただき、その授業をうけた生徒諸君の感想文を集めるのである。

得意な授業はきっとあるはずである。その授業が生徒の血肉となっているか、生きた「倫社の授業」の一面をとりだしたかった。

生徒作文は、よくとらえたものを男女一名ずつ選ぶということをたてまえとした。倫社の明るい面をみたかったのである。生徒作文は担当者に選んでいただき、分科会の分は、世話人に目を通していただくことにした。

## 〔研究体制〕

都倫研の歩みのなかで大勢を占めたのは、会員の希望による分科会構成であった。前年度の西村先生(都桜町高)は地域性を重視なさったが、集会を

もつことと、自主性を尊重して、今回は過去四年間の歩みに従った。

各分科会の活動分野を示し、その理解の上に立って、会員が選択し参加するのである。

今年度は、第1分野の「人間性の理解」と第3分野の「現代社会と人間関係」を従来通りとし、第2の「人生観・世界観」では、おおよそ、時代別とした。さらに「日本の思想」を一本たてて、1分科会としてみた。

分科会名と活動範囲は下記の通りである。

- |       |             |             |
|-------|-------------|-------------|
| 第Ⅰ分科会 | 『人間性の理解』    | } 『人生観・世界観』 |
| 第Ⅱ分科会 | 「古代人の思想」    |             |
| 第Ⅲ分科会 | 「近代人の思想」    |             |
| 第Ⅳ分科会 | 「現代人の思想」    |             |
| 第Ⅴ分科会 | 「日本人の思想」    |             |
| 第Ⅵ分科会 | 『現代社会と人間関係』 |             |

各分科会の所属が決定してから、それぞれの分科会で世話人を決定していただいた。

会員の所属の関係で、倫社全般にわたって 網羅することはできなかったが、五年間の歩みだけは集約できると信じている。

たまたま、五周年記念出版事業と並行したため、少々の無理はあったが、会員のみなさんご協力によって、刊行の運びとなったことはうれしい。

また、倫社教育の一里塚となり、今後のあり方に示唆を与えることができれば、わたくしどもの望外の喜びとするところである。

世話人代表 小笠原 悦郎  
中 村 新吉

## II 研究活動の経過

### 〔本年度活動の特色〕

本年度は各分科会とも、それぞれの研究分野から、統一的主题を設定し、それに総力を結集してアプローチしてみようということになった。ここに、各分科会は五周年記念出版『倫理・社会指導内容の事例的研究』への研究討議を重ねた上での執筆活動、公開授業の実施、研究発表や講演を通じての理論的・実践的研鑽に入ることになった。さて、統一研究主題は小笠原世話人代表提起どおり、「倫理・社会授業の事例研究」と決定をみた。このテーマが設定された根拠は、本会5か年にわたる授業の実践的研究を総合的に集約し、研究記録にとどめるだけでなく、これが今後の学習展開指導に役立てるという主旨にもとづいている。それゆえ、あくまでも実際におこなった自信のもてる分野・章・人物などの授業にもとづき、相互に検討・研究を重ねた上の展開・ねらい、資料、解説さらに生徒の作文による授業反応の研究集大成を目指したのである。特に、指導展開が一方的にならないよう授業をうけとめる主体者たる生徒の理解度・主体的うけとめの姿勢・批判などを十分に記録し、現代の高校生が「倫理・社会」をどのようにうけとめているか、本教科目の目標が達成しているか等を客観的に把握することをはかったところに、本年度の研究活動の特色がある。

### 〔研究活動経過〕

<第1回> 6月20日 総会 都教育会館

1) 研究発表「昭和41年度の研究活動の報告」 都立桜町高校 西村 忠氏

「主題別学習の指導内容構成」 都立小平高校 井原茂幸氏

2) 講演「社会科学と行動科学」 一橋大学教授 南 博氏

井原氏は主題別学習の指導内容について一つの独創的試論を提起されたが、その構成はきわめて有機的なもので注目に値するものであった。

<第2回> 7月3日 都立忍岡高校 例会 第Ⅱ(古代)分科会

- 1) 公開授業 「ソクラテス」 都立忍岡高校 村松 二郎氏
- 2) 研究体制の結成 分科会一名簿作成、世話人選出、研究計画の打合せ
- 3) 五周年記念出版 内容構成の整理・原稿依頼

毎年、一冊の原典をとり上げて10時間ほどゼミナール方式で授業展開している村松氏の授業はすばらしいものであった。

厳密な研究と思考を要求する村松氏の授業は、表面的理解で理解したと思う不勉強さを徹底的についており、高校生にとってこのような授業は「知ることへの謙虚」を教えるものであり、一冊の古典の重みを理解させてくれるものである。まずは独創的授業形態である、と考えられた。

<第3回> 9月21日 都立大山高校 例会 第Ⅲ(西洋近代)分科会

- 1) 公開授業「カントの市民倫理」 都立大山高校 中村 新吉氏
- 2) 研究発表「倫理授業の多様化」 都立杉並高校 秋山 明氏
- 3) 講演「カントの市民倫理の問題」東京教育大教授 小牧 治氏
- 4) 研究協議「紀要」執筆要領説明(小笠原氏)、五周年記念出版執筆者確認

中村氏の公開授業は、資料を豊富に利用しながら、生徒のグループ研究発表の方式をとったものであった。村松氏と同じように原典中心の授業であり、生徒が3~4名発表したのち、15分位で質疑応答をしてゆくものであった。授業形態としては一つの典型的自主学习・研究をねらったものであった。秋山氏は、「倫理・社会」の授業形態をあらゆる角度から取りあげ、実践的体験を通してその長短を指摘し、多年の研究のベテランぶりを示してくれた。特にその資料は豊富・詳細にわたり貴重なものであった。小牧氏の講演は今日の大学問題とからみあわせて、はばひろくカント的世界を紹介された。味わい深い講演であった。

<第4回> 1月16日 都立白鷺高校 都倫研創立五周年記念大会並びに  
全倫研関東甲信越研究大会

1) 公開授業「仏教の基本的考え方」 都立白鷺高校 岡本 武男氏

2) 開会・挨拶「都倫研五か年間の研究活動の経過報告」

都立上野高校 増田 信氏

3) 研究協議 「倫理・社会の授業形態について」

問題提起 都立駒場高校 鮎沢真澄氏 日大二高校 小笠原悦郎氏

都立大山高校 中村新吉氏 都立府中高校 沼田 俊一氏

4) 記念講演 「原始仏教の生活倫理」 東京大学教授 中村 元氏

岡本氏の授業は問答・対話を通して原始仏教の倫理を理解させようとするもので、生徒たちはのびのびと楽しく語り合いを通して理解を深めていたようである。研究協議は上記五人の先生方から実践的授業形態の発表があり、それを中心に全国から参集した多数の先生方と熱心な質疑応答を行なった。詳細は五周年記念出版に掲載したのでご一読願いたい。中村元氏の講演は本界の権威らしい仏教倫理の詳細にわたられ、しかもわかりよいお話であった。まことに記念大会にふさわしい盛大な研究大会であった。

<第5回> 1月22日 都立豊多摩高校 例会 第Ⅳ(現代思想)分科会

1) 公開授業 「キェルケゴール」 都立豊多摩高校 金井 肇氏

2) 研究発表 「資料の扱い方」 都立小平 高校 井原 茂幸氏

3) 講演 「現代自由主義の二形態」 元神戸大学教授 武市 健人氏

金井氏のキェルケゴールの授業を参観し、資料の扱い方について井原氏から提案がなされ、討論に花が咲いた。武市健人氏は討論をきいていて、

「ずいぶんむずかしいことをやるもんですね」というお話からはじまり、知識としての倫社は思想史をまんべんなくやる必要があることを説き、現代の自由主義を四つの類型に分けて説明され、さらに自由主義と社会主義陣営の自由の二つにしばられた。

以上本年度の研究活動の主なものを記録しましたが、このほか、分科会が独自に研究の機会をもうけ、地道な研究と研鑽を重ねました。紙数の関係でひとつひとつ報告できなかったが、本研究会の推進の中核としての役割を果たされた分科会およびその世話人の労を多としたい。

本年度は文部省による「全国高等学校教育課程研究大会」倫理・社会部会も開催され、本会の中核をなす会員が多くその研究運営委員にも当られ、「倫理・社会」の指導内容・性格・問題点と改善への方向~~つ~~等ひろく研究された。本教科目設立以来五年経過した現在、改善を求める声も聞かれ始めております。

この紀要に掲載された生徒の「作文」は単なる空話でもなければ、感傷でもない、一つ一つに、現代に生きる青年としての魂の開眼があり、自己や社会と結びつけての真剣な問題意識がにじみ出ております。

最後に研究活動の報告を終るに当り、玉こうを寄せられた会員諸氏、研究活動のまとめ役された世話人の方々、さらに、「聞けば心あるもの涙流さず」程本会の準備やら運営やら後始末に心身辛勞された事務局の増田氏・石森氏に感謝申し上げます。本年の研究活動および本紀要についての苦言はすべて、世話人代表にあることをおことわりして、報告といたします。

(小笠原・中村記)

# Ⅲ 研究報告

第1分科会

## 自己の形成 (1時間)

都立王子工業高等学校 教諭 仙崎 武

<授業内容のまとめ>

### (1) 同情

- ① いたわり・あわれみ
- ② 他人の思想・行動の理解 → 知識・判断・情緒・感覚・経験などが  
必要 → 同感情 → 人格そのもの
- ③ 同情は人格の尺度 → 自己形成の礎石

### (2) 自己の発見

- ① 他人の心における自己を想像すること
  - ② 他人の心における自己を判断すること
  - ③ 判断にもとづいて自己の態度をきめる
- 自我と他我  
||  
他との関係における自  
己の認識

### (3) 自己の形成

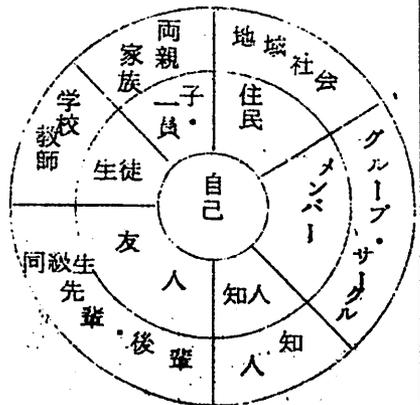
- ① 人間関係のなかで変化
- ② 人間関係のなかで自己形成

広い人間関係 → 豊かな自己形成

### (4) 人々の役割

- ① 人間関係に応じた行動のきまり → 役割
- ② 与えられた役割認識と分担  
→ 自己実現

役割と人間関係



〈ねらい〉 この時間は、第1分野「人間性の理解」に含まれており、「人間はいかに行動するか」のなかで、「文化と人間」「社会生活と人間」のあとをうけて、「自己の発見や形成」が、いかなる契機、要因でどのような過程をへて行われるかを明らかにしようとするもので、次単元の「行動機制」を含めて、人間及人間生活の特質を総合的に理解させようとするものである。

この節、「自己形成」では社会生活における人間関係・役割分担のなかでの自己発見・自己形成について考えさせることを主なねらいとしているが、先ず、他への同情を自己発見・自己形成の重要なファクターと見、知的理解や想像力による共感・同情が、人格の尺度でもあるので、シュヴァイツァーの根本思想、「生への畏敬」～生きとし生ける意志への絶対的な尊敬～などを例に考えさせる。次に、自己の発見は、他人との関係のなかでなされるものであり、自己の形成もまた、他人との関係のなかで変化も形成される。貧しい自己に閉じこもらず、広い人間関係のなかで豊かな望ましい自己を育成し、周囲のさまざまな集団、とりどりの人間関係のなかでふさわしい役割をもち、役割を十二分に果たすことによって、自己創造、自己充実を果させる意欲や心構えを養わせたいものである。

悩みの調査や自己に関する作文を書かせると、自己理解についての悩みを表明する生徒が圧倒的に多い。「汝自身を知れ」とはギリシヤの哲聖ソクラテスの名言であるが、古来より自己を客観的に誤りなく捉えるのは至難の業ともいえるだろう。生徒が友人関係に悩みを感じ、日記をつけたり、スポーツに夢中になるのも、すべて他との人間関係に自己をうつし、鏡の中の自己をしっかりと見つめたいという敬求の一端なのである。ルソー、トルストイ、あるいは内村鑑三、福沢諭吉、近くは、ポーポワールなどの告白的自伝などにより、多感な青春に於ける真摯な自己探求にふれて、自己形成の糧とさせる指導も忘れないでしておきたいものである。

## 〈生徒作文〉

都立王子工業高等学校 機械科4年

ぼくが今、過去の自分を思い出してみますと、両親健在で、兄、姉がいる一般の家庭の四男として生まれました。そしてぼくは末っ子として育ててきたせいか、幼ない頃から自分勝手なことばかりして、他人のことなどは心から思ってやることもなく、自己中心的な物の考え方で中学時代まで過してきたようです。中学校時代までは、自分の言っていることが誤っていることであっても、家庭において父母は、ある程度までは許してくれましたので、自分のわがままは通せるものだと思って、ある面においては自由に生きてきました。そしてぼくが、自分の考えの中で、自由、平等という意味において、自分自身が自己中心的だなど、はっきり意識して思うようになったのは、中学校を卒業して東京に来て会社の寮で生活するようになってからです。そして、それ以来自分自身について色々と考えるようになって、悪い面は自分なりに改善するよう努めてきました。このような時に学校の「倫理社会」の授業で、人間の自己中心性、がまん、こじつけ、いいわけなどを知り、人間は自分に対して目先のことに目がくらんで自由なことをしていると、相手にみはなされてしまって、対人関係がうまくいかないことや、また人間は自分で意識していないのにその時の感情によって、こじつけや、いいわけをしてつまらないマイエをはっていることなど学びました。そして現代の波乱の多い社会生活を乗り切って生きていくには、自制力が必要であり、また人は他人と協調して生活し、人間は世界の人間と協力しあって、平和な社会を作っていくかなければならない事を学ぶことができました。ぼくにとって、生徒全員にとって大変有意義な授業だったと思います。

## 〈生徒作文〉

都立王子工業高等学校 機械科4年

人間は、とかく自己中心的な行動をとりがちです。勿論、すべての行動は自己が中心になって行なうものでありますが、他人に対しての迷惑や、他人の考え方についての暖かい理解は、当然必要なのではなからうか！と思います。私のある知人で、常に怒りっぽく接近しにくい雰囲気を持った人がいます。私の目で見たとこの人は、自分の置かれている環境のすべてに不満をいだき、他人に対して反抗的であり、かといってそこを離脱しようとする勇氣は全く見受けられないのです。このような人を見て考えさせられますことは、人間は素直であり、絶えず冷静な態度をとらなければならないということなのです。いやこれは当然なことなのかもしれません。でも人間は、これらの当然なことが出来ないものなのではないでしょうか！

わたくしはこれらについて、このように考えます。自分の怒りを他人に態度で示すことは、全く無関係な人に不快感を与えるばかりではなく、自分自身の人格を相手に汚られ、人間関係も思うようには進行しにくく、その他あらゆる面で自分にとってマイナスではなからうかと思えます。

怒ることは誰にでも出来ます。でも我慢することは怒ることよりも容易にできるものではないのです。わたくしは常に父に言われています。人間は怒ってはだめだ！怒るようでは、まだそれだけ自分が子供なのだ！この言葉が胸にじんときる時があります。人間誰でも反省すべき点はあるはずです。

自分自身では気が付かなくても、他人に言われてはじめて気付くことも沢山あるものなのです。

それらを素直に反省すべき点として、じっくり考えてみるべきではないでしょうか！

## パーソナリティの発展と情操 (1時間分)

都立練馬高等学校 教諭 山口 俊治

### <授業内容のまとめ>

- (1) 「理性ではわかるが感情がついて行けない」という体験
 

理性と感情との対立を避けるために往々にして感情は否定されるべきものとされた。
- (2) 感情の種別
  - a 情緒 怒り、恐れ、驚き、などのように生命の危機や衝動的欲求の満足や不満足にともなって体験される感情
  - b 感性感情 感覚や知覚などにともなう局在した感情
  - c 気分 比較的持続的で微弱な感情、生命感情ともいう。
  - d 情操 真善美聖などの価値に対する理想にともなって体験される感情で、パーソナリティ形成の中核になる。
- (3) 感情の働き
  - a 冷ややかな認識を主観的に色づけるのが感情であり、特に情操は対象と価値的かゝわり方をもったのである。
  - b 正しい価値感に支えられた感情は、理性と対立するものではなくむしろ、理性の支持する望ましい行動を、より強力にする力を持つ
- (4) 情操の陶冶とパーソナリティの形式
 

①価値あるものの知的理解 → ②実践を通して情操にまで高められる。 → ③真の人生観・世界観 → ④より望ましいパーソナリティの形成

<ねらい> この時間は、第1分野の「人間性の理解」のまとめであると同時に、第2分野の「人生観・世界観」への導入の部分でもある。

「児童期にあっては、人間の心的特性の形成にとって決定的な意義をもつのは育成と教育である。人格が形成されていくにつれて、自己教育即ち自分の世界観と信念をつくりあげ、自己の中に望ましい心的特性を形成し、望ましくないそれを根絶するための意識的な努力がますます大きい意義を持ってくる。あらゆる人間は相当程度まで自分自身の個性の創造者なのである」とチエブロクが述べているが、この個性の創造を可能にする道程を明らかにしようとするのが本時の目的であるといえる。この道程において第2分野の「人生観・世界観」において古今東西の思想家にふれることの重要性を認識させ意欲的な学習を可能にすることができるのである。

それぞれの事象に対する価値的な認識，知識としてこれを高めることは比較的容易である。しかし感情をともなった価値的認識にまで高めることは容易ではない。不正をするとき、もうれつな不快感をともなえば、自然とその不正は行なわれないのだが、現実には情操にまでその知識が高められていないため、悪いとしりながら平然と行なわれている数多くの行為がある。

より望ましいパーソナリティは、「不正は不愉快でできない」というようなパーソナリティであろう。その形成は、まず価値ある行為とそうでない行為すなわち「いかに生きべきか」を考えるとところにはじまり、日常生活の中でそれを少しでも実践することによって、知識を情操にまで高め（知識としての人生観・世界観ではなく、情操にまで影響し、情操によって支えられる）真の人生観・世界観の確立によって可能になるのである。

この人生観・世界観は、パーソナリティ形式に中心的な意義を持っている。人生観・世界観が転換したために、その人のパーソナリティに重大な変化が生じたという多くの例のあるのもまさにこのためであるといえる。

## 〈生徒作文〉

都立練馬高等学校 2年3組

「人間性理解」の部分を読んで非常に有意義であった。人間の行動を決定するものは何かとか、それによって派生する種々の心理など、今までは感覚的にとらえる事しかできなかったが、学ぶことによってもっと学問的に体系的にとらえることができるようになった。特に興味深かったし感銘を受けたのは青年の課題ということであった。青年の課題、それは一口にいうと価値体系の発展・確立ということである。シュブランガーによると人間の型は経済型・権力型・審美型・宗教型・社会型などにわけることができるという。今までわたくしは自分がどういう型の人かということがつかめなかった。けれども、自分で研究した結果宗教型に属することがわかった。宗教型になったのは思春期に入ってからで、その頃から価値というものを非常に大切に考えるようになった。いかにして最大の価値を有する生き方をするかということが今後のわたくしの課題である。

見かけはきれいでも中身がとぼしいもの、見かけは悪いが中身は良いもの、あるいはその中間のもの、この世の中にはそういうありとあらゆるものが無数にころがっている。そしてその中から真に価値あるものを見出し、自分の身にうけなければならないと感じた。けれどもこれを決定するのは個人の主観である。主観は人によって違うから、各人の価値体系もちがってくる。だから主観をみがきあげる（憎操をみがくことにもなる）ことが必要だ。そのためにはソクラテスもいっているように「汝自身を知れ」ということだ。人は結局自分を知るために生きているのだということが、だんだんにわかってきた。人生の目的と手段は同じなのだと思った。生きるために生きる、勉強するために勉強するのだ。「人間性の理解」を学んで、わたくしにも、人間というものが、おぼろげながらわかってきた。

## 〈生徒作文〉

都立練馬高等学校 2年6組

この「倫理社会」を学びはじめて、まだ幾月もたらないが、おもしろくて仕方がない。

自分の無意識のうちの行動がその原因となるものを、自分で知ることができるようになったからである。わたくしの欠点も、これなら直せるという自信もでてきた。また他人の行動に対しても、冷静な判断ができるようになってきたと思うのである。

よいと思うことはたくさんあるが、まずは以上のような事であると思う。毎時間、聞くことすべてが、どこかで自分の経験していることであり、他人事ではないおもしろさについ夢中になってしまう。自分の性格の形成についても何だか納得のゆくようになってきた。そして自分の悪いところはわたくし自身で直してゆき、また自分のパーソナリティをよりよく形成しようとする積極的な生き方にもなってきたように思う。

毎日の生活に対してもどん欲になってきた。むさぶるように片ぱしから読書をし、良いといわれるもの、美しいと思われるものを逃がさず見て、自分の考えをまとめるようになったと思う。他人事であったことが、自分の人格形成の為に他人事ではなくなったように感じはじめた。

「倫理社会」がわたくしのこの16年までの殻に穴をあけ、何か新しい空気を入れてくれたように思う。私の生活態度を大きく変えてしまったといってもよいと思うのである。

## 友 情 (一時間分)

都立王子工業高等学校 教諭 仙崎 武

## &lt;授業内容のまとめ&gt;

## (1) 青年の情熱

情熱……青年期に特徴的な友情の根柢にあるもので、「感情がひとつの方向に強く働く場合のもの」

{ 情熱が強い }  
 { 情熱にかられる } } → 青年期 = 「情熱の季節」 → 文学, 芸術作品の源泉  
 非常識になりやすい → 理性によるコントロールが必要

## (2) 青年と友情

① 友情……情熱が友人に向けられた時に生ずる

友人に対する感情的な共感 → 差異の交換 → 寛容・努力 → 友情のたかまり

② 友情のさまざま

{ 年下の者に対して……指導力・責任を学ぶ(事例)  
 { 成人に対して……畏敬・思慕を学ぶ(“)  
 { 先輩に対して……依存・服従を学ぶ(“ )

## (3) 青年期と友情

① 友人と自己形成 ……友人を作ることによって自己を磨く

② 現代社会と友情 ……真の友情は激しい競争社会に生きる力になる

<ねらい> この時間は、第1分野「人間性の理解」のなかで、人間と文化人間形成の条件、など、人間はいかに行動するかという知識をふまえ、青年期の生活の現実と理想を理解させるため、青年期の心身の特徴、自我に目ざめる青年の諸問題に引続いて、「友情」を取扱ったものである。

先づ、青年期の感情生活の特徴を概説して導入部分とし、次に友情の諸問題を扱う、真の友情は、青年の情熱より発するものであることに触れ、それは相互の個性的な差異の交換において成立することや、友情の維持、促進には、相互の寛容と努力、理解と愛情がとくにたいせつであることを考えさせる。さらに、さまざまな友情の形態、歴史上、文学、芸術、伝記などに見られる望ましい事例、望ましくない事例などを調べさせ、友を選び、充実した友情に生きることが、青年期の生活をより美しくより豊かなものにする上にとりわけてたいせつであることに気づかせたい。

高校時代の生徒は、心身ともにめざましい成長の途上にあり、ゲーテのいう「疾風怒濤」の時代、また心理学でいう「試行錯誤」の時代にあたる。しかし、この心理的な動揺、振幅こそ、青年の内面的な形成を推進するかけがえのないエネルギー源であることを考えれば、自我の充実と同時に、他者への寛容、理解を基底とする充実した友情についての認識は、とくに重要な意味をもつものといえよう。とかく抽象的思考に不慣れた生徒が多いので、出来るだけその実態や経験に訴えて正しい観念を形成させる配慮が必要である。

露出したエゴや誤った自己愛に促われて私利私欲のみを追及しがちな競争的現代社会において、「友からその名に恥じないものを求め、友のためにその名に恥じないことをする。求められるまで待たない。常に努力し進んで忠告を与えようとする、よい忠告は用い、忠告をうけたら従う」(キクロ)のような、友との真の友情の意義と価値を、ひとりびとりの生徒の意識の深層にしっかりと受けとめさせたいものである。

## 〈生徒作文〉

都立王子工業高校(定時制) 機械科4年

わたくし達は友人を求めている。素晴らしい友情を結びたいと願っている。その反面、友情というものがどんなに難かしく、こわれ易いかをよく知っているわたくし達が普通友情と呼んでいるのは、感情の共感である。大体において同じような考え方、行動をしている時のみ友情として確認されるが、意見の不一致をみようなら、忽ち友情は破れてしまうのが常である。しかしそれは友情に程遠いことを知った。真の友情とはお互いの差異の交換まで至らなければならない。感情の共感でさえも難かしいのに差異の交換とは、絶望的である。真の友情とは、友人同志がお互いに自分を捨てて付合うのではなくて、互いに相手の立場を尊重して認め合わなければならないと思っている。友情がどんなに人間を高めるかわたくし達は良く知っていないから、それが結べないことは大変不幸なことだと思う。現代のようにあらゆるものに利害関係が対立し、激しい闘争に生きてゆくわたくし達にとっては、ほとんど夢に近いとさえも思える。結局は表面的な感情の共感を友情と信じて、それ以上立入らない方が却って友情が長続するという風潮さえ生まれている。友情を確かめ合うことは、タブーになっている不幸な時代である。フリードリッヒシラーの小説「群盗」に書かれた友情のように極限状態に置かれてはじめて確認されるという、厳しいものであろう。幸か不幸か友情を友情と信じ切って過す時代は何か割り切れないところがある。幸にしてニーチェのように、音楽家ワーグナーとの「星の友情」と呼ばれる大変素晴らし友情を結んだ人もいるが、やがて無残にも破れてしまった。結びにくくてこわれやすい、これが友情の真の姿であろう。ともあれ天地創造以来人間は、真の友情の為に最大の努力を費やし、その反面それが不可能に近いことを悟らざるをえなかった。わたくし達も又精神の最高の世界である友情にあるゆる力を注ぎこんで、真の友情を作り上げる使命をおわされている。

都立王子工業高等学校 機械科 4年

ぼくが東京へ出て来たのは、自分の意志で上京して来たのではなかったし、高校へ入学したのも、やはり自分の意志ではなかった。何も考えず、何にも抵抗を感じる事はなく、ただ、「来てしまった」「入学してしまった」それなら一生懸命やるのみだった。ぼくは、学校へ行く事になっても、誰一人知人はいなかったし、不安な気持だったが、1ヶ月、また、一年、と過ぎて行くうちにみんなの名前も覚え、話し相手も出来ていった。でも、その頃はまだ「友情」とか「真の友」と言う言葉さえこれと言って意識もしてないし、関心もなかった。ただ、皆んなに好かれよう、約束事は絶対守る、こまってる時には力になってやる様自分で努力していた事は事実だ。同情的、常識的な事柄で相手の事を思っただけだった。だから、相手の人に、精神的に、又は、人間的にマイナスになる様な事でも、「負担」から救い出す事によって自分では満足に感じていた。むしろ、その方が相手を本当の友達と思えると考えていたからだ。でも、ここで「真の友情」と言うものを学んだとき、初めは抵抗を感じたが、人間は、日常生活においても、自己を形成していくにも、他人と言うものが非常に大事な事だと思うし、又、その他人の人柄、値うちによって、自己の「考え方」「性格」「知識」をも左右される事があるとすれば、こういう意味でも他人の中に特定の「友」を選択する事がどんなに大切な事かと思う、ぼく達が、ここで倫理「友情」について学んだ事は、ぼく達の友情への理解が大きく進歩した様に思える。ぼくにも、現在、ぼくなりに親友と言える友がいるが、倫理で学んだ「真の友情」「たがいの差異の交換」「共通のあこがれ」を、作りあげた「友情」ではなく、少しも早く育てあげた「友情」にしていく様努力したいと思う。ぼく達、大人の世界と子供の世界との境界にある青年にとって倫理の必要性と言う事が今さらの様

に感じられる。

第Ⅱ分科会  
(3時間分)

ソクラテスの思想

都立忍岡高等学校 教諭 村松 操二郎

<授業内容のまとめ>

(1) 問答法に至るまで

伝記 ポチディア、デリオン、アンピポリスの戦——ポリスの徳

(2) 問答法・産婆(助産)術

カイレフォンとデルフォイの神アポロン神託の意味——無知の知

(3) 訴人のこと

- ① 最初の訴え—アリストパネスや無知を知らされた市民たち
- ② 後期の訴え—メレトス(作家), アニュトス(手工業者と政治家)  
リュコン(弁論家) (a)青年に害を与えた (b)国家の神を認めない

(4) 法廷のソクラテス

- ① メレトスに対する反論——とくにダイモニオンについて
- ② ポリスの徳は生死の問題を超越する——アキレウスのこと
- ③ 使命観 (a)知を愛し求める (b)精神をすぐれたものにする  
(c)神の命令 (d)アテナイの「あふ」としての存在——正義

(5) 有罪——民衆裁判所——とその死

- ① 280対220票の差で有罪
- ② 360対140票の差で死刑——(a)死をさけるよりも、下劣をさける方が難しい (b)ダイモニオンに従って死を選ぶ (d)死後ハデスでの問答の楽しみ——魂の不死の問題(パイドン)

<よい人には、生きている時も、死んでからも悪いことはない>

<ねらい> わたくしは42年度の授業の中で、1学期の約10時間を、『ソクラテスの弁明』のゼミナールにあてた。1時間に2〜3ページしか読めなかったが、この時間は倫社の教師としての幸福感にひたった。7月には、そのうちの1時間分を都倫研の研究授業として行った。さて、『弁明』で、ソクラテスは、より難かしいのは、メレトスたちよりも、最初の訴人である。それらの人たちは、かれをアナクサゴラス流の唯物論者だとか、エウエノスのように金銭をもらって教授するソフィストだときめつけており、その流言が、問答法によって、無知を暴露された後期の訴人たちの訴状を有利にしたのだとべている。『弁明』は、これらの2種類の訴人に対する弁明であり、その中で、次のような点を理解させたいものである。

(1) 生徒たちは、ソクラテスが、面と向って、あなたは無知なのだという、そうした態度をさして、当然嫌われたのだらうというものが多い。それに対して、ソクラテスのいおうとする点は、神のみが本当の知恵者（アポロンは、太陽、文芸、予言の神）であり、人間の知は有限で、権力や金力は空しいということである。ソクラテスの生涯は神もしくは、麗的ダイモニオンに仕えるためであったことを十分理解させたい。

(2) ギリシア人共通の運命説というか、生死を超えるポリス倫理の優越性である。悲劇作家もさることながら、ソクラテスは、問答のアイロニーで説明する。「死を恐れるということは、知恵がないのに、あると思っていることなのです」。なぜなら、ハデスの世界については知らないからである。

(3) 生徒の感動の極点は、ソクラテスの使命観の強さであろう。ソクラテスは、真理のため、神のため、息のつづく限り、できうる限り、知を愛し求めることを止めないだらうという決意である。そして、人間の徳は「精神をすぐれたものにする」こと、「徳、その他のことについて毎日談論すること」にあるとする点において、ソフィストとは異質の哲学がそこに自覚されていたといえるのである。

## 都立忍岡高等学校 2年D組

ソクラテスの唱えた真理は哲学の根本的なものといえる。そしてソクラテスの思想や人生観は、20世紀のわれわれにそのまま相通じ、あてはまるものだと思い感心した。たとえば、問答法をとりだしても、現在、革新都政の知事、美濃部氏がさかんに『対話』を叫んでいるし、真実を悟ることがいかに重大で必要かは、選挙演説一つをとりだしてもわかる。かれらのうち、何人公約を守る者があるだろうか。それは少数であろうし、これに限ったものではない。共同体の一員としての徳などは、先日、本校の文化祭討論会のテーマとなったほど身近かなものである。自己の利益を考えずに、人の為に己が馬鹿になれるという人間があまりにも少ない気がする。ほくもできないがそれは、日本という環境の中で育っているので、考えが安易になっているのであろうと思う。ギリシア人にとって、ポリスが全てに優先するものだというプライドのある考えは、当時生きてゆく上に必要だった団結精神というものなのかもしれない。しかし、ほくも共同体の中で生活する以上、自覚の上にするべきことはできるだけやれるよう努めて行きたい。そしてこのような考えはもはや、小さなスケールの中だけで考えて行くのではだめである。当時、ポリスとしての徳なら、現在は、世界に通用する自覚を必要とする時点に来ているのではないか。次にソクラテスの生と死についての考えは「人間が生きるとは何か」、「幸福とは何か」の問題をだしていると思う。木の葉が枯れて落ちるように、死がそんなにも優雅なら、それは幸福かもしれない。ほくは以前この言葉をみて、「死とは何か」、「幸福とは何か」を真剣に考えたときがあった。結局自分なりの考えを少しつかんだだけで、それが何か、はっきり断言できなかった。でもそれは当然のことと思う。なぜなら、こんなことは永遠に定義されないだろうし、個人によって考えが違おうから。だからほくはこの事を自分なりの考えをだすために、ゆっくり時間をかけてゆきたいと思う。

〈生徒作文〉

都立忍岡高等学校 2年G組

『ソクラテスの弁明』は読むにつれて、私を不愉快にした。ソクラテスの口調は鼻もちならないものになり、いっていることも、少しをのそいては、すべてがひっかかり、どうも納得できなかった。かれは自分の言い方、態度に気をくばったことがあるのだろうか。問答法はかれのあみだしたものであるから、それなりの意義をみだしてやっていたのであろう。しかし、私にはその意義というものをみだすことはできなかった。まだまだ未熟だからだろうか。私は、この本を読んで、「ソクラテスという人間は、人間的な弱い面を持っているのに、どうして人間の弱い面を理解してくれないのだろう」と思ってしまった。弱い面であるから、そのままにしておく、というのはいけないことかもしれない。しかし、なんといっても、われわれは人間である。

人間として生まれたからには、精神をできるだけよい方にもってゆかなければならない、というソクラテスの考えは好きであるが……。

都立忍岡高等学校 2年E組

わたくしはただ、真理を追求するかれの真剣な姿にただ驚嘆した。ソクラテスは信念をもって強く生きたのだと思う。わたくしは、ソクラテスから、どこまでも真理を追求していこうとする熱意と謙虚さを学びとりたい。凡人には、たとえ容易にできないにしても、努力することだけは忘れまいと思う。わたくしは、まだ、かれのいおうとしている「徳」というものの意味がよくわからない。だから「徳は幸福である」ということに関しても疑問であるし、また反撥を感じる。またわたくしは、人間には理屈や論理だけでは解決されぬ何かがあると思う。その何かをわたくしは魂であると考えたい。それが形となってあらわれたものは芸術であると思う。わたくしは神のみが人間を救うとは言えないと思う……。

# プラトンの思想

都立雪谷高等学校 教諭 小鹿山 隆

## ＜授業内容のまとめ＞

- (1) プラトンの思想的背景
  - (a) アテナイの政情とプラトンの哲人政治への憧憬
  - (b) ソクラテスの真の後継者プラトン
 

ソクラテスの「良く生きる」ことについての小ソクラテス派の  
考えとプラトンの考えとの対比
- (2) プラトンの中心思想——イデア論
  - (a) イデアの意味 超感覚的実在——理性によってのみ知り得る
  - (b) イデアの把握 想起説——靈魂不滅、現実界とイデア界の存在  
エロス——プラトニックラブ 美に憧れる魂
  - (c) 善のイデア イデアの中の最高のもの 洞窟の比喩
- (3) プラトンの道徳論 善の実現に関する諸徳（四元徳）
  - (a) 靈魂三分説 不可死的部分——魂（理性）—不可的部分（肉体）  
(情意)
  - (b) 各部の徳 理性の徳—知恵 意志（気概）の徳—勇氣  
欲情の徳—節制
  - (c) 善の実現 三徳の調和——正義の徳
- (4) プラトンの理想国家
 

個人の徳と国家の徳の一致 国家は大きい個人、個人は小さい国

国家の三階層 統治者の徳—知恵 文武官吏の徳—勇氣  
人民の徳—節制

<ねらい>プラトンが活躍した時代（B・C411年～B・C399年）のアテナイの政情を歴史的に説明し、なぜプラトンが哲人政治を必要としたかを理解させる。これによってプラトンの理想主義的特色を理解させる。また、政治的不信感がプラトンに与えた影響を我々の問題として考えて見る。

プラトンの思想がソクラテスの思想の継承であること、すなわちプラトンの目的がソクラテスの倫理的普遍性の追求であったことを小ソクラテス派の人々の考えと対比して理解させる。

「すべての感覚的なものはそれについて知識はあり得ない」とするヘラクレイトス派の考えに対して真の知識を求めたプラトンは感覚に対して理性の存在を主張し、これによってのみ真の知識は把握されると考えた。

このことによってプラトンの思想が概念的にならざるを得なかったことを理解させる。

真の知識はプラトンにおいてはイデアとして把握される。すなわちそれは普遍的にして完全なものと考えられ理性によってのみ捉えられる超感覚的存在である。この超感覚的存在を説明するのに三角形などの例によって生徒に実感として理解させるようにする。

次にイデアの把握の方法として想起説を説明する。この際想起に重要な役割を持つエロースについての説明が必要である。理想に対する向上心として説明すると解り易いように思う。善美なるものへの憧れは青年期の特徴であり、こうした情熱の発現がプラトン哲学の精神であることを認識させることによって、そこにプラトン哲学の意義を認めさせたい。

## 〈生徒作文〉

都立雪谷高等学校（定時制） 3年0組

プラトンの思想の中心はイデア論である。イデアという言葉は元来「姿」とか「形」という意味であるが、プラトンはこの言葉によって客観的基準たる普遍にして絶対的なものを意味しようとしている。すなわちプラトンは感覚的には真の知識は得られないと考え、人間の理性によってのみ普遍的なものは認識され得ると考えたのである。従ってプラトンは感覚的認識による現象界の中には完全な知識は得られないとして、現象界の他にイデアの世界、即ち完全なる世界の存在を認めようとした。そのイデアの世界は人間の魂がかって住んでいた故郷であり、われわれの魂は常にこの故郷への郷愁を禁じ得ない。プラトンはこれによって人間が常に完全性を求めて努力精進する魂の発現を、人間の本性的なものと考えたのである。この思想の中に私は完全性を求める理想主義の本質を見いだしたように思う。かれにとって最高のイデア、到達すべき究極の目標は善であり、徳性の実現であった。元來徳（アレーテ）という言葉は卓越性を説明している。すなわち理性の卓越性を知とし、気概、欲望のそれをそれぞれ勇氣、節制とし、これらをそのまま国家の徳性として考えることが出来るとして理想国家、哲人政治の実現を意図した。かくてかれはアカデミアの教育において哲人の養成を行い、これによって理想国家の実現を図ろうとしたのである。このプラトンの悲願はわたくしに孔子の徳治主義の国家理論との類似性を考えさせるものがあるように思う。孔子もまた理想国家の実現に失敗した後、子弟の教育に専念するようになった。現実の政治と徳性は所詮相容れないものなのであろうか。しかし孔子の思想が思想として価値を持っているように プラトンのイデアの思想は理想主義の典拠として今日もなおその価値を保っていると考えらる。

プラトンの思想は観念的でわかりにくい。プラトンが政治的に失望して理想主義に走った気持はわかるが、かれの現実を軽んじた観念的な理論はわたくしに抵抗を感じさせる。イデアの世界が現実とは別に存在するということは実感として納得出来ない。イデアはプラトンによれば、現実に見える具体的な“もの”の原型で永遠に変わらない完全なものと考えられている。だからそれは人間に真に内在するものであり、目に見えない、いってみれば現実を超越したものであって理性によってのみ把握出来るものである。わたくしはこういう現実の世界を認めないで内面のものこそ最高のものだという考えに同調出来ない。現実を越えて内面的なものを把えるということは所詮むなしなものに過ぎないと思う。それよりも現実をみつめ、改善し、それが不安定なものなら安定へともって行くことにより、はじめて内部の世界に踏み込めるものだと思う。人間はとうてい理想の中の完全な世界に住むことは出来ないのではないか。その理想を追いながら現実を見つめ、これを改善して行くことが大切であると思う。だから理想が現実とはなれるようなことはないと思う。一つ理想を達し、また次の理想へと追いつながら成長するのが人間であろう。美を求めるエロースはだからわたくし達にとって大切なのである。この常に求めてやまない魂の存在こそわたくし達を向上させる原動力である。不完全な現実を改善して、より良いものにし得るのは、この魂を失わない限り可能である。究極的なものはこれだといひ切れるものはないのではないが。それはわたくし達が現実の中から一步一步作り出して行くものだと思う。もっともプラトンのイデア論が、あの時代において感覚的なもの以外に理性的なものの存在を認めさせ、理性が常に現実の不完全さを知り、それを越えた正しいものを求める力であることを主張した事がプラトンの卓見であり価値ある所だといえるであろう。

# アリストテレスの思想 (1時間分)

都立杉並高等学校 教頭 秋山 明

## <授業内容のまとめ>

### (1) プラトンとアリストテレス

- ① プラトン 個物からはなれたイデアが存在する。 超在論  
 ② アリストテレス、エイドスは個物の中にある。 内在論

### (2) 質料と形相

- ① 質料……可能態 —— 個物 —— 手段  
 ② 形相……現実態 —— 普遍 —— 目的 } ……目的論的世界観

### (3) 最高善, あらゆる人間は最高善を追求している。最高善 = 幸福

幸福とは何か { 享樂的生活の富・健康・快樂 } 幸福の要素ではある  
 { 政治的生活の名誉・地位 } が真の幸福ではない  
 観想的生活, 理性に即する活動 = 神的生活 = 真の幸福

### (4) 徳 ①知性的徳 技術・学問・理性・知忍・思慮(教育により発達)

②倫理的徳 勇氣・節制・寛容・豪壯・矜持など

(反復実行することによって習慣化され性格化される)

中庸性, 勇氣は臆病と無謀の, 節制は放じゅうと鈍感の中庸

### (5) 政治論①君主政—僭主政 ②貴族政—寡頭政. ③國憲政—民主政

### (6) 国家道徳

- ①正義 { (a) 全体的・全般的主義……………導法  
 (b) 個別的・部分的正義 { 配分的正義 } ……均等  
 { 整正的正義 }

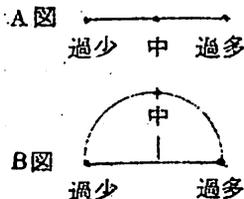
②友愛 生にとって最も必要なもの。正義以上のもの。

<くらい> (1) **現実主義** プラトンは、感覺的個物はイデアの影であるとして輕視した。アリストテレスは、個物の中にこそ形相があるとした。プラトンは理想主義者といわれ、アリストテレスは現実主義と言われるが、後者は理想を否定したのではない。

(2) **観想的生活** ギリシヤ語のテオリアは元來は見るという意。肉眼でなく心眼で見ること。二通りの見方がある。①理論的にみる。②宗教的にみる。①の場合かれは学問を理論学・実践学・生産学の三つにわけた。理論学では存在をあるがままに見、あるがままに客觀的の眞實を知る。②の場合。神は全知全能全善不死で神こそが至福である。人間は不完全な存在であるが、神的な理性をもっている。この理性に即して活動し、理性を愛育する人は神に愛される。神に愛される人間が最も幸福である。これは哲學者のみにゆるされている。

(3) **中庸** 倫理的徳の中で、中庸は善で、過多と過少は悪である。例えば勇氣という中庸も、過多になると無謀となり、生命財産さえも危険にさらしたりする。中庸は大切であるが、単に過多と過少の中間というくらいの意味にとると平凡な常識論でしかない。だからカントもこの「中庸論」を批判して「全く一定の原理をもたない淺薄な知恵を含んでいる。」といっている。しかしこの批判は當っていない。「中」には二つあ

ることからそれ自身に即しての「中」と、われわれへの関係においての「中」とがある。前者は機械的、存在論的(A図)で後者は價值論的(B図)である。アリストテレスはもちろん後者を意味した。



(4) **配分的正義** 價值によって配分の差をつけるべきだとしたのが配分的正義である。人は生れながらにして賢愚・善悪・強弱・勤惰等の差があり、後天的に、環境・教育・本人の努力等によって学識・人格・功績等に差が生ずる。勤勉な者には、怠け者に与えるより多くの報酬を与えるのが正義だとした。

〈生徒作文〉

都立杉並高等学校 2年2組

かれの思想のうち「観想的生活」，すなわち「人間最高の生活は，知恵による真理の探究，認識である」という考えには特に興味をもった。かれはこの点で，哲学者が最も有徳で幸福であるとしたが，現代では科学者もそうではないかと思う。科学者と哲学者とは大同小異である。

また，かれの政治論における正義（特に配分的正義）の思想には注目したい。各人の能力と地位にふさわしく名誉や利益をわけるといふ考えの中で，かれの言う「地位」というものは，能力によってきまるもので，世襲のものではないとわたしは思う。かれの思想では，能力の相違が社会への貢献度の相違となって現われ，それによって階層差が生じることになる。階層差は社会の秩序にとって必要なものだし，どんな社会機構のもとでも生じるものだ。

都立杉並高等学校 2年5組

はじめに最高善について。「最高善は幸福であり，その幸福というものは，快樂・富・健康などではなく，人間としてよく生きることである」ということには賛成である。しかし，知恵を愛する人すなわち哲学者のみが幸福だという点は疑問である。幸福はだれでもいつでも得られるものだとなつてはわたしは思う。次に現実主義には賛成である。プラトンの理想主義ではだめだ。理想をいくら考えていたとしてもそれだけではどうしようもない。われわれにとって大切なのは，今の現実をどうするかということである。

哲学史上には，師の思想をうのみにして師と同じことを唱える者が多いが，かれは，師プラトンとはちがった思想を考えて，さらに一段と発展させたのはえらいと思う。

## 都立杉並高等学校 2年5組

アリストテレスの現実主義には、わたくしは共鳴する。プラトンの考えのように、人間が現実の中に、真実を求められないとするなら、現実の人間としての発展も何も皆無意味となってしまう。しかし、アリストテレスの現実重視の考え方によれば、人間は発展しつつある現実の世界の中に、真実を見出すことができる。プラトンのように、いたずらに高遠な理想を求めて、現実で満足できないでいるより、現実のうちに、人間性を離れることなく真実を見出すことの方が、人間として幸福なのではないだろうか。

次にアリストテレスは、民主制を「ポリテイの退廃した姿である」と述べたが、わたくしにはこの考えは理解しにくい。またかれは、貴族政治を支持しているが、それは、人間のあいだに不平等を認めてしまうことになりはしないか。かれは一体、人間の平等や基本的人権について、どのように考えていたのか。

## 都立杉並高等学校 2年8組

アリストテレスの現実主義を身近な問題として話し合い、考えることはできないものだろうか。わたくし達はしばしば日常生活において理想と現実の矛盾という壁につき当たる。例えば大学入試準備教育・就職試験開始時期の問題など。それらに突き当たった時どのように考えかつ行動するかによってわたくし達はその人が現実主義者か否かを簡単に判断しがちである。わたくしは友人から「現実主義者」というらく印を押されてしまった。果してそうだろうか。わたくし自身、現実主義者とは何かを明確に認識していない。これらのことを正確に深く理解するためには、遠い昔のギリシヤの哲学者、とくにアリストテレスの哲学を徹底的に学ぶことは、誠に必要不可欠のことであると思う。

# エピクロスの思想 (1時間分)

都立桜水商業高等学校 教諭 佐々木 誠明

## <授業内容のまとめ>

### (1) ヘレニズム時代のアウト・ライン

#### ① 社会的状況の特色

ポリスの崩壊 → 政治的混乱・不安 → 政治思想の喪失

#### ② 精神的状況の特徴

一般庶民…… { 運命の女神崇拜, 各種の秘儀宗教へ逃避。  
奢侈・淫靡の気風に陶醉

教養人………新しい哲学へ(生の支えを個人の内心に求める)

### (2) エピクロスの思想

#### ① 快楽主義の倫理説

(a) 人生の目的 — 幸福の獲得におく。哲学はそのための手段

(b) 幸福こそ最高善。具体的には、幸福=快楽

#### (c) 快楽の区別

積極的・動的快楽……苦痛を伴ない易く、望ましくない。

永続的・静的快楽……肉体に苦痛なく、魂にわずらいのない真

の快楽 → アタラクシア(心の平静)こそ理想の境地。

#### ② 「隠れて生きよ」 — 生活のモットー

(a) 「エピクロスの庭園」における友愛に満ちた共同生活

(b) ここでアタラクシアが得られる — 政治・公生活からの逃避

#### ③ 利己的快楽主義の功罪 — 現代社会の政治的アパシーとの対比。

<ねらい> 一つの思想が生まれるときには、当然それがあらわれるべき必然の理由をもっているはずである。エピクロス思想も、かれの生きた時代的環境という背景をぬきにしては語るができない。

そこで、まず、当時のヘレニズム時代の社会状態・精神状況の特色を十分に把握させる必要がある。ふつう、ギリシア哲学の母胎であるポリスの崩壊したのち、コスモポリスの観念が生まれ、人びとにはコスモポリスの一員（コスモポリテース＝世界市民）としての自覚が生じたとよくいわれる。

しかし、コスモポリスという観念は、哲学的・非政治的観念にすぎず、現実的に世界国家を構築しようとするものではなかった。したがって、その意味するところは、ポリスの消滅という意識であり、そこには一個人の存在だけを信ずる意識、いかえれば、生きる支えは結局自分しかないという個人主義の考えが濃厚にあらわれている。この点を指摘することが重要である。

こうして、かれの思想では、従来のギリシア思想の伝統と異なって、哲学は真理発見の道ではなく、幸福獲得のための手段に転化していることに注意すべきである。その理由は、上述の事情から考えさせれば効果的であろう。

かれは、人間の自然的傾向として常に快楽を求めて行動するところから、快楽こそ幸福なりとおさえた。しかし、快楽といっても、過度の飲酒・美味美食の追求が、かえて後に、苦痛を招き易いのが常であることから、むしろそうした贅沢への要求は極度に抑制して、僅かに生存を全うし得るだけのものさえあれば満足だという心境に徹したとき、至高の快楽が得られると説いた真意を深く考えさせるとよい。その点、世にいうエピキュリアンとの相違について触れておくことは、きわめて大切である。

かれの快楽説は、公共的政治社会から隔離した場所で始めてその達成が可能となるのであり、この意味で完全に逃避的、利己的快楽の追求といってよいが、これは現代の日本のマイ・ホーム主義とする意味で似ている点がありそうだ。我が国に真の政治理想が確立しているかどうか、ともに考えたいと思う。

## 〈生徒作文〉

都立桜木商業高等学校 3年2組

ポリスの衰退時期に現われたこのような理想と現在の日本の状態を比較して考えてみよう。

ポリスという社会の崩壊により、かれらにとっては、理想とするものが、国家という単位から個人という単位に戻ってしまった。このことは、現在の日本の国家としての理想のなさによく似ている。日本では、一般大衆は政治への関心を失ない、競輪・パチンコ・マージャンなどの娯楽へ関心をむけている。これは単に、この二つの時代だけの特徴ではない。歴史を見ると、国家の衰退期には、必ず娯楽というものが流行するのである。

では、個人的幸福の追求にばかり熱心で、政治に関心をもたないことが、なぜよくないのか。これは単にある限られた少数の人物によって政治が運ばれるという点で危険なのである。かれらにとって、一般人民の政治的無関心は願ってもない喜びなのである。それはつまり自分達だけで政治を選べるといふ点で。

エピクロス派の人びとが、永続的な精神的快楽に幸福の理想を求めた気持は、当時の時代的背景を考えれば、理解できないわけではない。しかし、そのために政治に無関心だと、ある朝起きたら、自分達の生きる権利さえ奪われているということもあるのである。

現在の日本には、まだまだたくさんの不十分な点がある。われわれは幸いにも食べる心配はない。しかし、現在でも明日の食さへはたして得られるかどうかという人がまだまだたくさんいる。誰もが心配なく生活できるような世の中をつくるには、政治への関心は常に必要である。

このような点において、わたくしはエピクロス派に見られる個人的幸福を最高善とする哲学を批判し、このような考えかたが生まれでてくるような社会を批判し、まず健全な社会をつくることに努めなければならないと考える。

## 都立桜水商業高等学校 3年9組

われわれは、まだ「戦争」などという国家の不安定な状態を知ってはいないので、エピクロス派の思想を「利己的な」、卑怯なものだと断言する資格はないと思う。

もし、わたくしがそういう政治的混乱の立場におかれたとき、現実に向かってぶつかっていくことができるか？ 国家を少しでも良くすべき努力ができるか？というとき、「絶対に!!」と確信はもてないのだ。

「かくれて生きよ」……これに従うかもしれない。人物の弱さのような気もする。少しでも柔な方向へ向おうとする……。

人生観としてこの思想をとり入れようとは思わない。今はそう考えるべき時期ではないような気がする。多分、わたくしの奥底に、「その時となったら仕方ない」という考えがあるのだろうが……。わたくしってずるいかな。

## 都立桜水商業高等学校 3年2組

人間として、個人的幸福のみを追求してよいものだろうか。現害逃避、たしかにそのような気持にならざるを得ない時代背景であっても、それをのりこえなくてはならない。どうにもならない気持、それは誰にでも起るし、それが一生続く人間なんてまれであると思う。時がたつにつれて、それらの気持はやわらいでいくものと思う。だからエピクロス派のように、一時の辛さから逃れて、「かくれて生きよ」という別生活に満足して、人間の住む世界をのそくことを避ける気持はよくわかるが、生きていく上で卑怯者のような気もする。自分たちの社会だから、自分たちの政治に関心を示さなくてはいけない。自分たちの手でやっつけていかなくてはいけない。社会全体の幸福と個人の幸福とは互にかみ合っている歯車のようなものである。両方がいつも一緒に廻っていてこそ本当の歯車であって、真の幸福が得られるのである。

## ストア派の思想 (1時間分)

都立桜町高等学校 教諭 西村 忠

### <授業内容のまとめ>

#### (1) 時代の背景——戦乱動揺の時代

ポリスの衰退没落, アレクサンダー大王による大帝国の出現

ローマ帝国の建設

#### (2) ストア哲学の課題

安心立命の境地に到達すること アパティア(不動心)の境地に至ること  
アパティアの心=運命の転変に動じない心

#### (3) 人生の見かた

自然や人生 → ロゴスが支配している

ロゴス=すべてを合目的的に支配する法則 → 神の摂理 → 神そのもの

人生のロゴス=必然的なもの, 運命的なもの 理性によってとらえた, 正しい生きかた 人間の生きて行くべき理想

#### (4) 人生の生きかた

① 根本的な態度 → ロゴスに即した生きかた, 理性に従って生きる,

自然(ロゴスが支配している)に従って生きよ

② コスモポリスの考えかた: すべての人間は理性をもつから同胞で,

同一国家の市民である

③ ストアの生きかたの典型

アグリッピヌスの態度(「人生談義」) 「提要」から(「同左」)

<ねらい> 一ばんのねらいとしたいのは、ストア的生きかたを、自らの生活の中で、体得的に理解させたいことである。このことは、ストア派の思想が、思弁的・理論的・世界觀的よりは、実践的・人生論的な性格をもつから、可能であり、必要なのである。時代の背景を、深入りせずにとりあげるのは、なぜ、個人主義的・人生論的な考えかたが生まれてきたかを理解させるためでもある。そして、同時に、なぜ、コスモポリスの考えかたが生まれてきたかも、理解させるためでもある。せまいポリスの解体は、個人の自覚を生みだし、同時に、全人類を一つとする考えかたの背景となったと解釈されるのである。ストア的生きかたは、運命に従容して生きるところにあるが、それは、理性意志に従う生きかたである。というのは、運命の転変に苦惱するのは、自己の情念であり、運命のどうにもならぬのを洞察するのは理性であり苦惱する情念を克服するのは、理性だからである。ストア派が「自然に従って生きよ」と説くのも、自然や人生には、ロゴスが支配していて、すべて、そのロゴスの必然の展開なのであるから、自然に従うとは、それを支配するロゴスに従うことである。したがってそれは、理性に従って生きることでもある。そして、自然のこのような理解のしかたは、すぐれて、ギリシア的であって、自然法の根本をなすものである。

上のようなストア派の考えかた、生きかたを具体的に理解させるためにはエピクテトスの「人生談義」からの、アグリッピヌスの態度と、「提要」から、具体例を引きたい。アグリッピヌスの所へ、皇帝ネロが、有罪にしたという知らせがあった。死刑か追放かとき、追放と聞くと、かれは、平然として、いつものようにふるまうのである。この場合のロゴスは、有罪とされたこと、追放されたことであって、現時点では、いかんともしがたいこと、取り乱してもしかたのないことであろう。そこから、あらためて、どうするかを思慮し、運命を切り開くために、一步前進しなければならないのである。

## 〈生徒作文〉

都立桜町高等学校 2年0組

アレキサンダー大王によって世界性をおびたヘレニズム世界が形成されたが、その反面人びとは自己の内面へと目を向けるようになり、自己の完成、自己の幸福を中心問題とし、自己の精神生活を安定させる哲学的確信を追求するようになった。そこでストア派は理性によってのみ生活することが精神を安定させ、それが人間の本当の幸福であると考えた。確かに精神の不動の状態は人間にとって幸福な状態であると言えるが、その状態に至らせるのは理性だけの生活ではない。現代の科学によって、あらゆる角度から人間を見たとき、人間の理性の奥底に理性だけでは解決することのできない本能の存在を明らかにしている。そして古人たちもそれを感じていたのであろうが、それは自然の法則にとってはどうでもよいものと考え、快を排除した生活をした。そしてそれが自然に従った生活としたが、人間を根本的に支配しているものはやはり本能であるから、その欲望などを無視することは誤りである。しかし本能だけで生活することも誤りである。そこでその欲望・感性などを抑える理性が必要となるが、そこにおいても葛藤が生じる。わたくしはストア派の人びとがこのようなことを感じなかったのかと不思議に思える。しかし現代の人間はそのことによって人間性の矛盾を感じるが、それを超越する意志の力を持って、初めて心が安定すると思える。ストア派において、欲望・感性などを肯定しなかった点が誤りであったように思える。現代においてはそれらを肯定し、意志の力と理性によって生活することによって、自己の完成となるのではないだろうか。そしてその自己の完成によって得たものを持って、われわれは現代の複雑な社会に目を向け、よりよい社会を形成する必要がある。しかしわれわれ高校生は社会批判より自己の形成に対して、重点を置いたほうがよいと思われる。

わたくしは人間の本性には どうすることもできない欲望や感情が潜んでいると思います。わたくしの肉親あるいは友が死んだとします。「神の定めである。人間がいつか死ぬのは どうしようもないことなのだ」そう考えて悲しみが消えるでしょうか。愛する人を永久に失ったことを悲しまずにいられるでしょうか。こんな場合には「自然の摂理に従うところの徳」というものに疑問を感じます。

喜び、悲しみ、そして欲する、そこから何かを学び取るのではないのでしょうか。そういうことは人間の美しい面となり得るし、美しい人生のドラマであると思います。自然に、理性に従って生き、欲望も感情も忘れた人、こういう人をわたくしたちは「人」と呼ぶのでしょうか。仙人か、神様か、あるいは自分にうそをついている人かもしれません。人間の理想を考える時、かれらの生き方に徹することのできない。ほとんどすべての人間はどう生きれば良いのでしょうか。

激びゆく世界と新興する世界との激しい混乱の中にあって かれらが個人の内面の自由、平和を求めた気持は自然です。そしてまったく対照的なエビクロスの学え方にもその共通性があることがわかります。激しい激動の時代そこに生きる人間が真実を求めようとする気持は何よりも強いものだと思います。つまらない事、ささいな事にも悩んだり苦しんだりする、それはいつの世も変わることがありません。ストア主義が打撃を柔らげ 安らぎを与えてくれることもあるでしょう。わたくし達がちょっとテストで悪い点を取ったり、受験恐怖症になったりするような時に。平和な世の中に住むわたくし達は、ある時はストア主義を全く忘れ、ある時ふとまた思い出さうです。

# イエスの思想 (2時間分)

都立府中等高等学校 教諭 沼田 俊一

## <授業内容のまとめ>

### (1) 聖書とは —イエスの思想を知るために—

聖書は信者にとって「教えのために、いましめのために、矯め直すために、正義を教えるために」(ティモテオ後3・16)神が人間に送った手紙である。それは同時に天からの声、倫理の基準とされている。

### (2) 旧約聖書 —旧約新約の意味の違い、関連を理解するために—

① 旧約……キリスト紀元前に書かれた本が属する。

新約……キリスト紀元後に書かれた本が属する。

② 内容的には

(a) 旧約……救生来臨の予言、その準備(歴史、教訓)

(b) 新約……イエスの生涯、死去、復活、その教え

### (3) 福音書に見られるイエスの思想

① 福音書……イエスの生涯、奇跡、教理を記す四書

② 神の国……マタイ13章のたとえをもとに神の国をどう考えていたかを記す。

③ 終末論……ルカ17章の後半を参考にして最後の審判、神の国との関連について話す。

④ 隣人愛……マタイ22章、ルカ6章(資料書に含まれている)を参照させて理解させる。

⑤ 山上の垂訓にみられる「さいわい」について考えさせる。

<ねらい> (1) キリスト教のアガペーの愛は、何か自己犠牲的なニュアンスが強すぎて非人間的と思われ、ついていけない気がする。

(2) 愛の本質は暖かい心と心の触れ合いにあり、対話を育くむ心そのものである。アガペーの愛は相手の応答を期待せず、一方的に対話を続ける心である。それだけにアガペーの愛は普通の人にとっては不可能であり、神の支えが是非とも必要になる。自己犠牲的な非人間的な愛とはこの世的な表現であり、それを突き抜けたところで限りない神の愛(の保蔵)に委つけられて、はじめて可能になるのではなからうか。

(3) キリスト教の神は人格神である。人格神とは神が人間としての属性をすべて備えているという意味である。それゆえに、神を人のように愛することができるし、神もまた人を愛するといわれるわけである。神がペルソナであることは他の宗教に比べてキリスト教の大いなる利点であった。

(4) アガペーの愛は人が神に近づいてこそより可能となる。そしてより可能になればなるほど、世俗的な生活や考え方から遠ざかることになる。

以上は、イエスの授業に際して<ねらい>としておたくしが書きとめておいたものであったが、実際に講義として使うことは殆んどなかった。というのは本年度はグループ発表を中心とした授業を実施していたからである。あらかじめ割り当てられた項目を7人1班の者が発表し、提出された事項について各班で討議する形態をとった。そのためある組では山上の垂訓の「幸い」は何を意味するのかに論議の焦点が集まり、またある組ではアガペーの愛はわれわれ平凡人に実際可能かという深刻な問題が討議されたりした。こうした方法は組によって指導内容に多少の差異はできるが、それにも増して生徒の一人一人が真に思考を深めることができるという大きな利点を持つ。授業がよく印象に残ったらしいことは11月の読書課題に福音書を選んだ者がかなりの数あったことで証明されよう。限られた倫社の授業だけで多くを教えるのが不可能だとすれば、適当な読書指導を並行して行かせるべきであろう。

ぼくは、これまで聖書を、いやキリスト教などというものは、全く無縁のこととみなしていた。神への愛や信仰によって悩みを解決しようとするのは、それによって自分をごまかし、ずるい人がとる最低の行動だと思っていた。人間である以上一度は(あるいはもっと)他の何ものでもないただ一つのことを求めなければ堪えられないような時があるのではなからうかと思った。それは、その人が弱いからではなく、真の人間となるために当然のことではなからうか。そして今から2千年も前のユダヤ人の心の中にも、今に生きるぼくらと同じ何かがあったに違いない……。

「神を信ずる者はすべて救われる。そして、その信仰は、隣人を愛することによって実証される。」これがキリスト教の基礎となっている思想だと思う。そしてルカ伝にもあるように「神様、罪人のわたくしをお許し下さい」とみずから自分の罪を認め、自覚し、それを改める者が、神に救われるのである。人間は重い罪を負って生れたのだから、自己の努力や功績などでは救われず神の子イエスを信じることによってのみ救われるというのである。『ローマ人への手紙』で「義人はいない、ひとりもない」これこそ、いかに人間の背負っている罪は大きいかを示している。……

「こころの貧しい人は幸わいである、柔和な人たちは幸わいである」ぼくも、これを理解することは不可能ではないかとまで考えた。たぶんこれはこんな風ではないかと思う。人を愛するのにまず自分自身から、不純な欲望・利益・損得などを取り除いて、自身を空虚にしてからはじめて、人を愛することができるのであり、要するに、神の愛に応えることになるのである。そこで「神の国」に一段と近づくわけである。だから、それができた人は幸いだ、といっているのではないだろうか。……

## 都立府中高等学校 2年3組

わたくしが教会へ通い始めたのは、小学校3年の頃でした。やがて中学高校へ進むにつれだんだん神のすばらしい教えを考え、時に感動するようになりました。しかし近頃はあまり信仰のことも気にとめていなかった日が続いていました。……しかし倫社でキリスト教について発表することになってわたくしは、キリストから離れていた自分を恥かしく思いました。「罪」について発表している自分を本当に罪人だと思いました。今までキリストを離れていたわたくしを神はもう一度ひきもとそうとなさったに違いないと思うのです。そしてこの読書課題を機に、もう一度聖書の教えについて考えてみようと思ったのです。……読んで理解に苦しんだ点の一つにマタイ9章14～17節があります。イエスが食事の席についておられた時、ヨハネの弟子たちがイエスのそばにやってきて「わたくしたちが断食しているのに、なぜ、それをしないのですか」とたずねました。わからないのはそれに対するイエスの答です。3つの例で答えられています。どういう意味のことでしょうか？……マタイ10章34～37節もわかりません……これは「何よりもまず主なる神を愛せよ」ということの教えであると思いますが、そのために父母、息子、娘たちと敵になるのを神が望まれるはずはないと思います。そのもう一度裏返したところの意味を教えてください。

最も感銘を受けた点は、やはり二つの戒めです。この二つの戒めを守ることができたら、その人は信仰者としての条件を半分以上備えていると思います。隣人を愛することは、わたくしたち一般の人にもできないことではありません。この教えをもし世界中のすべての人が行っていたら、人とはアダムとイヴが住んでいたエデンの園のように、神によってつくられた美しい平和な園に住んでいられるのになあ、などと思わずにいられない気持になってしまいます。

(註) レポートは普通レポート用紙2～3枚にまとめさせている。

# 釈迦の思想 (3時間分のうち第2時)

都立墨田川高等学校 教諭 細谷 齊

## <授業内容のまとめ>

(1) 釈迦とは 本名ゴータマ=シッダルタ仏陀とか釈尊とか仏尊と尊稱  
 仏陀 (buddha) とは「目が覚めた人」「真理を悟った者」を意味する  
 釈迦族の王子、何不自由のない暮らし、但し母は幼時に死亡 → 長じて  
 人生に対し無常心をおこす、この世は苦であるく一切皆苦>と自覚  
 一心からの安らぎと真理を得たい → 出家(四門出遊)するに至る  
 The Great Renunciation 世俗的なもの一切を放棄し修行に専念 →  
 苦行から禪定へ → ついに解脱する〔涅槃に入る、大悟成道する〕

### (2) 釈迦の教えとその体験

人間(人生)には苦しみがある(生病老死一人間の苦の事実) その  
 原因は何か → 渴愛(煩惱)物事に対する執着心(人間個体の錯覚的我  
 執作用にある。→ 故に渴愛を滅却せよ、そこに人間精神最高の境地あり  
 ・涅槃(ニルバーナ)の境地…渴愛(煩惱)の火が焼き尽くされた寂  
 静の世界(自己の心身活動が、何の障害や誤りなく、自由自在にふるま  
 える境地)

(3) 原始仏教の教義 根本的立場…自己と法をよりどころとせよ。

	諸行無常	現實世界	苦諦(果) …五蘊 (色受想行識)
四	諸法無我	現實世界	集諦(因) …十二緣起
法	一切皆苦		滅諦(果)
印	涅槃寂靜	理想世界	道諦(因) …八聖(正)道(中道)

<ねらい> 本時はウパニシャッド哲学を復習した後、人間は精神的にどこまで高まり得るものなのか、また本当の幸福に至るためには、どのような実感、体験に励むことが必要であるのかについて、釈迦の生き方とその教えを手掛かりにして考えさせる。そしてこの際に、通俗的な仏教観念や釈迦の人間像についての誤謬を指摘し、正しい認識を得させることをねらいとする。

今日の高校生は一部の特別な者を除けば、一般に宗教に対し強い関心を持っているとは思われず、まして原始仏教の祖釈迦の人間像やその教えの中に、自己の生活の指針や理想像を見つけようとはしない。しかし乍ら、釈迦の教えには、キリスト教などとは全く異なる人間の実践道が示されており、その徹底した世界認識と実習体験は、共に是れ凡夫たるわたくし達にとっても学ぶべきものであり、学ばねばならぬものを含んでいる。釈迦は現実の現象的世界の一切を苦であると認識した。人は健康で富があり、世の中平和であれば、これでもう満足、この世は快(楽)にみちていると思いがちである。しかし、これらのことはよく考えてみると仮りのものなのではないか。人は死にたくなくても年老いて死ぬ。誰か死人を見て無常心を催さぬ者があるうか、否死ぬばかりではない。わたくし個人の日々の心身活動を考えるならば、常に愛欲の波に、極端から極端に動揺し、気の休まる場所がないではないか、たとえ身に余る財を持っているとしても、心からの満足が得られず、忽ちのうちに老い果ててしまふとしたら、人間の生活とは、否そもそも人間とは何なのか。人間精神の真のあり方はどのようなものなのか、人間の精神の目覚めというのはどういうことなのか、そのためにはどのような実践が考えられるのか。以上のような問題を提起し考えつつ、上記の<ねらい>を指導して行く。そして、凡夫たるわたくし達にとっては、一足飛びに釈迦の真意を理解することも体験することも不可能であろうが、日々の精神を努めて行くことによって、人間精神が高まり得た最高の境地<釈迦の体験>が実感的にとらえられる日がくるかも知れないことを強調する。

〈生徒作文〉

都立墨田川高等学校 2年H組

〈鐘の音〉

無神論者のつもりのおたくしも今年の除夜の鐘は、何か新たな気持でもって聞いた。つい先日めぐり違った釈迦のことが頭にあったからであろうか。いや何よりも、精神的に大きな動揺期にあり絶えず欲望の渦にあるおたくしにとって、考えさせられる事が多くあったからであろう。人間に纏はる百八の煩惱を追い払うために、力を入れて打たれるその鐘の音の中に、何かなんとも言えない安らぎを覚えるのは決して単なる宗教上の問題からではないと思う。釈迦を宗教家や哲学者として見る人は多くても、真の人間として見る人は少ないのではないだろうか。かれは神と民との仲介人ではなかった。救世主でも造物主でもなかった。むしろかれこそ紛れもない人間だったのではないかと思う。

王子という当時の最高の社会的身分に生まれ、それに甘んじて一生を送ることは容易であったろう。しかし、あえてそこから脱出し「四諦」を理論づけ実証したことは、かれの非凡なる才によるものだろうが、それ以上にかれが人間として生きてゆくことに忠実な姿勢にあったからではないだろうか。勿論おたくしは釈迦の一面の否定的な観念に少々反発を覚えるし「苦」ということについても疑問はある。おたくしは若いし、夢もある。欲望もたくさんある。社会の荒波にもままれていない。だから、かれの言う「苦」や「涅槃」の世界はわからない。本当の苦しさというものも。しかし、十何年か前に父の膝の上で訳もわからずに幽かに聞いたあの鐘の音と、今こうして聞くそれとは随分違っている。そして、十何年後かの鐘の音はもっと違って聞えるだろう。そして違った意味で何かを語りかけてくれるだろう。その時、おたくしは今よりもさらに深く釈迦を理解できるのではないだろうか。……

わたくしたちの多くは現在宗教に対して無関心である。無関心であるばかりでなくわたくしなどは一種の嫌悪感さえ持っていた。それは一部の宗教団体に対する嫌悪からきていたのであるが、自分の側を見るだけでも、現在仏教がいかにゆがめられているかが、思い知らされたような気がする。倫社の授業がきっかけになって、はじめて仏教を考える機会を得た。わたくしの心も、宗教を求めていた。仏陀の得た「悟り」とは、いったいどんなものであろう。この最も大切なところがまだわたくしにはわからない。「迷いの消去にいたる道の真理」が、どうしてもわからない。もちろん、一冊や二冊の本を読んだだけでわかるうとするのが、無理なのだろう。しかしそれ以上、どうしたらいいのだ。仏陀の生涯は興味深かった。そしてその人からは、あらゆる人に対しても決して怒りを示すことなく、常に温厚で優しい態度を変えなかったという。その落ち着きは、どこからくるのだろうか。仏陀もまた、苦悩する一個の人間であった。その人間が、人間的な努力によってその苦悩から抜け出て、人間の理想の姿を実現したのだ。「もろもろの現象は移ろいゆく。怠らず努めるがよい」。これが仏陀の最後の言葉だった。

この現在の苦悩から抜け出るためには、自分自身で怠ることなく努める他はない。わたくしが受け取ったのは、このあたり前のような、けれども胸にひびく言葉だった。今、わたくしはいったい何を信じて生きていったらいいのか、本当にわからなくなってしまうている。自分自身か、それとも神か、それとも仏陀の説く悟りの世界か。ベートーヴェンは答えた。「おお、人間よ、自分自身で自分を救いたまえ！」これは仏陀の原ったこととも、一致しているのではないか。しかし、いつ、本当に人間が救われる時がくるのであろうか。

# 孔子の思想 (2時間分)

都立小岩高等学校 教諭 坂本 清治

## <授業内容のまとめ>

### (1) 儒教思想成立の背景

#### ① 中国古代の伝統的思想

- (a) 天の思想 — 天空にあって下界を支配する天帝、人間の祖先
- (b) 家族主義 — 家は社会生活の基本的単位 祖先崇拜中心
- (c) 礼 制 — 家庭・社会生活のあり方の規準

#### ② 政治的・社会的背景

- (a) 春秋戦国時代 — 周王室の衰退と諸侯の抗争
- (b) 諸子百家の出現 — 勢力拡大のため有能な人材登用の風潮

### (2) 孔子の思想

#### ① 思想の中心 — 「仁」(人間関係のおおもと、慈愛の精神)

- (a) 仁 → 「忠恕」 — 自己に対する誠実と他に対する思いやり。
- (b) 礼 — 人間の具体的行為の規範。仁を実現する手段・形式  
「克己復礼」 — 私欲に克って、社会規範に従う
- (c) 仁の実現 — 修身(人格的完成) → 君子  
仁政(徳治主義) → 理想国家の実現

#### ② 学問の尊重

- (a) 「先王の道」の尊重 — 「述べて作らず」(詩・書・礼・楽を学び、周初の理想の再現。)
- (b) 学問の目的 — 仁を体現すること。修身・齊家・治国・平天下

<ねらい> 中国思想の二大思潮の一つである儒教は孔子を宗師とするが、それは、古来からの民間信仰や家族制度、周代に組織化された礼制など、風俗習慣の集積の中に樹立されたものであることから入る。中国思想史上、最も華やかだった諸子百家の活躍は、周の統制力が衰え、諸侯が勢力拡大、制覇をめぐる抗争した変革期を背景に、独創的な主張をもって現われたことをとらえる。

孔子の考えは、学問の尊重から出発する。孔子は「学ぶに如かざるなり」といって、理想的なものと信じた周公旦の精神・制度・慣習を学び、それにより、安定調和し幸福な社会を実現することを学問の目的とした。そのためには身を修め、そうした社会に役立つ人格者として立つことであり、それは、仁を体得することである。仁とは人間の社会的結合の紐帯であって、道徳の最高原理ともいうべきもので、その本質は慈愛の精神であるといえる。いいかえれば、自分自身に対して誠実であり（忠）、自分自身にひるがえって他を思いやる（恕）こと、「己の立たんと欲して人を立て、己の達せんと欲して人を達する」こと、つまり、常に他人を、自分と同じ人間として尊重する精神である。この人間の内面にある仁は、日常の具体的生活の場で実現されねばならない。仁を実現する手段・形式が礼である。礼の意味するところは人間の具体的行為の規範であって、「己に克ちて礼を履むを仁と為す」というように、私欲にうちかち、社会秩序として客観化された礼によって仁に至るのである。そして、それは、「仁をなすは己による、あに人に由らんや」というように、各人の自覚にもとづいて、絶えまぬ努力をはらうことが必要であり、真に仁を体得した人が君子と呼ばれる。そうした君子が為政者となって道徳的自覚を啓発し、（つまり、力によるのではなく仁と礼によって）社会の平安を実現するよう主張した。理想論的であるが、現実生活での実践を重視した点を明記したい。

## 〈生徒作文〉

都立小岩高等学校 2年1組

孔子の説いた「仁」、それをこの世の人びとが、真に理解し、自から行うようになったら、この世は平和で、争いや、邪魔で醜いことは起らなくなり、安らかな世界が実現するだろう。しかし、今の人びとに、忠恕、つまり、自分に対すると同じような誠心、思いやりをつくす気持があるだろうか？ また、社会のとりきめ、礼儀を守って行動しようと努める気持があるだろうか？ 多くの人にはないであろう。ほく自身「おれはどうだ」と問うてみても、胸をはって、「そうしようと努力している」とはいえない。また、努力しても自己の欲望、利益におしつぶされてしまう。今、世界の注目となっているベトナム戦争だって、「仁」の精神をつくしたら、たやすく理解されるだろう。そして、交通事故の悲劇、社会犯罪、貧困の苦しみもなくなるだろう。そうした現実社会を考えると、人間の欲望の強さ、大きさを思い知らされる。人間は生れながらに欲望をもち、そしてその欲望は次第に大きくなっていく。だから実際に「仁」を身につけ、行いうる人は、ほとんどいないのではないかと思う。しかし、実現が不可能であっても、「仁」に向かって進もうとすることは、大変よいことではないだろうか。人々がみんな、「仁」を実現しようと努力し、政治家や企業家、その他、社会的指導者が、仁について興味をもち、関心をはらい、さらに学ぶようになったら、どんなにその社会は住みよくなるだろうと思う。自分自身を大事にし、愛することは、だれでもすることだ。それを少しずつ、周囲に押し広げていくこと。考えてみれば、決して、全く不可能ではないように思える。

(感想) 孔子の理想論的な徳治主義と同胞愛(人類愛)を現実から遊離したものと感じながらも、全く無意味とはせず、そうした努力をはらうことに、意義を見つけ、現代の諸問題の解決の手がかりをさぐるという受けとめ方はこの生徒に何かを教唆したことだろう。

孔子は漢文の時間に習ったというだけで、別に興味も関心もなかったが、授業で孔子の考え方にふれ、自分で「論語」を読んでみようと思った。下村湖人の「論語物語」を読んでみた。最初は何となく抵抗を感じたものの、意外と読みやすく、頁が進むにつれ孔子の人柄にひかれて一気に読んでしまった。そして、読んでいくうちに、自分が孔子と問答している弟子のように思われて、孔子の一言、一言にハッとさせられることが多かった。なかでも、「巧言令色、鮮仁」、「剛毅木訥、仁に近し」ということばが心に残った。孔子は弁才があり、口先で相手の様子をうかがいながら、とり入ろうとする人より、むしろその反対に、言葉少く、愚鈍に見えるが、ひたすら師につこうとした弟子を愛したのである。わたくしはすぐに、わたくしの友人のことを考えた。その友は、自分で認めているのだが、口べたであり、あまりしゃべらない。そうした態度が、わたくしには、しばしば冷たいように感じられ、「この人はなんて冷たいんだろう。無愛相で、なじめない」と思っていた。わたくしは、人は無愛相ではいけないと、何のためらいもなく思い込んでいたのだが、孔子のことばで考えなおすうちに、その友の、口では表現しないやさしさ、意志の強さ、思慮深さを発見した。その反面、自分はどうかと思いかえすと、人に気に入られるようにと、そればかり考えて、口先だけのことを言っていたのに気がついた。何ということだろう。わたくしはもう一度読みかえしてみた。そして、そこに述べられている孔子の、謙虚な中でも自信に満ちた生き方、考え方に、あらためて深く心を動かされた。孔子のおかげで、わたくしはわたくしに足りなかった大事なものを見つけたような気がする。そして、他の人たちにも、孔子の今に生きていることばを理解してもらいたいと思っている。

(感想)孔子の日常生活での実践を重視する面を受けとめ、自分自身のあり方に反省を加えて、新たな発展に向っている。

# 孟子と荀子の思想 (2時間分)

都立赤城台高等学校 教諭 御厨 良一

## <授業内容のまとめ>

### (1) 孟子の思想 — 性善説にもとづく主観倫理の展開

- ①人間観 性善説 — 人間の先天的良心を確信  
 ↳ 四端の心をもつ(惻隠, 羞惡, 辭讓, 是非)  
 — (拡大) → 仁・義・礼・智の徳
- ②道德論 人倫五常 ← 孟子の四徳に漢代の董仲舒が信を加える  
 ↳ 人生における対人関係を五種に整理し, その間に行  
 われるべき「相互の」「人間としての義務」  
 「父子有親, 君臣有義, 夫婦有別, 長幼有序, 朋友有信」
- ③政治論 霸道 — 権力に依存する政治 — 人民は心服せず  
王道 — 仁徳によって行う政治 — 人民は心服  
 ↳ 衣食住の確保, 租税の軽減などが大切  
 ↳ 易姓革命論 天命(世論)が有徳の王にくだる

### (2) 荀子の思想 — 性悪説にもとづく客観倫理の主張

- ①人間観 人間は社会的存在 「人は群する存在」  
 性悪説 — 人間は本性上利己的・嫉妬心・怠惰心をもつ  
 理由: 善を求めること自体, 悪である証拠
- ②道德説 本来悪なる存在 — 教育により礼義によって教化の必要  
 社会的存在 — 客観的な道德規範が必要  
 ↳ 礼の重視は, やがて法家(季斯, 韓非)の思想へ。

<ねらい> 孟子と荀子を取りあつかう場合には、三つの点を強調したい。

まず、第一点は儒学的发展史上におけるかれら二人の地位である。すなわち、孟子は孔子の仁を敷衍する主観学派の代表であり、荀子は礼を中心とする客観学派の代表であるということ。そして、荀子の思想は、門人の李斯や韓非によって法家の思想として発展せられていくということ。このような儒学史にしめるかれら二人の地位をつかませたい。

第二点は、孟子と荀子における人間観の相違点である。前者は性善説の立場にたち、後者は性悪説の立場にたつことはいうまでもない。しかし、古来両者の人間観の相違をこの点においてのみ強調し、しかも性悪説を主張するゆえに、荀子をひくく評価する傾きが主流をしめることは問題が多いと思う。むしろ荀子の「社会的存在」としての人間規定は高く評価されるべきであり、そして、このように人間を規定すればこそ、主観倫理たる仁を強調するよりも、礼を客観的倫理規範として重視し、個人倫理よりも社会倫理を主張するにいたつたのである。その人間規定は次のようになされている。「水火は氣あって生なく、草木は生あって知なく、禽獸は知あって義なし。人は氣あり、生あり、知あり、またかつ義あり。故に最も天下の貴となる。力は牛にしかず、走ること馬にしかざるに、牛馬の用となるは何ぞや。曰く人は能く群す。かれは群すること能わざればなりと。人を何をもって群するや。曰く分すればなり。分なにもって行なわるるや。曰く義をもってなり。故に義をもつて分てば和す。和すれば一となり、一ちなれば強し、強ければ物に勝つ」(荀子：王制) この人間規定に限らず、荀子には合理主義的・啓蒙主義的一面のあることは否定できない。孔孟偏重に心をうばられないようにしたい。

第三点は、孟子のもつ民主主義的な理論、易姓革命論も高く評価したい。その革命論は、「天に口なし、人をして言わしむ」という世論重視や 朝日新聞のコラム欄「天声人語」などと関連させれば、天命という概念も理解させやすくなるであろう。

〈生徒作文〉

都立赤城台高等学校 2年6組

孟子は、人間は本性、善におもむくように生まれついているという「性善説」を唱えました。その理由をかれは「人間は生まれながらにして泯滅の心、羞惡の心、辭讓の心、是非の心、という四端の心がそなわっているからである」としました。それゆえ「人間がこれら天から与えられた心を大切に育て、欲望によって曇らされることなくそれを自分のものとして拡充できれば、仁義礼智となる」と考えました。わたくしはこの孟子の性善説に賛成したいと思います。そしてしっかりと自分の心にとめておきたいと思います。なるほど、荀子の性悪説には理論的にはおもしろいし、孟子の性善説に対する批判を読んでみると、なかなかしっかりしていると思われます。しかし、わたくしは人間は、生まれながらにして善であると信じたいのです。

はっきり言えば、人間を信じたいと思うのです。この世に悪人がいるのは事実ですが、それは環境によって悪におもむいたものと思います。たとえば、森の中でおおかみに育てられた子供は、まるで、動物のようであって人間らしいところはなかったそうです。これは四端の心をもっていないながら、おおかみに育てられたために、人間らしい心をのぼすことができなかつたのです。あたたかい人間の愛によって育てられた子供はおのずから四端の心を大切に育てようとし、善におもむくと思います。この世の悪人、すなわち他人の心を思いやらない、悪を恥じない、他人を尊敬しない、善悪をわきまえないような人間は、人間には生まれながら、四端の心がそなわっていることを知らない、あわれな人間であるが、環境のためそれをのぼすことができなかつた気の毒な人であると思います。人間は、生まれながらにして四端の心がそなわっていることを知り、その心を大切に育てようと、努力する人は善におもむくのであり、知らない、気づかない人は、悪におもむくのではないかと思ひます。

## 都立赤城台高等学校 2年6組

人間の本性は何か、ぼくは孟子・荀子・告子について考えてみた。性善説については四端の心、こういったものが人間に生来備わっているとしたら、すばらしいと思うが、二・三才の子供に他人を尊敬したり善悪をわきまえることが可能か、また他人を思いやり悪を恥じる心があるか、とうは思わない。性悪説も意味は逆だが同じことがいえる。ここで当時の背景をみた。当時は戦争が絶えず、秩序は乱れていた。国と国だけでなく個と個の関係も強肉強食だったといわれる。そんな時代であれば性悪説が出て来るのもうなづける。次に二説を比較してみた。二説の相異点は性の解釈の差である。孟子の性は「心」を意味し、荀子の性は「欲望」を意味している。次の相異点は孟子は非常に理想的で荀子は現実的だということだ。だから前で述べたように孟子のいう通りならすばらしい、しかし実際には違う。人間の性が善なら聖人や君子は必要ない。理由は天性は不変だからだ。荀子が現実的だということはあの世相が乱れていた時代背景の中から生まれてきたということからも分る。次に二説の合致点をあげてみたい。それはどちらにしろ天下を平和に治めるのを目的とした主張だということだ。だが目的に違いはないが、どちらの説にせよ人間の性を善とかで一律に規定するから無理が生ずると思う。が政治理論ではどちらの説が現代で通用するかというと、荀子の説をもととした方をとる。ここで人間の性とは、善でも悪でもないと主張した告子のみよう。かれは人間の性は、食欲や色欲のような動物的本能だとした。かれはよく同年代の孟子と議論したといわれる。結局、孟子に問い詰められ、支離滅裂な返答をしたという。結局、ぼくは三説のなかでは、告子の説に一番共鳴を受けた。孟子などに比べて、なぜ告子が一般に受け入れられないのかと思う。ぼくは人間の本性は、告子の説と、当時あったといわれる人間の本性は環境によって善にも悪にもなるということプラスしたものであるという考え方が正しいと思う。

# 老子と荘子の思想 (1時間分)

私立日本大学第二高等学校 教諭 小笠原悦郎

## <授業内容のまとめ>

### (1) 老荘思想と儒家思想との対比

仁と道、形而下的と形而上的、現実と現実を超えるもの、人間関係と人間関係を成り立たしめるもの、など→図解する

### (2) 老子の思想

① 思想の中心——道(タオ)=無・無名(名づけようがない)

② 存在論について

(a) 相対的にとらえている

(b) 相対を超えた実在として道(タオ)を考えている

③ 生き方について

(a) 無為自然 : 無為=作為・人為(偽)をさけること

: 自然=自らそうなる(然る)ところに従うこと

(b) 柔弱謙下 : 柔弱=剛強に対し、ソフトムードで接する

: 謙下=尊大に対し、へりくだった態度で接する

(c) 嬰兒に帰れ: 赤子のように天真らんまんに生きること

④ 国家論について

理想国家——小国寡民

### (3) 荘子の思想

① 道——天地自然の理法 (老子の思想を発展させる)

② 真人——自由の境地に遊ぶ人(理想的人間像)

<ねらい> まず、儒家思想を復習することからはじめて、道家の思想をクローズアップする。ここで道タオという意味が一般的な道ミチという意味とまったくちがうことを、『老子』からの引用によってわかりやすく説明する。説明のしかたについては、都倫研五周年記念版（清水書院）の“道”の項を参照されたい。

絶対は絶対に支えられて相対であり、絶対は相対に支えられて絶対である。美は醜があり、善は悪があるから、それぞれ美とか善とかがいえるので、このような関係を相対関係と表現せず、“相待関係”といえ、文字から受けるニュアンスによってわかってもらえそうだ（←上掲書“相待”の項）。

およそ、すべてこの世にあるものとは、相対であり、相待を相待たらしめているものを、仮りに名づけて道（タオ）といったものである。

道は、その働いた軌跡だけしかとらえることができず、働きのものも、存在そのものもわからない。しかし、道はどこにでもある。どこにでもある、これといってさし示すことができない、というような否定のかたちでしかいえないから、道は無（どこにもない）とか無名（名づけようがない）ともいわれる。この点が授業の中心となる。

このような理解の上に立って、それでは具体的にどのように生きればよいのかという方に向う。すなわち、道を体得（道徳）した生き方というのは無為自然の生き方で、心のもちようとして、水のように、赤坊のように、柔（やわら）の道のように、生きることである。

これを政治、または政治家におよぼして考えるとき、「小國寡民」の社会が理想とされ、君主は「無為自然」を実践すればよいことになる。

荘子については、たち入った説明はしない。儒家が理想とする人間である「君子」に対し、荘子は「真人」をとりあげ、理想とする人間のあり方を説明すればよい。老子のあとをつぎ、神仙思想として発展させ、日本の思想に影響を与えた点に触れれば、さらにのぞましいと思う。

## 〈生徒作文〉

私立日本大学第二高等学校 2年C組

老子の中心思想は「道」である。儒家の孔子が現象界（形而下）のものについて現実的な「仁」を説いたのに対し道家の老子は宇宙の根本原理について観念的な「道」を説いた。道とは人間関係を含めてこの世のいっさいを成りたしめている現実を超えた宇宙の根本原理で、ここあるそこあるとわかるものでなく、その跡しかわからない。名づけようがなく無とか無名とか呼ぶ。しかし、どこにでもある。その働きは無為自然である。この世の中のすべてのものは相対でなく相相待つところの相待関係で成りたっている。

老子は道に合したつぎのような処世法を説いた。まず第一に、嬰兒に帰れ！赤ん坊のように天真爛漫に生き、虚偽虚飾もなく、知恵や技巧も捨て欲をたつ、第二に人為、作為をすて、自らそうなるところに従う。まさに無為自然である。第三に柔弱謙下、剛強に対しソフトに接し、尊大に対してへり下った態度をとる。自ら誇らず、つねに謙虚で争いの心を持ってはいけない。

自慢は芸の行きどまり（老子）、誰でも自慢や自惚れはあります。けれどその自慢を成長へと育てていくためには人に自慢された時のことを考えてぐっと食い止める修業をすることが大切だと思ふ。また、よく敵に勝つものは叩き合うことをしない。人使いの上手な人は良く相手の下に立つ。これを「不争の徳」という（老子）。一口にいうなら「水の如く生る」ことである。以上の三つが老子の処世法だと思ふ。老子の思想は一見、消極的に思われますがむしろ積極的です。決して自分を曲げることでなく、相手を考え自分を主張することで常にその場に素直に生きることです。そこにおのずと道徳ができるのです。相待関係を意識し利害得失を超えた相手との協調調和。つまり場の自覚が道徳であると思ふ。わたくしにとってこの勉強は生きる道しるべとなる考えです。

## 私立日本大学第二高等学校 2年G組

「道」は、宇宙の本体・根本原理・現象界の根元をなすあるものです。また、本来は道徳としての意味ですが、儒家はこれを人間最高の行為の規範（手本）の意味に用いています。言いかえれば「道」は、人間の生活において、一番「かしこい」または「価値」のある方法を言っています。

老子は、対人関係を処理していくうえに、柔弱謙下の徳（道）を説いています。かれは、対立物を相互軟化するものとして考えているから、剛強に対して、柔弱を選んだのだと思います。よって剛強に対して、へりくだり、ソフトムードで接し、思いのままにする。そうすれば、争いはおこらず「道」の働きに、一致します。

無為自然・嬰兒に帰れ・の徳。これは、まさしく「道」の働きと一致するものです。人為・作為をもない。自然の法則に従って、赤ん坊のように、無欲・無心で生きていきなさいということです。言いかえれば、行為をしようとする意志を持たずに、しかもすべて成し遂げる。勝つと思わず勝てということです。人為・作為の力は、万物を流転させる自然の力（道）に対してどれほどの力を持っているだろうか、持っていないと考えるからです。自然の力は偉大なのです。

自然に結ばれた縄は、結び目がないから解きようがなく、自然に出た言葉には失言はありません。赤ん坊は、朝から晩まで泣き叫んでも声がかれないのは、すべて自然に順応している証拠です。

仕事をするうえにおいて、「むり」なく「むだ」なく「むら」なくと云われます。このことは、無為自然の徳のあらわれだと思えます。「自然に従って生きる」これが最高の生き方だと思えます。

わたくしは「知」の限界を知って、徳（性格の道徳的価値）を自覚して水のごとく、無為自然を心がけるようにして成長したいものだと思います。

第Ⅲ分科会

ルネサンスの思想

(1時間分)

都立千歳丘高等学校 教諭 渋谷 芳三

<授業内容のまとめ>

(1)ルネサンスの語義と時代

①啓蒙主義的ルネサンス観(ブルックハルト, ミシュレ)の批判

①レオナルド・ダ・ヴィンチ  
—— 新らしい自然観 ——

②ルネサンスの動因

②エラスムス  
—— 良心の自由 ——

(a)歴史的動因

自給自足の閉鎖的農村経済の崩壊(修道院の生活に象徴)

③ピコ・デラ・ミランドラ  
—— 人間の尊敬 ——

広域商業経済と市民社会

④マキアヴェリ  
—— 新らしい政治原理 ——

(世俗的市民生活感情)

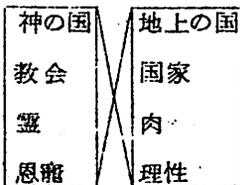
(b)内発的動因

⑤モンテーニュ  
—— 懐疑と寛容 ——

唯名論と魔術のゆさぶり

(2)中世スコラの秩序の解体

⑥ボッカチオ  
—— 欲望の肯定 ——



人間自律(4)普遍的教養人とは?

①レオン・バッチスタ・アルベルティ —— 「家族論」

世界発見

②バルダサッレ・カスティリオーネ —— 「廷臣論」

(3)ヒューマニズムの種々相

(5)ファウストの人間の誕生

<ねらい> (1)は導入部。啓蒙主義的中世観およびルネサンス観に片寄せぬこと。ルネサンスも長期にわたり、広域に及ぶ多面的な運動であるので、単にイタリア＝ルネサンスに限らず、単に楽天的な人間解放の運動と決めつけないように。

世界史の学習内容を想起させながら、中世思想の復習として修道院生活の理想とスコラ的世界観（とくにその目的論、統一的な秩序観・信仰の客観主義など）をトマス説について想起させ、市民社会の勃興によってどのように変化していくかに見透しを与える。

人間独自の価値がどのように自覚され解放されていくか、中世の目的論的自然観がどのようにして機械論的自然観に変わっていくか、さらに世俗の社会の自律的法則がどのようにして意識されていくかを、いくつかの系統を辿って多面的総合的にとらえる。

授業が単調で抽象的にならないように重点を絞り、資料を併用して具象的に指導する。たとえば、(3)の①のダ・ヴィンチを解説することによって、②～⑥はその展開傍証として扱うことができる。「モナ・リザ」「最後の晩餐」と中世絵画（聖者の肖像画がよい）を比較しながら、ダ・ヴィンチの経験的科学的態度、無限への意志、方法や視点の意識、モナ・リザの市民性、官能美その他を指摘することができる。また中世伝統も併せて指摘する。かれの手記から自然や物質の見方を取り出して、それがコペルニクス、ケプラー、ガリレオへと継承され発展されることが説明される。

ルネサンス期のいわゆる普遍的教養人は、混乱分裂の渦中での妥協の産物であり、身分のおよび職業的に定位置を持たない文人のディレッタントイズムにすぎない。普通人はダ・ヴィンチのような職人において体现された。

ルネサンス期に誕生する近代人の正体はシュベングラーのいわゆる「ファウスト的人間」である。ゲーテの「ファウスト」を資料としてその無限追究的、意志的、作業的、懐疑的、虚無的性格を説明する。

## 〈生徒作文〉

都立千歳丘高等学校 2年3組

ルネサンスの思想のところでは、いろいろの人が出てきていろいろなことを考えているので、ぼくには混乱してよく理解できなかった。とくに思想となるとどうも抽象的でわかりにくい。しかし、レオナルド・ダ・ヴィンチについて、先生が「モナ・リザ」の絵を見せながら説明してくださったので、比較的良好理解できたと思う。

モナ・リザが一市民の奥さんで、中世の肖像画には決して描かれることがなかった身分であるが、市民が絵の題材になったところにルネサンスが市民階級によって開かれた時代であることを示しているとか、背景に奥行きのある風景が描かれているのはこれもダ・ヴィンチの特色で、無限の空間を追究しようとするルネサンス期の意識のあらわれである。また透視図法の構図もこの時期の特色で幾何学的に世界を処理しようとするあらわれで、中世の空間の表現は平面的であった。しかも透視図法の視点が決まっていて、この視点から一挙に空間全体が見渡せるようになっているが、このことは自我意識に通じることで、自我が方法を使用して世界を認識しようとする近代人の意識のあらわれとみなすことができる。

このような先生の説明で中世の考え方とルネサンス期の考え方の違いがよく理解できた。今までぼくは絵が好きなのでよく観るけれど、こんな見方をしたことはないので、こういう見方もあるものかと感心した。しかしあまり説明が割り切れているので、こじつけではないかと疑わしくもなった。

ルネサンスの人たちに比べて、現代のぼくたちはあまりにも社会のわくにはまりすぎ、職業が専門化しすぎていて人間性を失っているように思われる。

都立千歳丘高等学校 2年5組

わたしはルネサンスの思想を学んでから、人間というものにいろいろ疑問を持つようになりました。

人間は歴史とともに進歩して、だんだんと幸福になるものと思っていましたが、ルネサンス時代から誕生した近代人はファウストの人間であるという先生のお話を聞いてから、近代人はかならずしも幸福とはいえないのではないだろうかと思ひました。

なぜなら、ファウストの人間は、世界の原理を無限に追究し、自分の意志の力を絶対視し、あくまでも活動的積極的に自然にはたらきかけを人間だけけれど、けっして自分で満足することがなく、確信することもできないで、ますます疑い深く迷いつづけるニヒリストだからです。わたしはこのような人間はけっして幸福にはなれないと思います。わたしたちも自分の心のメフィストにそそのかされてますます墮落したり迷ったりしなければならぬでしょうか、どうしたら迷いからぬけだすことができるかわたしにはわかりません。

先生はルネサンス時代の人は個性的だったが、現代人は個性を持つことはむずかしいといわれましたが、なぜでしょうか。わたしにはそうは思われません。現代人も人それぞれちがった個性を持っているのではないのでしょうか。ルネサンスは天才の時代だともいわれましたが、今でも天才はいるのではないのでしょうか。

ダ・ヴィンチの思想はよく理解できてたいへんおもしろいと思ひました。絵画の見方の勉強にもなってひじょうに興味がありました。

# 宗教改革の精神

(1時間分)

都立大山高等学校 教諭 中村 新吉

## <授業内容のまとめ>

### (1) 宗教改革の歴史的背景

- ① 中世ローマ・カトリック教会の世俗的権力からの人間解放
- ② 個人の自由意志の尊厳さの自覚——商工業など中産市民の台頭
- ③ 教会の墮落・分裂、免罪符の発行、僧官贖売買

### (2) ルターの考え方

- ① 内面的信仰の重視
  - (a) 信仰によってのみ義とされる」(信仰義認観) = パウロの精神
  - (b) 教会の権威の否定—善行(教会の形式的儀式・戒律)の否定
  - (c) キリスト者の自由—神の愛を信じる
- ② 聖書中心主義—自己の良心から福音の内在化—万人司祭

### (3) カルヴィンの考え方

- ① 神の意志に基づく予定—神の絶対化—教会組織の否定
- ② 神の聖意にかなう→おのおの自分の職業に熱欲的に労働する  
→営利の肯定→近代資本主義の精神→職業召命説

### (4) 宗教改革の結果

- ① プロテスタンティズムの倫理—勤勉・儉約・祈り・純潔  
→職業の平等→現世的な産業市民社会の信仰
- ② 宗教戦争—新教と旧教との対立(100年にわたる)
- ③ ルネサンスとともに近代的自我や人間尊重の精神の確立に大きな役割を果たす

<ねらい> 宗教改革の運動とその精神を展開するには、たんに、ルターやカルヴィンの代表的改革運動家の主張を教えるだけでは抽象的になる。

宗教改革運動がなぜ起きなければならなかったかという歴史的・社会的・地理的背景などにふれたいものである。特に、一般市民に土地の寄迫をさせたり、税をとりたてたり、僧官売買によって巨大な利権の源をつくっていたことは是非教えたい。たとえば、金さえ払えば殺人の罪さえ赦免した法王インノセント 8世の贖罪金の制など具体的に展開し、さらにローマ法王に対しドイツ・フランス・イギリスらの政権・諸侯・地方教会・農民が独立自由を求め反抗と対立の状態にあったことも忘れてなるまい。

ルターの宗教改革運動は、直接にはレオ 10世の利権手段たる「赦免状」への挑戦によって始まるが、間接的には、敬虔な修道士としての生活体験から発していること、パウロ主義への復帰による信仰の本来性の再確立にあったことに留意して展開したい。

すなわち、神を愛し神を信じるなかに救いがあることであり、功德があるということである。教会に、ただ献金・納税・勤行すれば、僧官によって救われるのではなく、人が直接に神と結びつくことである。「すべての人は祭司である」というところから、自己の職業への勤勉と信仰精神とが一致する。

このルターの信仰観を受けつぎながらも、急迫的宗教改革運動を下層農民とともに起こしたトマス・ミュンツェルを通して、カルヴィンの改革運動とその精神を展開したい。カルヴィンの思想は予定説と職業召命観とが論理的体系をなしているので、難解な予定説を十分に研究した上で教授したい。

また、カルヴィンがスイスにおいて神政政治を行ない、教会や僧官を規制し、教会民主制を通じてその考えを具体化したことを忘れてはなるまい。

最後に、とかく、宗教改革のみを展開すると、すぐ生徒はカトリシズムがなくなり、プロテスタントの時代となったと思いがちなので、その後の宗教戦争や反宗教改革運動にもふれておきたいものである。

〈生徒作文〉

都立大山高等学校 2年9組 :

マルチン＝ルターがレオ10世の免許符販売に反対し、95ヶ条の提題を掲げたが、自分のこのような行動が宗教改革へと発展していくことを予期していたであろうか。いなである。むしろ、ルターは消極的であった。たんに信仰の面においてのみであった。つまり、「真理への愛と真理を明らかにしようとする念願」から掲示されたものである。当時は、すでにドイツの教皇権や皇帝権が衰退しつつあったにも拘わらず、それに反対しなかったことからルターの問題意識の限界がわかるのである。また、かれは、「キリスト者の自由は、あくまでも霊的・内面的なものであって、人間の政治的・社会的解放とは何のかかわりもない。」といい、農民戦争に対しても、反乱農民を「殺人強盗団」とののしり、こんな悪魔の手先きどもは「狂犬同様に絞め殺してしまえ」といって非難したのである。神学者であるルターがカトリック教から不純物を取り除いたのは一大功績であったが、それはルターを利用しての諸勢力の利害がもたらした力によるとみななければならない。かれの運動は、どこまでもドイツの君主制内におけるもので、近代的な新しい歴史的媒質のなかで行なわれたのではなかったからである。

とはいえ、ルターの運動が封建社会を大きくゆさぶり、変化をおこす原因となったり、近世初頭の精神運動第2のきっかけとなったことは注目すべきであろう。スイスにおける宗教改革者カルヴィンは、ルターよりもはるかに神への絶対帰依とともに、教会政治のもとに積極改革をすすめ、宗教的生活と世俗的な日常の職業生活とを一体化した点で後世への役割が大きいと思う。

現代においては、宗教というよりも宗教的な純粋さ・信念みたいなものが失われつつある。ルターにも限界はあるが、腐敗や墮落や非人間的なものへの勇気をもったプロテストは高く評価されなければならない。

## 都立大山高等学校 2年7組

わたくしは、宗教改革運動については歴史の流れの上で、ぼく然と暗記していたにすぎなかった。そんな状態から、友だち数人と共同研究に入ったのである。当初、あまりにも興味というが関心がなかったが、研究してゆくうちに、つぎつぎとひろがり、たちはだかってくる歴史的遺制と個人との生命をかけたなまなましい戦いに心魂をゆさぶられる思いがましてきたのである。このわたくしの心魂がゆさぶられるにつれて、授業で発表するための研究でなく、いつか自分のこれまでの生き方と結びつけたり、現代人の風潮と結びつけて、つぎつぎに資料をあさるようになりました。偉大な人物の生きた過程や考え方はやはり尊敬し吸収しなければならない多くの点をもっているが、わたくしはルター、ツヴィングリー、カルヴィンによって、自分のあり方を変革させられたと、いま感じているし、それが強烈であっただけに「倫・社」を学んで新しい世界をたえず指向できる目をもつことができたことを尊い経験だと感じている。

わたくしは、とりわけ興味をもったのは宗教改革運動が全ヨーロッパに政治的・社会的面においても革新運動として展開され、古い権威と権力を固持しようとしたローマ・カトリック教会との抗争が宗教戦争であった。

ナントの勅命が出るまで約100年間の血の戦いは、自由と寛容の問題を通して、人間の弱さとみにくさを痛烈に感じさせられた。現代における、社会主義と自由主義との戦いや抗争以上のもののように思われる。フランスのあの「聖パーソロミューの夜」の惨劇を思い出すまでもない。わたくしには、今尚、「人を殺すことは教義を守ることではない。それはあくまでも人を殺すことなのだ。」とさげんだパーゼルのヒューマニスト、カステリオンの叫びが強く胸に刻印されている。自己が正しいと絶対的に主張しあうことからくる非人間的手段の行使——それは絶対にさげなければならない。

## デカルトの思想

都立深川高等学校 教諭 田中 正彦

## 〈授業内容のまとめ〉

## (1) デカルトの生涯とその時代

① デカルトの生涯とエピソード

② デカルトの時代

(a) ルネッサンス後期 (b) 科学上, 地理上の発達 etc

## (2) 方法的懐疑

① 感覚によって知る事や数学的真理は疑うことができる。なぜなら

(a) 水中に真直ぐな棒を入れると曲って見える。

(b) わたくしはここにいると思っているが、夢を見ているのかもしれない。

(c) 「欺く神」があって、 $2+2=4$ ではないのに、そう思いこまれているかもしれない。 etc

② 「わたくしが疑っている」ということは疑えない。

③ 「わたくしは考える。ゆえにわたくしはある」

## (3) 神の存在の証明

(省略)

## (4) 物質的世界の存在の証明

① 物の本質は感覚によらず、知性によって知られる。(濬譯法)

## (5) 「わたくしは考える。ゆえにわたくしはある」の意味すること

① 自我の自覚

② 物心二元論と靈魂の不滅

<ねらい> デカルトに限らず、倫理・社会のねらいは、たゞ「考えさせる」ことだとわたくしは思う。つまり、現代の大衆社会に育ち、主体性を失っている青年達に、「思考の自立性」とてもいうものを取り戻してやることである。

デカルトの思想は、内容も方法も精密で高度でありながら、説明に時間を費さなければならぬ難解な用語も少く、哲学を始めて学ぶ高校生の素朴な思索に直接結びやすく、高度な思索への入門にはもってこいだと思う。

方法的懐疑の思索の中で、デカルトが「自分はここに本当に存在するのだろうか。夢を見ているのではないだろうか」と考えるようなことは、生徒達も一度は考えたりするようなことであるらしい。それを理路整然とやってのけるデカルトの思想にふれて、まずかれらは感激するようである。その理論的精密さを理解できず、単純に誤解し、素朴な批判を加える者も多いが、それもまた、理論的思索への一步をふみ出すことになるのではないだろうか。後記の感想文の二番目に載せた女生徒の文などは、一派の大思想家の考え方も共通していないだろうか。

デカルトは、方法的懐疑において、感覚によって知る事物の存在や、数学的真理を疑って、虚偽なものとして斥けたすえ、「わたくしが疑っている」という事実は否定できないとして、「わたくしは考える。ゆえにわたくしはある」の命題に到達したのであるが、このことから「わたくし」という実体は「考える」ということであって、「かかる実体が存在するためには、何らの場所をも必要とせぬし、何らの物質的なものにも依頼せぬものである」として、精神は身体から独立して存在するという物心二元論と、身体が減じたからといって精神が減びることにはならないという靈魂不滅の考えが導き出されるのである。

このような考え方も、高校生の素朴な問題意識にピッタリする内容である。育年期は人生のはかなさを感じ、宗教に関心をもち始める時期であると思う。生命の永遠性についてあれこれ考え、有神論、無神論のいずれかに自分の信念を固めていくことは、ある程度さけられないことであろう。

わたくしはデカルトの思想の中で、一番印象に残ったのは、「われ思う、ゆえにわれあり」という言葉である。「自己の存在は疑うことのできない真理である」というのが、デカルトの始めて真実であると認めたことである。わたくしはかれのように、疑わしい知識はいったん全部虚偽だとして、それから真実をきわめていくおりも、ある知識が偽であったとしても、それが偽であることによって世の中が全く混乱のうずになることがないならば、その知識を信じてもしつつかえないのではないだろうか、と思う。また、それが「偽であるかどうか」などということは誰に判断できるのだろうか。いや、それらは偽で真でもないのかもしれない。つまり、感覚や感じ方などは人それぞれ千差万別であって、ある考え「この花は赤だ」といっても、ある考えは「それらは青だ」というかもしれないこの場合どちらが正しいのだろう。見た位置、囲りの環境、これらの違によっても相違が生じてくる。この例ではどちらも正しいのではないだろうか。だから、数学のような学問、つまり答が一つに限られているものに対して、真偽を見分けるのであるならばうなづけるのである。

また、デカルトが世界を客観的に見るところの主体である「われ」というものをはっきりつかみ、かつその「われ」の生きる道をはっきり定めた、ということについて、わたくしは深く感銘した。とともに、それをやったことは、毎日の生活に目的をもったことになり、かつ有意義な人生を送ることができるのではないだろうか。デカルトはすべてに疑いをかけた後に、ついに疑っている自己を認識したのである。人間は判断や決断をくだすときに、自己を認識する必要がある。自己を認識せずには、生きてゆけないと思う。なぜなら人間の根本であるから。そして自己を認識するために、人間は生きているかぎり、努力しなくてはならない。もし、わたくしがこの努力をおこたったら、この言葉を思い出そう。「われ思う、ゆえにわれあり。」を。

## 都立深川高等学校 2年7組

わたくしは、デカルトは「われ考う、ゆえにわれあり」に至る前の疑いの所で、われわれは大きな夢を見ていて、真実だと思っけていても、現実には誤っているかもしれない、と考え、内部感覚を疑っているが、わたくしはそれまで疑う必要はないと思う。もし、われわれが大きな夢の中にいて現実とは違ったことをしているとしても、この大きな夢はさめることがないと思うからだ。自分の周りの人々に対して、友情とか愛情とかの感情がおこるのも、すべて夢の中では真実であるからで、さめない夢ならば、その事実を疑うことはないと思う。そして夢の中で事実というものを追求すべきだと思う。また、大きな夢を見ているとするならば、自分自身もその夢の中に登場し生活している。それで、今自分の考えていることもすべて夢の中のことになり、いくら現実はそのようではないと考えても、そう考えること事体が夢の中の自分なので、結局疑ったところで目がさめることはない。だから疑ったらきりがな。デカルトの「われ考う、ゆえにわれあり」をもっともだと考える人にとっては、わたくしのこの考え方はくだらないかもしれないけれど、わたくしにはそうとしか考えられない。内部感覚と同様に、デカルトは「欺く神」が $2+2=4$ とさせているかもしれないと考え、数理を疑った。あとで「欺く神」はいないことになるが、そう考えることはおかしいと思う。もし「欺く神」が $2+2=4$ と誤らせていても、万人がそう誤っていて、それを真実だと思っけているのだからそれでいいと思う。「欺く神」がいると仮定するならば、あれもこれも「欺く神」のしわざと思ひ、何もかも、自分の存在も感情も疑おうと思えば疑うことができ、こんな風に考えたら本当にきりがな。また、デカルトは「最も完全なもの」としての神が実在することを証明しているが、これは信仰することによってのみ受け入れられる証明であると思う。デカルトのような人がなぜ神を信じ、そしてそれが実在するという証明をしたのかわからな。い。

# カントの思想 (3時間のうち2時限目)

都立四谷商業高等学校 教諭 永上 肆朗

## <授業内容のまとめ>

### < 真の道徳的行為とは何か >

存在と当為、必然と自由の世界を認識論の上から峻別し、批判主義の立場から人間の有限性をのべる。

(1) 日常の道徳的経験の反省から本来の普遍妥当法則を見出した。

各人の欲求、傾向にもとづく行為は経験的で普遍性がない。

(2) 道徳行為は普遍的な自然法則でなければならない。

① 善意志……・本来の自己に有する良心的命令 (動機説)

|| 結果を顧慮せずに義務からの行為をなさしめるもの。

② 義務……善意志にもとづき、自己を強制し、厳しく恐れおの

かせ、これに従わねばならぬと命ずる根源から湧き出る理念。

(a) 義務にかなう行為—合法的

(b) 義務からする行為—道徳的 (道徳の内面性)

③ 道徳法則 — 格率 → 命法・仮言法 → 定言法 (自己立法の原理)

①と②にもとづいて行われる行為は、各人の利己的範圍を超え、著しく純化せられ、自律にもとづく普遍的・断言命法がなり立つ。

世俗的な幸福感はむしろ斥けられ、却って道徳的な強さこそが真の勇氣・徳——→法則への尊敬、淨福の境地

<ねらい> まず、カントがなぜ三批判書をかいたのか。その批判主義という語句を通して当時の思想の流れを要約・整理する。そこに在来の理性論を反省し、経験論にも存在の根拠を与えるカントのユニークな物自体と現象界にまたがる人間存在のあり方を考えさせる。その際、先天的認識を可能ならしめるものはより豊かな体験と経験であることを説明する。人間の現実把握はこのようにして自然科学的認識の成立をうながすことになる。これらのことから人間の有限性を素直に見直すことにより、しかし理念への無限の憧れをかきたてるところにカント思想の真髄(ずい)があるように思う。

そこで道德の世界はここに絶対無制約的に成立するのだが、現代の生徒には多く現世的で即物的な傾向が強い。そのためまず善意志と義務の念を把え、「義務よ！汝崇高なものよ」という呼びかけをもって尊敬と敬愛の念を導き出す工夫をする。人が見ているから、出世に役立つから、人にほめられるから、といった条件的な生き方はたとえ適法であろうと真の行為たりえない。単なる生、世渡りではなく自分を更にきびしく見つめる内省的態度にポイントを置く。そこには生そのものとの戦いがあり、弱い自愛的な利己本位に流れる意志を鞭うつ努力があろう。そこに真の尊さがあり、生の尊さがある。「死よ驕るなかれ！」である。これこそがアプリアリなる人間本来の理性の自己命令にほかならない。

このような法則(命法)は果して実行しうるであろうか。という問題の投げかけを通して考えを深めさせながら、結果(功利的)ではなく動機そのものを重んずる態度や、形式主義(普遍性)、厳格主義(リゴリズム)などの特色を比較対比しながら浮きぼりにさせてゆく。

道德の規範性を考えさせる代表的なケースである。

カント思想は主観主義から出発しながらその理念は今日に大きな意義があることを強調し、常にまわりの思想を取扱う場合もカントにふれることが肝要であると思う。

## 〈生徒作文〉

都立四谷商業高等学校 2年G組

ある「一つの事」をしようとする時、我々は、その事について、いろいろ考え、そしていろいろな判断を下す。考える道はいろいろある。しかしその「一つの事」に対する正しい考えと言うものは最終的には、「何々である」というふうに一つの定められた考えがあるのではないかと思う。そう考えると世の中のすべての行動、行為が定言的命法であることになってしまうのではないかと思う。

一自己の主観的原理が、どんな場合でも、客観的原理になりうるような行為をとれ—とカントは主張している。たしかに仮言的な生き方は今の時代にもそのまゝあてはまるし、そのような行動をとる利己主義の人間が多い現代には特に必要であると思う。しかしこのことはあくまでも理想にすぎないと思う。カント自身もそれは認めている。もし我々すべての人間が、カントの指示したような行為をとっていたら世の中は穏やかそのもので、トラブル等おこらないだろう。だから時と場合によって良い面は充分にあると思うが、そのまゝでは、人間の考えがいろいろの面にあまり発展しないのではないかと思う。

カントの思想は、人間理性への強い信頼によってなされている。しかし、カントは—人間というものは「理性的存在者」であると同時に「感性的存在者」である—と云っている。たとえば、幸福のために進学のためなら仲間をけ落してもと思っている一面では、これらの感性的なことに対して理性的なことも脳裏にひらめいているのだ。カントの道徳律に対して少し反発を抱いたが、この人間の二つの性格「理性的」「感性的」というものを考えた上でのカントの思想はすばらしいと思う。カントの「人間の有限性」ということから理想と現実の違いを考えさせられた。

## 〈生徒作文〉

都立四谷商業高等学校 2年A組

カントの道德思想の中に『真の道德行為は義務感からの行為でなければならない』というのがある。確かに、人の目を意識したり、自己満足のためにする行為は、ほんとうの道德的なものとはいえないだろう。

たとえば、道に紙くずがおちている。それを拾おうとする時、その人が「この屑を拾えば道がきれいになる」と思ってくずをひろえばその行為は道德的というよりたゞの良い行いにすぎないということになる。でもこの場合、「紙くずなど道におとすべきでない」というふうに、義務感から、そのくずをひろう行為と、さっきの良い行いとの違いは、それを行う人の気持ち、考え方など、その人自身の中の、内面的なものちがいがからくるのである。だから人がある行為をした場合、それが真に道德的なものか、又そうでないかということの区別は、むづかしいことだと思ふ。

わたくしは道德的行為の中には、善意からの気持ちがまざっていてもよいと思ふ。仮にある行為をする時の動機が、これをするのは規則だからとか、こうするとみんながよくなるだろうという目的をもったことであつてもわたくしは、それが道德的であるといつてもいいと思ふ。

厳密に言えば、それは真の行為でないかも知れない。しかし、そこまではっきりこれは道德的、これはちがうと考えるのはむづかしい。

わたくしは自分の行為が同時に万人に通用するような行いであれ！と命ずるカントの教えは立派だと思ふが、これも義務の法則にてらして考えてみたとき、かれの純粹すぎるような思想は大へんいいがやはり理想のようだ。

しかし道德というものはだれでも心の中にいつでももっているべき純粹で美しい精神ではないだろうかということを深く考えてみたい。

我々ももう社会に出るわけであるが一つ一つの行為を無駄にせず、また、大切にすべきであらう。

# 自然法の考え方(ホッブス・ロックを中心に)

都立荻窪高等学校 教諭 小川 一郎

## ◀授業内容のまとめ▶

(1) 自然法とは何か(実定法と比較)

(2) 近代以前の自然法の考え方

① ストア学派——宇宙は普遍的な理性たるロゴスの支配

人間はこのような理性を分有

② スコラ哲学——自然現象 → 自然の秩序

社会現象 → 正義の秩序

└─→ 部が法

┌ 永遠法(神の理性)

┌ 自然法(人の理性)

┌ 人定法(現実適用)

(3) 近代の自然の考え方

① 自然法の父グロティウス——神・国家から独立した自然法

②

<ホッブス>

<ロック>

(人間)

自己保存のためすべての

理性的存在・社会的存在

ものを利用する平等の権利

(自然状態)

自然権の衝突

理性の支配 平和な状態

万人の万人に対する闘い

生存権・自由権・財産権

(社会契約)

理性の命令

自然法の解釈に個人差

権力の委譲

権力の委託

(社会状態)

専制君主国家

民主制 → 主権在民

反抗・革命権

<おらい> 科学でいう自然法則と混同しやすいので、この点に注意して説明する。時と所をこえて普遍的に妥当する法のことであり、実定法のように一定の時期に、一定の地域で通用する法ではない。こんな程度に、一般的な説明をして、つぎに、簡単に自然法の歴史を見る。あまり深入りしないように注意する。

ストア派のアパティア（不動の心）の復習をしながら、宇宙の普遍的な理性を、人間が分有し、その理性に従って生きるところに、幸福を見出した。そこには、普遍的な法としての自然法の考え方が見られる。

また、スコラ哲学におけるように、自然を支配する神の存在から自然法の普遍妥当性を説明する考え方を見る。自然法・人定法は永遠法である神の法から導き出される。

「自然法の父」とグロティウスが呼ばれるゆえんを説明する。神ときり離して自然法の存在を説き、個人としての人間が姿を現わし、行為の根拠を求める近代的な倫理思想が出現した。

そこで、ホッブスとロックの自然法の考え方に入るのであるが、二人の思想が、ばらばらにならないように比較しながら説明を進める。自然状態については、生徒各人に想像させ、発展させると興味が倍加すると思う。自然状態について正反対の考え方が出てくるのは、何故か考えさせる。それは、当時のそれぞれの社会的背景との関連でとらえさせるように導く。

このような自然状態からなぜ、どのように、どんな国家を成立させるか、が指導のポイントになる。即ち、自然法思想は、個人を基礎に近代市民社会をどのように構成したかを把握させることである。そこでは、それぞれの考える自然権が、社会生活の中で、いかにしたら守られるかを考えているのである。自然状態と市民社会をつなぐ契約の考え方の差が、ホッブスの専制君主国家の肯定と、ロックの主権在民、革命権抵抗権をもつ、民主制国家の差になって現われる。これも、当時の社会的背景の説明が、理解を助けよう。

都立荻窪高等学校 2年4組

ホッブスは人間の自然状態を「万人の万人に対する戦い」と言っているが、ぼくには納得出来ない。どうしてそう考えたのだろうか。先生の説明によると、当時のイギリスは内乱が絶えず、人びとはお互いに憎みあい、血で血を洗うような残酷な争いが続き、このような状態を見て育ったホッブスの心に、人間に対する不信の念が生まれたといわれたが、育った環境の違いだけで、そう考えるとは思えない。かれはきっと王様に買収されて、無理にそのような理論をつかったに違いない。ぼくの歴史の知識によると、原始共産制の状態は、人間がお互いに力を合わせて、生活に必要なものをとってきて分けあって生活していたのである。また、そう考える方が自然だと思う。大昔は自然の恐しさもあったろう。どうしても、人間は協力せざるを得なかった筈だ。友人を殺すことは自分を殺すことにも等しいと言わなければなるまい。いくらホッブスでもこの点に気づかぬ筈はない。とすれば、買収説が出てこざるを得ない。当時の王制は絶対王制であり、王様は王権神授説をとまえ、威張っていた。しかし、人民の力もだんだん強くなり、反抗があちこちに起りはじめていたのである。この時、立場を王様の方にとって考えれば、ホッブスの考え方は全く肯定出来る。すべての権限を王様にゆずり渡せば秩序ある社会が出現するのは当然だろう。しかし、一人ひとり自由を失うのではないだろうか。この大切な自由について、ホッブスはどう考えたのだろうか。人間は、心理的に圧迫されると、少しぐらい平和で安全であっても耐えられないものだと思う。発表もこの点にふれていない。ただ、安全と平和を強調している思想だということ強調していたに過ぎない。安全と平和ということは確かに美しい言葉だし、何にも変えることが出来ないだろう。しかし、このような美名のもとに、悲しいことが行われるということがよくあるものだ。自然権のうちにはどうしても自由を入れて考えるべきだと思う。

自然法という言葉がどうも理解できない。自然権というと解るのである。自然法と自然権の関係が解らない。ロックは、自然状態を人間の理性が支配する平和と好意に満ちた状態とみるのだから、理性によって自然権を守っていることになる。だから、理性と自然法を同じと考えてよいことになる。だが、理性はそんなに信頼出来るものだろうか。ロックは人間理性をあくまで信頼している。発表を聞いても解らなかつたところは、それでは何故国家が必要になるのか、ということである。多少の解釈の違いはあっても、理性を信じているのだから、社会が大混乱におち入ることはないだろう。少しばかりの意見の相違をなくすために、国家をつくり、それに権力をあずけると、たとえ革命権 抵抗権があるといってみたとところで、人びとの手に再び権力を取戻すのは容易なことではない。権力はそうした性質のものである。国民の意識がよほど高くないと権力は取戻せない。日本の現状を見てもそういうことが言えると思う。自民党は権力の座から中々おりない。汚職があっても、失政があっても居坐り続けられる。自民党への投票率が50%を割ってもなお権力の座をおりない。だとすれば、多少の混乱はあっても特定の人に権力を渡さない方がよいのではないだろうか。この意見に対しては、次のような反論があろう。国が小さければ、国家をつくる必要はないが、国が現在のように大きくなり社会のしくみも複雑になれば、言葉の上では小さな意見の相違といっても、現実には社会の機能をまひさせるようなことになる。決して小さなことではない。理性のある人間のしていることが、文明が発達し生活圏が広がると、理性のない人間がしていることと同じことになってしまう。やはり、権力は悪であるが必要である。わたくしはそこで考えるのだが、それでは、人間はなぜ生活圏をひろげ、文明を発達させるのだろうか。これは歴史の必然なのだろうか。これを人間の理性は制御できないのだろうか。

## ルソーの思想

都立赤城台高等学校 教諭 鈴木 宣雄

## &lt;授業内容のまとめ&gt;

- (1) ルソーの問題意識——「自然に帰えれ」
- ① 自然状態——人間のありべき姿 : 自由, 平等, 幸福
  - ② 文明社会——人間性の喪失 : 奴隷, 不平等, 悲惨
- (2) 問題の原因——→ 私有財産制度
- ① 私有財産——→ 奴隷制と貧困が生れ, 不幸と悪徳が成長する
  - ② 冶金と農業——→ 貧富の差が増大し, 欲望や野心が刺激され, 恐るべき「戦争状態」があらわれる。
- (3) 問題の解決——→ 社会契約論——→ 人間性の回復
- ① 社会契約——自由 平等を回復するために, 人びとは互いに結びついて政治体をつくるという約束をする。
  - ② 一般意志——契約社会においては, 共通の利益のみをめざす。「一般意志」が法であり, 主権である。
  - ③ 政府——主権者たる人民は, 法律の執行するにあたって適当な代理人を選んで, 委任する。
  - ④ 直接民主政の特色——: 徹底した人民主権  
: 代議制と権力の分立を否認  
: 人民集会に最終の決定権を認める。
- (4) ルソーと現代——直接民主制と現在の間接民主制の相違点。  
これからの民主制のあり方について

<ねらい> 倫理社会の目指すものが、するどい現実批判にあるとすれば、ルソー研究のねらいも又、現代の歪んだ民主主義の批判にあるといわなくてはならない。そのためには、まずルソーの思想に見られる徹底した民主主義への志向を明らかにし、間接民主制の欠陥をすどく見ぬかせ、これからの民主主義のあり方を深く考えさせることが大切である。

ルソーの言う一般意志とは、個人的利益ではなく公共的利益を第一に考える意志をさすが、これはとくに政府や政治家にたいして要求されていることに注意すべきであろう。この一般意志とは、わかりやすく説明するなら、国家の成員のどんなに弱い最後の一人に対しても、他のすべての成員と同等の配慮をする意志であり、一人の市民の救済といえども国家全体の利益に劣ることがあってはならないのである。このような意志を構成原理とする国家とは、人民集会に最終の決定権を認める直接民主制の国家である。生徒の多くは代議制度の正しさを信じて疑わないのであるから、ルソーの次の言葉は衝撃を与え、やがて納得されるであろう。「イギリスの人民は自由だと思っているが、それは大まちがいだ。かれらが自由なのは議員を選挙する間だけのことで、議員が選ばれるやいなやイギリス人は奴隷となり無に帰してしまう」人民集会で決定された法律は、それを執行するに当って選ばれた適当な代理に委任される。だから「政府は不当にも主権者と混同されているが、それは主権者の公僕にすぎない。」「主権者はこの(政府の)権力をすぎな時に制限し、変更し、取りもどすことができる。」こうして、モンテスキューの「主権分割論」も見事に否定されるのである。

最後に昨今問題になっている、「民族意識の昂揚」や「愛国心」のこともふれておく必要がある。ルソーはいう、「不平等と圧制の支配する国においては祖国という語は、人民にとってはいとわしく、こっけいな意味しかもちえなくなる。」と。大切なのは国民が愛国心を持つことではなく、国家が、国民に自然に愛国心が芽生えてくるような民主主義の政治をすることである。

## 〈生徒作文〉

都立赤城台高等学校 2年2組

授業での研究発表。どの班もうまく行かない。わたくしたちの班もその中の一つであった。何しろむずかしい事といたらないのである。先生の助言も借り無事終了という場合はよくある。わたくしはその中でルソーの社会契約論はなぜ実現されないのかと思うようになった。

ルソーの社会契約論に見られる国家は、誰しもが理想国家という。それならばなぜその方向に歩まないのでしょうか。

『フランス革命の父』として、歴史的にとっても影響したことが多く、ルソーの言う直接民主制などは、考えれば考えるほどもっともだと感じ、実現すればすばらしい国家が築きあげられると思う。現実には不可能、と頭ごなしに決めつけてしまう前にやってみてはどうか。わたくしの考えは甘過ぎるのかもしれない。だが良い国家を造って行きたいのは、人間の常の欲望ではないか。

それともわたくしの考えが現実をあまりにも知らなすぎるための一人相撲であるのか。

授業での先生の説明はまさにすばらしい国家を想像させてくれる。とり上げる例が良いのか、先生が力説されるのでそれに巻き込まれるのか、その点はどちらも含まれるだろうが、その時わたくしは夢想の世界を彷徨している感じを起こさせられた。理想と言われていながら現実では空想に過ぎないのである。あまりにも現実とは違いすぎている。醜い者の集合場所のような現代に一種の怒りを感じてしまった。

わたくしたちがルソーの社会契約論を手がけた事は、とても良いことだったと思う。この社会契約論をやったことは、現在の日本の政治面をみまもるにあたり、少なくとも一つの政治に対する目を持ったことはまちがいないと思う。それ以来、わたくしの生活時間の中で、新聞を読む、特に政治面を読む時間が、余分に割かれるようになった。

## 都立赤城台高等学校 2年5組

ルソーを学んで一番考えさせられ、かつ興味を持ったのは、かれのいう政治のあり方だと思う。かれは間接民主政をあらゆる点から否定して、直接民主政を強と唱えている。日本というこの国家の中で、間接民主政に甘んじているわたくしたちは、ここでおいに考えさせられたのである。

主権は分割できない、主権は譲りわたすことはできない……などとかれの言うことは正しい。もっともだと思う。そして政治の代表者をたてることによって起きている現代の種々な問題について考えてみてもわたくしたちは直接民主制にあこがれる。しかし、それはあくまでも理想に終わってしまうきらいがある。

わたくしたちグループは間接か、直接か、色々討論し、クラスの中でも問題になった。そして結局は直接民主制は素晴らしいが理想にすぎないということに結論づいたのである。しかし理想であるということによって終わってしまってよいのだろうか。わたくしたちはこの点において、自分たちの消極的な、そして利口すぎる考え方に憤慨した。ルソーの掲げる思想が明らかに理想とされているこの現代、思想と行動が一致しない現代にわたくしたちは疑問をいだくのである。

また、ルソーを研究したことによって人間の本質について新たに考えさせられたことは言うまでもない。生まれた時は自由平等で、のちに社会によって本質をゆがめられるということについてはあまり賛成できないが、確かにわたくしたちはそういえば社会の鎖によって自分の本質をゆがめているということが少ないわけではない。しかし自由という意味を本当に理解できたならば、これを乗り越えていくことは可能である。

ルソーの与えてくれるものは大きい。自然へ帰れというかれの言葉を、わたくしたちはさらに深く考えていきたいと思う。

# 功利主義 ( ベンサムとミルの比較 ) ( 1時間分 )

都立杉並高等学校 教諭 新井 清

## 〈授業内容のまとめ〉

### (1) 功利主義

- ①源泉……イギリス経験論
- ②目標……利己的快樂の追求と社会全体の幸福との調和
- ③功利とは……人生の主要目的である幸福快樂に役立つ有用性

### (2) ベンサム

- ①意義……個人的から社会的, 利己主義から利他主義へ
- ②「最大多数の最大幸福」—実現過程—(a)快樂の量的計算……快樂  
苦痛は量的に計算できる。7つの基準。(b)四つの制裁(外的制裁)  
…自然的制裁, 道德的制裁, 宗教的制裁, 法律的制裁
- ③限界…量的, 外的制裁

### (3) J. S. ミル

- ①意義…ベンサムの修正発表
- ②内容…(a)快樂に質的差異…快樂に高尚と下等あり。“満足せよ豚よ  
りは, 不満足な人間がよい”  
(b)内的制裁の重視—良心—共感  
(c)克己……社会全体の幸福増進のためには, 個人的幸福の犠  
牲も必要。  
(d)理想主義的, 社会主義的倫理観
- ③時代背景と J. S. ミルの思想

<ねらい> イギリス経験論の立場は、ホブズやロックのように、個人の欲望や自己保存の本能を根本として、人間は幸福を追求するものであるとした。が、功利主義は、広く社会的な基盤でこの問題を考えようとした。功利とは、ベンサムによれば、快樂や幸福を産出する傾向をいい、功利主義あるいは「功利の原理」とは、すべての行為をそれが関係している団体の幸福を増すか減すかの傾向によって、是認しまたは否認するところの原理であるとしている。

学習の参考資料としてベンサム、ミルの原典の一部の配布を試みたが、全体を通して、二人の思想家の相違点はどこにあるかを念頭において読ませた。

ベンサムが幸福の量を問題にし、量の多少によってよりよき、あるいはより悪き幸福に区別できるとしたのに対し、ミルは、ベンサムの功利主義を基本的には受けついで、幸福における量の重要性を認めながらも、肉体的快樂と精神的感樂とに質的差があることを明らかにしている。人間は単に快樂の量によってだけ支配されるものではない。また自己の幸福と社会のそれとの調和について、ベンサムは最大多数の最大幸福をとき、もし社会の福祉をはからないときは制裁をうけるから、どうしても最大多数の最大幸福をはからざるを得ないとした。なかでもベンサムは法律的制裁をもっとも重視し、あくまで社会の利害の立場から、人びとを権威をもって指導することを主張した。これに対し、ミルはベンサムの外的制裁に対して、内的制裁としての良心の制裁に重きをおき、良心のとがめ、なすべきことをなさないときの苦痛の感情が最大の制裁であるとしている。そして良心の核心は、人類の社会的感情である共感 (Sympathy — 他人の幸・不幸に心を動かす社会的感情をもって道徳的判断の根本原理とする) であって、これを利他的傾向をもつものとして重視した。つまりミルは、ベンサムの個人主義的倫理観を社会主義的倫理観にまで拡大しようと努力したので、これは当時のイギリスの資本主義経済の発展にもなる社会問題の発生と深い関係があることに注意させたい。

## 〈生徒作文〉

都立杉並高等学校 2年3組

ペンサムの功利主義、最多数の最大幸福などは政治を行う上では一つの規範となり、そのようにもっていくことがよいことだろう。また、未開発、貧民などに対してはこのような思想でよいであろうが、今日のわたくしたちにとっては少しあてはまらないような気がする。その点、わたくし個人としてはミルの質的な幸福というものに共鳴する。また幸福というものは同じ幸福を人びとに与えたとしても、各自それぞれ受けとりかたが違うということがやっかいである。

それは個人の思想、環境によって幸福ともなろうし不幸にもなろう。ペンサムのいう幸福とはおもに物質的なものをいい、ミルのほうは精神面について言っていると思う。今のわたくしは精神的な幸福、ミルのいう「自分自身の幸福以外の何か他の目的に心を傾注する」という方にあこがれを感じるし、ヒッピーとかフーテンなどというものは物質的にはめぐまれているが精神的な幸福、心を傾注するものにめぐまれないので、むしろ求めない人びとが何かと理屈をつけてフラついているように思う。昔は物質を得るために心を傾注するものがあり、今日では物質が豊かになったために精神的余裕ができてより質的幸福を求める傾向が強くなって来ているように思う。しかし今はやりのマイホーム主義とは物質的満足による幸福、安定したものからの幸福感。そのような小さな満足にみんなが溺れていくとしたら、人類の進展は止まってしまうだろうし、そんなものに満足していくわたくし自身が恐い。ミルの幸福を求めながら、ペンサムの幸福にかたむいていくのが現在のわたくしたちではないだろうか。

## 〈生徒作文〉

都立杉並高等学校 2年1組

ベンサムは幸福の量を問題にし、量の多少によって、よりよき又はより悪き幸福に区別できるとし、ミルは幸福の量ではなく質を問題にし、感覚的快楽よりも精神的快楽を重んじた。自己の幸福を社会との調和について、ベンサムは人間はもともと利己的であり、自己の利益を追求し、苦痛をのがれようとし、それが幸福、快楽をもたらし、これを最大限に実現するために「最大多数の最大幸福」が必要であるとした。ミルは公衆の幸福をはかるのは決して自分のためでなく、各人の心にある根本的な道徳的感情である。つまり人間は必ずしも利己的動機によってのみ動くものではなく、本質的に利他主義的動機のあることを説いた。

わたくしの幸福についての考えは、ベンサムの「最大多数の最大幸福」、ミルの「満足した豚よりも、不満足である人間の方がよく、満足した愚者であるよりも、不満足なソクラテスであるほうがよい」。という言葉から、感覚的快楽よりも精神的快楽を重んじています。これらが実際に実現されれば、この世は本当に幸福になるでしょうから。わたくしは人間というのは皆本当は他人の事も考えるし、親切で思いやりがあると思います。でも今の世の中で人にはドライになったと言われています。自己本位になっています。他人の事などにかまっていられないというきびしい世の中になって来ているからこそ、かえってわたくしたちは社会全体の幸福を考えることが必要だと思います。でも始めからそれは大変だと思うので、まず自分の身近のことからだんだんと広い世界のことまで視野を広めて、皆で協力してこの世界を幸福にする努力をすればよいと思います。そしてその努力しているところに自分のやっている事に対する誇りも生まれてきて、それが又、幸福にもつながるのではないかと思います。

# ヘーゲルの思想 (1時間分)

都立町田高等学校 教諭 寺島 甲祐

## <授業内容のまとめ>

### (1)ヘーゲルの位置

- ①ドイツ観念論の大成者      ②近代思想と現代思想の接点

### (2)ヘーゲルの思想

#### ①根本思想

- (a)絶対者、ないし神の把握を目的とする。  
 (b)絶対者をいろいろに表現→絶対者=精神=絶対的理念=理性  
 (c)絶対者の実体は自由である。—「世界史は自由の意識における進歩の歴史である。」「理性的なるものは現実的である。……」

#### ②弁証法

- (a)絶対者の自己実現の論理が弁証法である。  
 (b)弁証法の歴史——*dialektike* (問答法)、ゼノン、ヘラクレイトス……。  
 (c)弁証法の要点——矛盾は存在する。そして存在も認識も矛盾を含むがゆえに発展する。矛盾の意味(生と死 善と悪) etc.

#### ③人倫

- (a)現実の家庭や市民社会・国家の中にあられた自由の現実態  
 (b)家族—愛によって結ばれた自然的・情感的統一体。市民社会—欲望充足と労働との相互依存の関係。欲望の体系  
 国家—精神が完全に自由を実現した最高の人倫的完成態

<ねらい> (1)ヘーゲルの位置においては、ヘーゲルがカント、フィヒテ、シュリングと続くドイツ観念論の大成者であることを説明する。と同時に、かれがフランス革命と産業革命を通過したばかりの19世紀初頭のヨーロッパに生き、プロシアの絶対王制を合理化し、その理性主義・論理主義の立場に立つ哲学がやがて鋭い反対批判を呼び、社会主義や実存主義の現代思想を生み出す源泉となったことを説明する。

(2)ヘーゲルの根本思想では、ヘーゲル哲学の中に概念である絶対者の指導に留意する。先のカントがわれわれの論理的認識の可能の範囲を現象界・経験界のみに置くのに反して、ヘーゲルは、あらゆる現象の根底に絶対者をおき、絶対者の概念的認識を展開するのである。ヘーゲルによれば、有限的事物の認識を深めて行き、有限者の変化・発展をとらえることによって、有限者の中に自己を実現している絶対者を把握することができるとするのである。

(3)弁証法は矛盾の論理学であるといわれるが、生徒に対して、弁証法の論理形式である正・反・合の3段階を具体的事例を二・三あげて説明することが大切である。そして、すべてのものは、存在においても、思考においてもそれ自身において矛盾を含むものであり、矛盾はあらゆる運動および生命性の根源であることを理解させたいものである。さらに、矛盾の内的連関について大切な「否定」「否定の否定」、即ちアウフヘーゲンの意味をつかませることが大切である。

(4)ヘーゲルの説く人論はカントの描いた「目的の王国」といった当為の世界においてでなく、現実の家族や市民社会・国家の中に現われるものであり、自由の具体的・客観的現実態であることを説明する。しかし、注意すべきはカントの説く自由を否定的に教えたり取り扱ってはならない。また、ヘーゲルは国家は精神が完成に自由を実現した最高の人倫的完成態であると主張し、個人の最高の義務は、国家への帰依と献身であるとした点に就いて考えさせ討論させて見ると面白いと思われる。

## 〈生徒作文〉

都立町田高等学校 2年C組

ヘーゲルの授業が最も印象的だった。先達者のカントが抽象的な説き方であったのに対し、かれの具体的な言葉がぼくに倫理・社会の面白さを教えてくれたらしい。「世界歴史は自由の意識における進歩の歴史である。」このかれの言葉を理解する事はヘーゲルという哲学者を理解する事だと考える。これによって、もやもやしていた考えが一変に整理出来た。弁証法を理解出来た。

かれは現実とは「相対立し矛盾し合う二つの物が……必然的に調和統一されている姿」だと教える。この事は人間社会の万事を物語るている。またわれわれの思考や認識においても言えることである。ぼく自身ある考えを持つとすぐその反対の考えが浮かんでくる。ホーム・ルームの討議やら、さらに議会の討論においても同様であるといえる。宇宙は無限でありながら有限のようであるし、さては数学のタンジェントのグラフさえ矛盾の統一のように考えられてくる。

ヘーゲルの「人倫」について学んだ。「人倫は具体的で客観化された自由の現実態である。」これを学んだ時「救われた!!」と思った。現実の社会はこんな状態なのか?。全人類は平和共存出来るのか?とまあこのように考えて行き詰っていたのである。「人倫」の考え方こそぼくの行き詰りを奪回してくれた。ヘーゲルは実に良く現実の法則に沿って物事を論理立てた。その無理のない弁証法によって得る究極が「絶対者」「自由」であるという結論は、ぼくにとって十分満足のいくところだ。このドイツ観念論こそ合理論と、経験論の総合的近代哲学である。同時にまた「ヘーゲル哲学」が現実社会に合なくなつて反対批判を受けて崩壊して行つたのがショックである。「ヘーゲル哲学」が崩壊していった原因を追求して、これを明らかにする事こそぼくら現代人の将来の課題であるようだ。この課題に対処出来る自分自身に心から「拍手」を送りたい気持である。

## 都立町田高等学校 2年B組

始めて本を読み、十分の一も理解できないうちから「ヘーゲルは欲の無いのんびり屋。それでいて感情家。」こんな風にわたくしは感じていた。かれの理論は抽象的なようだが逆に現実的だ。わかり易いようで理解する限界がない。

わたくしは弁証法を一生懸命に学んだ。正・反・合。授業でもいくつかの例が生徒間で交わされ、隣席の友とも互に話し合った。しかしそれは決して充分なものではない。反対に考えれば考えるほどわからなくなるのである。いずれにしても最低限度のアウフヘーゲンは理解できたと思う。生と死・善と悪・平等と差別、このような相矛盾したものが必然的に統一され、それが保たれているのが現実だ。そして、それらの内的連関をさぐる時、矛盾があらゆる運動及び生命性の根源であることがわかる。あらゆるものの変化・発展は、矛盾対立するものの相互否定による克服であるといえる。

そして弁証法の考えを根底にして「人倫」を説いた。ヘーゲルはカントよりも主張していることがわかりやすい。道徳は歴史的事実やその時代の社会状態を加味して考えなければいけないと思う。そうしなければ、いくら立派な道徳論でもそれは宙に浮いて、生活に密着しない。その点でヘーゲルはなんとなく親近感を感じさせる人である。わたくしは平和について「戦争するから悪い。」とよく言う。叔父は「いや、やむをえずやる場合が多い。」と言う。ヘーゲルにならって、平和を正、戦争を反とするならば、合を生み出すにはどうしたら良いのだろう。できれば正の平和だけを取りたいのだが、そうするにはかならずと言って良い程、反の戦争がつきまとう。これが歴史的事実だが、ヘーゲルだったらどのように考えるだろうか。夢中でわたくしは考えこむ。とてもむずかしい。でもこれは一生とり組まなければならない問題である。多少なりともより良い哲学を生み、平和な世の中をつくりたい。無言のうちにヘーゲルは、わたくしにこのようなことを悟らせてくれたのである。

## 第Ⅳ分科会

### 実在と自由

(2時間のうちの2時限目)

都立小平高等学校 教諭 井原茂幸

#### 〈授業内容のまとめ〉

1. 実存は本質に先立つ (サルトル)

本質 一般的な事物の特質・・・存在の可能性

実存 現実の個別な存在・・・存在の現実性

人間は自ら創るところのもの以外の何ものでもない。

人間は本質に先立ってまず実存する・・・主本的定義こそ真理。

2. 人間は存在するのではなく実存する。

事物存在・・・即自存性 それ自身である存在

世界内存在・・・対自存性 他への意識をつつんだ存在

人間 (実存) は即自存在 (現存在) から超脱した存在

3. 実存することは自由であること

人間は自己を設計し、自己を選びとる。

自己の選択はいかなる原理、価値にもとづかない。

人間 (実存) はだれでも自由であるはかない存在

4. 人間は自由の刑に処せられている。

自由な選択は不安 (他への可能性の限定) を伴なう・・・自由な重荷

自由をすて不安からのがれることは自己欺瞞、自己逃避である。

5. 自由な他者との連帯性のもとに成立つ

わたくしの自由は他者の自由に、他者の自由はわたくしの自由に依存する。

自己と他者の実存。主体性をめぐる愛としての戦、戦いとしての愛

〈ねらい〉 サルトルの考え方を中心にして実存主義における自由の考え方を理解させ、自由の責任を自覚させるようにしたい。

この主題は「自由と平等」のテーマのうち、自由のいろいろな考え方の一つとして取上げたもので、第1時限目には ①実存主義の社会的背景 ②人間回復の思想としての実存主義と社会主義 ③実存主義の類型 ④実存主義とは何か ⑤実存主義の特徴を取扱い、本時はそれに続く第2時限目の取扱いである。

自由に対する考え方は大別して ①人格的自由・・・内心、意志の自由を主とするカントやキリスト教の人格主義的自由 ②社会的自由・・・社会的政治的束縛からの解放を主張する、ロック、ルソー、マルクスなどの社会主義的自由 ③実存的自由・・・徹底的に人間の個性性を重視し、個別的特殊的条件の下での主体的な在り方、実存の中に人間の真の自由をみようとする実存主義的自由に分けることができる。

実存的自由は、人間の存在の在り方と密接に結びついている。人間はなげ出された存在 (Entworfen-sein)として、単に目の前にあるような事物的存在 (Vorhanden-sein)としてでなく、まわりのものとかかわりを持ちながら存在している。(in-der-welt-sein)それ自身でぼつんと存在する即自存在 (an-sich-sein)ではなく、対自存在 (für sich sein)である。この自己自身に対する意識をも自己の中に包み、絶えず即自存在からの超越の可能性をもつ実存であるが故に人間は自由である他ない存在なのである。自ら自己を設計し、自己を選択するところに自由があるが、それだけに自由は不安と負目を伴なうものである。この不安に耐えて、自己の真実な在り方を求め、より真実な自己へと超脱するところに自己の実存が開けてくる。しかもこのような実存の自由は、自由な他者との出会いによって裏付けされる。自由は自己自身に対してだけでなく、すべての人々に対する責任を伴なうものであり、ここに自由の連帯性がある。

## 〈生徒作文〉

都立小平高等学校 2年G組

われわれには真の自由を持ち得る自信が少ないように思う。だから他人の言動によって意志が左右されやすい。真実の人間になることを目的とし、それに向って自己を改善していくことが実存の第一歩であろう。また実存は人間の理想のあり方である。しかしわれわれにはそれが頭底無理なことと思われる程困難なことだと感じる。わたくしの一生の総ての選択がわたくしの手にて委ねられている。重すぎる課題だ。時には絶対的な何ものかがわたくしを支配してくれればよいとさえ思う。他人の命令に従って行動することの方がずっと気楽だ。自分で選択することは苦しいことであり、不安でもある。真の自由とはこのような苦しみや不安を克服していくことなのであろうか。不安を解消しようとして物事や自分を黙ってみつめる。それがわたくしの心にますます大きな重荷を与えることになる。この矛盾をもっとよく考えることが必要だ。そうすれば実存という意味も理解されるに違いない。

自己の中に真実な自己を見出す。それを選択し、新しい自己を創造する。これは実存主義の理論であるが、そこには矛盾がありすぎる。人間は自由であるが、またそれは不自由であり、不安であるからだ。

わたくしは実存の連帯性をヤスパースのことばの中に見出した。「実存と実存の交わり」においてのみ存在する「実存の確実性」、他者とともに人間は存在するのだということがわたくしを感動させた。人間は一人では存在しない。必ず人間を取りまく社会がある。このことは人間の個別化、自己喪失の防止に役立つ。もちろん自己自身をみつめ、他人をみつめることは容易なことではない。何しろ自分も他人も難解な「自由」を持っているのだから。しかしそれを実現し、ひとりひとりが自覚的な人間になることによって理想の社会が築かれることを痛感する。それにしても「実存」がわれわれの自我や本質に先立つという一つの真理は興味深い。

## 生徒作文

都立小平高等学校 2年G組

現在この世において我々は自由であるという。けれどもその自由が我々を縛って不自由に追いやっているようだ。

先日担任から一枚の紙がくばられた。大学の文理科コース別希望大学、卒業後の職業などを記入するためのものであった。心に決めていた進路を書き入れた後その用紙の提出をこぼむ心の作用に気がついた。この一枚の紙片に〇〇コース〇〇大学と記入したことによって自分の未来が決ってしまうような気がしたからである。大学を出た場合進むべき道は多少たりとも限られてくることは言うまでもないことだ。もちろんこの学校を選ばなくとも他に多くの学校がある。しかしそれらのどの一つをとってみてもやはり卒業後の道は限られるに違いない。自由・・・選択することができる・・・だが選択したことによって無限の筈の可能性が少しづつ限られてくるのを感じる。友達と話合ってみてその友も同じことを考えていることを知った。この一枚の紙片はわれわれの一生を、進むべき道を決めているようで恐ろしい気がする。

また職業の自由な選択においても、自分自身の生まれ育った環境などが大きくこれを左右することになるであろう。「人間は自ら創るところのもの以外の何者でもない」ということは実存主義の原理であるが、やはり外的な環境の作用の少なくないことを感じないわけにはいかない。「実存は本質に先立つ」という考えに対してもわたくしは多少の抵抗を感じる。人間以上の何者かが本質にしたがって実存せしめたのではないかと考える。これはわれわれの理性では考えることができないことかも知れないが否定されるべきことではないであろう。人間存在、それ以前のことは人間の考える哲学の範囲をはるかに越えたものかもしれない。どのような立派な思想家がぼくにその考えの不必要性を説かれても、ぼくの心を納得させることのできるものではないと思う。

# キルケゴールの宗教的実存 (2時間のうちの2時間目)

都立豊多摩高等学校 教諭 金井 肇

## 〈授業内容のまとめ〉

〔導入〕 倫理的段階の問題：普遍をめざすだけでは、人生の意義の問題には答えられない。

〔展開〕

(1) 主体的真理

① 絶対的目的：死をも睹けうる目的——個性的生——普遍を超える。

本来の自己になること。

② 絶対者（神）：自己の存在の根拠に眼を向ける ←

③ 主体性が真理

(a) 存在の深み——把握不能——何であるかはわからない。

(b) 真理にいかにかかわるか 絶対者に真剣にかかわる生活

(2) 宗教的生活

① 普遍（倫理）の超越：絶対者へのかかわりによる——アブラハム

② イエスの信仰

(a) バトスによる 理論的には至れない。

(b) 二重のパラドックス

③ 真の信仰者 = 単独者

(a) 殉教者イエスにしたがう者 = 真理に命をかける者

(b) ありきたりの信仰とのちがいは——形式的・現世楽善的でない。

〔まとめ〕 自己を真剣にみつめて生きた典形としてのキルケゴール

<ねらい> キルケゴールを通じて自己の存在をみつめさせ、「実存」を感じとらせ、自己の生き方をそこから築かせる一助としたい。

前時において、生涯（父、大地震、レギーネ、コルサル事件）、美的生活および倫理的生活の指導を終わっているので、倫理的な生活も“生きがい”の問題には答え得ないことを、発問しながらわからせ、絶対的目的へ導入する。

自己をみつめ、漫然と生きる状態から脱却すると、生きる目的が問題となる。それは、子のために命をかける母親のごとく、有限な生を超えた絶対的なものとなるが、それは全く個別的なものである。しかし、人は単なる空想に命をかけるわけにはいかない。絶対的目的はしたがって、自己の生存を根拠づけているものに眼を向け、そこに立脚したものでなければならない。このことを、生徒に問いかけながら、ぎりぎりと感じとらせたい。「神」の語はつまづく生徒が多いので、ほとんど使わないですすめる。

自己の生存の根拠である絶対者を、認識することはできない。とすれば、この問題から眼をそらさないで真剣にみつめていく以外にない。そのかわりかたが真実であるならば、自己にとって真実であるものが、そこから得られるはずである。「主体性が真理である」ということをこの意味でとらえさせたい。例示がぜひとも必要で、わたしは、一人の教師に対する生徒の見方のちがいによって、それぞれの生徒の受けとるものはみなちがいがい、しかもそれぞれの生徒にとっては、自分の受けとったもののみが真実のものとなる、という例をとった。絶対者にかかかわるかだけが問題であるゆえんである。

絶対者に真剣にかかかわる生活は、普遍的倫理を超えねばならないこともおこる。アブラハムの例を、レギーネとの関係と対比しながらわからせたい。このようなかわりは、教会へ通うことで信者と思っような信者とはちがう。レギーネを失なうとも、真実に、ただひとりで、絶対者に眼を向けて生きるのである。宗教性A、Bの区別や、罪そのほか重要な事項があるが、一つの角度から焦点をしぼって、根本の問題を理解させることを主とした。

## 〈生徒作文〉

都立豊多摩高等学校 2年B組

キルケゴールの1時間目の授業が終わったとき、かれについてもっと知りたくなっていた。ぼくはセンチュリーブックスの「キルケゴール」を買って、夢中で読んだ。そこでぼくは、かれのあまりにも純粋な苦悩を知った。

かれはなぜレギーネを愛しながら結婚しなかったか。罪にみちた自分が彼女と結婚することは彼女をあざむくことになるのではないか？ そう考えたことだと思う。痛いような苦悩がわかるような気がする。

レギーネを得られなかったかわりに、生み出された思想は偉大なものであった。人生の3段階は、考えていくとたしかにそうになってしまうのだが、宗教に縁がなかったぼくには、宗教的段階はまだよくわからないところもある。

強く印象に残ったのは主体的真理ということだ。存在とは何か、という考え方とちがい、キルケゴールは「個人のあるものへのかかわり方が真実に神とのかかわりになっているかどうかの問題である」といっている。神とのかかわりがいかに生きるかということになるのは、神の認識はそれぞれの個人で違うからだと思う。抽象的なものは個人によっていろいろに解釈される。そのために誤まりや偏見が生まれると思う。

神とのかかわりということもわかるような気がする。人間は弱いものだからだ。アブラハムが愛子を殺そうとした強さも神への信頼があったからだ。ぼくならとてもそんなことをしようと思えることはできないし、一生迷いっぱなしだったと思う。

それほど強い信仰を持たないにしても、「いかに生きるか」という問題には真剣に立ちむかっていかななくてはならない。自分をみつめたとき、なんどちっぼけな弱々しい存在かと驚く。しかしそれでも、生きているなら有意義に生きたいと願うのは当然だ。そういう面で、キルケゴールの生き方はすばらしいし、たいへん参考になったと思う。

都立豊多摩高等学校 2年B組

キルケゴールは客観性よりも主体性をだいにした。自分の得たものが、客観的に見て、たとえまちがっていたとしても、自分がほんとうに真実を見いだそうとしたならば、かかわり方においては真実である、というのである。かれは、真理が何であるか、ということは問題としていない。いかにかかわるか、ということの問題にしている。

かれのいう、絶対的なものにかかわる、とはどういうことだろうか。自分の生きる意義を自分自身に問いつめていく、そのことがほんとうのものを見出そうとするかかわり方を示しているのだと思う。そしてかれは、絶対的なものはかれ自身のなかにはなく、絶対者のなかにあるということがわかった。

かれの見出した絶対者はキリスト教であり、ただキリスト教に従い、そのなかにはいっていくことに人生の意義を求めた。神の前にひとりで立ち、信仰のなかにはいっていくことこそ、真の自己に立ちかえることだと考えた。だから、真の信仰は単独者である。

恐いような気もする。しかし、自分の生きる目的が、自分のなかから見い出せないなら、絶対者にまかせきるといこともわかるように思う。かえて、安心があるような気もする。

現代においては、科学万能の考え方で、とかくものの根源を見出そうとする傾向が強いと思う。しかし、人間は万物の根源を見い出せるはずはないし、かりにそれが可能であったとしても、人間が生きていくためにもっとも重要なものである人間性を回復し、保持するためには、どのように真実をもって人生のいろいろな物事に対面するか、ということの方がたいせつなのだと思う。新しいものの見方が開けたような気がする。

はじめてふれた思想なので、まだ深くわかっていないと思う。キルケゴールの作品を、直接読んでみたい。



<ねらい> ほう大なマルクスの思想体系を短時間でまとめるのは困難であり、教科書にもいろいろの扱い方があるようだ。 1.経済学 2.政治論 3.哲学と一応三領域に大別されるその内容について、「倫社」ではどう扱うべきか— わたくしにはまだ定見がない。ここではかれの思想の出発点、問題意識の端緒を採るという意味で人間疎外論を中心にすえてみた。

ヘーゲルの弁証法の学習を想起しつつ、発展とは自己否定（外化＝疎外）であること、そのくり返しがより高い段階での自己実現（回帰）であることから、疎外を発展の契機として把握する— 疎外のヘーゲル的意味。

さらに、人間の本質（その歴史）を理性、精神とみる観念論に対して、人間を労働の主体と見る唯物論の立場からの疎外論— 人間の本質的活動である労働が、資本主義下では、労働者の人間性（人間としての本質）を奪っていることに着目したマルクスの立場が特にとりあげられる。すなわち、労働は労働者の自主性に基かず、生産物は資本にくりいれられ、その資本は労働者を支配する。労働はもはや労働者に充実した喜び（自己の本質発揮としての）をもたらさない。人間の生み出したものが、人間によそよそしく対立している。（資本主義の矛盾）

この解決はその矛盾そのものの徹底— 労資対立・階級闘争として展開して資本主義自体を否定し、その反対物に転化する（共産主義）ことによつてのみ得られる。晩年のマルクスは疎外という用語を用いなくなったが、資本論の経済学や、社会主義運動、階級闘争論はこの人間疎外現象への具体化された解答とみるのが適当であろう。共産主義が単なる政治論でなく、その出発点において人間性の回復の課題が中心にすえられていることは、その後のマルクス主義の歴史的発展でいろいろの派生的問題（修正主義、スターリン主義、毛沢東主義）をかかえているにせよ、大いに注目してよいことであろう。マルクスの思想を完成した理論体系として見るより現代への問題提起としてとらえることの方が有意義と思われる。

都立三田高等学校 2年1組

西洋近代思想の学習が終った後で、自分の一番関心をもった思想家をえらんで、グループで話し合いました。わたくしたちはマルクスをえらびました。

・「マルクスって現実主義者であって、理想主義者ではないみたいね。」

「社会主義には自由がないみたい。」

「でもマルクスが社会主義を唱えたのは、資本主義で人間の自己疎外が起ったからでしょう。」

・「人間の本質は生産活動である、とマルクスがいつている点について。」

「そうだと思う。知識は、精神の働きではあるけれど、やっぱり労働がもとだと思う。」

「まず精神、人間は考える葦よ。人間の本質が労働なんて、人間を物質としてだけ見てるのは反対。」

「でもこの場合の労働は力仕事だけじゃなくて、精神の働きも含めているのでしょ。」

「何かをつくり出すこと、人間だけよ、それができるのは。」

・「新しい社会の展望について。」

「マルクスはもっと広く人間の生活をみるべきだわ。」

「でもそれは、今のソ連や中共を見ていつているのでしょ。マルクスの考えはもっと遠う理想があつたと思う。今の社会主義はまだそこまで行つてないのよ。」

「中国人は生き生きしているじゃない。働くことに誇りをもっている。きれいなスカートに代わつて太いズボンみたいなもので一生懸命やつている。マルクスの理想に近づいつているのだと思う。」

「でも、社会主義には社会主義なりの疎外が起きるのじゃないかしら。」

「社会主義はどこに行きつのかしら、実際は。」

都立三田高等学校 2年4組

たくしたちのグループの報告をします。

人間の自己疎外ということが、よくわからなくてうまくまとめられませんでした。物質的な生活について疎外が説かれているけれど、もっと精神的な面のことのように思えるという意見が強かったようです。

最初に人間と動物を分けたものは、理性の有無ではなくて、生活に必要な物質を生産するか否かであるという、マルクスの意見は、世界史や生物の学習からいって賛成という人が多数でした。

社会主義については、まず、社会主義と自由が問題になり、それは両立しないという立場と、今の私達の方がずっと自由がないのではないか。たとえば共産主義思想の人は会社、社会から疎外されてしまう、問題は自由の意味なのではないかという人とに分れました。また、年をとったり、お金ができたりすると共産的傾向が少くなるというけれど、それは単に思想だけの共産主義だからで、本当に体で感じ、労働によって得た思想ならそういうことはない、その意味で今の学生運動には疑問を感じる。これはわたくしの意見です。話はどうしても教科書からはなれて、現在の社会主義の問題に行ってしまいましたが、それは社会主義が本当に資本主義の欠点を救えるか、理想的な人間生活ができるかという点でした。能力に応じて働き、欲求に応じて受取る制度はたしかに理性的ですが、そういう制度で果して人間がよく働くか、よく働かすために政治的に強制が行われているのが中ソではないかという人がありました。でも、この点は、まだ社会主義の歴史が短いからで完成して行けば、人間そのものも新しい制度に合って行くし、社会全体が豊かになれば、自主性にまかせてもうまく行くのではないかと思います。

この討論で、知識の乏しさを痛感しました。参考資料をもっと多く読まなければ、ただ好き嫌いをいい合うだけに終わってしまうので発展できません。

## ガンジーとネールの思想

(1時間分)

私立大東文化大学第一高等学校 教諭 佐原 一 宇

## 〈授業内容のまとめ〉

- (1) ガンジーネール思想と当時の社会の概要  
 インドの歴史のあらましを説明し、イギリスの植民地支配より、民族の独立と解放を成功させるまで。
- (2) ガンジーとネール思想
- ① 真理について
    - (a) 思想言語行為=人間の究極の目的
  - ② 不傷害について
    - (a) 暴力否定=非暴力主義=愛憎
    - (b) 不正や悪に対しての現実的闘争
    - (c) 宗教的無抵抗主義と道徳的抵抗主義の統一
  - ③ 純潔について
    - (a) 自己を統制する=努力
  - ④ 無所有について
    - (a) 何の貯えもいらぬ=物的手段の不必要
    - (b) 忍耐と実行の積極さの必要
    - (c) 不屈の意志力の強さ
- ⑤ ①~④が理論となり実践されガンジー・ネールの血肉となった。
- (3) ネールの思想
- ① ガンジーの思想を批判しながら継承する。

〈おらい〉 まず、インドの歴史を簡単に復習し、ガンジー・ネールの思想がいかに形成され、インドの独立と解放をなしえたかについて説明します。古代インダス文明より始まったインドの歴史は、游牧生活から定着農耕へかわり、さらにバラモン教の発展は、カースト制度の発達をうながし、これを受けた仏教も分裂した。劣悪な自然環境や長い封建社会（王朝・士侯・貴族地主・村落共同体・農奴性）・宗教・言語や人種等々のインド社会の後進性そのものが、イギリスの植民地支配の原因となった。イギリスの官僚的支配（奴隷・二重搾取）や飢饉は、セポイの乱を呼び起し、インド民衆に不正・侵略・不平等に対する目を開かせた。さらにガンジー・ネールの指導のもとに、反英非協力非暴力非服従の独立解放運動が生まれてきたのである。しかしガンジーの死後20年たった現在もまだ封建性が残存し、経済的社会的な諸問題は民衆の生活程度を低くし、文盲率の高い後進国にしている。ガンジーは、釈迦の慈悲の心・縁起の法・四諦・八正道の考え方の影響をうけ暴力否定と生あるものへの慈悲の心となり、視野の広い思索・理論・実践となった。またかれの思想は、ヒンズ教の基本原理解である絶対者は人間そのものであるという人間尊重の考え方にもとづいている。さらに、トルストイとの交通やソローやラスキンの著書から大きい影響をうけているのである。

ガンジー・ネールの思想の特色の第一は、人間の究極の目的は、真実の追求にあったこと。第二は、それがすべての生物に対する愛情であり、悪意や不合理や虚偽を排することが、真理追求の手段でもあること。第三は、禁欲的修練や修業によって自分を統制し安定させること。第四は、博愛主義にもとづいていることである。非暴力は、万物に対する善意であり、完全愛である。博愛とは、自己にとっては不利になっても、他人に対しては利益を与えることである。この為には自己を捨てる必要がある。ガンジーは、イギリスの誤りを悟らすために、11回の断食を実践し、手段を尊重すれば、真理の目的が達成される事を証明し、ネールと共に独立運動を成功させたのである。

ガンジーの偉大な魂は、現代人の指標となっている。

私立大東文化大学第一高等学校 2年5組

インドは当時ヒンズー教やカースト制度などにより階級の差が激しく高い地位の人や〔士候・貴族・大地主〕低い一般民衆等々に著しい身分の差があった。一般の民衆は学問も学べず貧しい生活であった。この様な状態のインドは、権力の強い西欧の国イギリスの長い植民地支配の下にあつて封建制度も長く続いた。ガンジーはイギリスに留学しそこで法律を学び弁護士になった。ガンジーが立派なのは、権力武力によって外国に支配されているながらも暴力を否定し権力に服従しないであくまでも抗戦したことであると思う。暴力の否定とは、武力で争わないで被害者を一人も出さない事である。この精神はインドの民衆の自覚をうながし、長い闘争の後独立を達成した。ガンジーは指導力があり、人間の気持を良く理解し、暴力否定を通して不正悪に戦い、自分自身に常に厳しく生き、自分の国を真剣に愛した人だと思ふ。かれの実行力、忍耐、努力、不屈の精神と正義感、は人々に尊敬されるだろう。ガンジーは武力や権力の支配に抗してインドの独立を成功させるために随分苦勞したであろう。ガンジーの独立解放運動を受け継いだネルは、ガンジーの思想の影響を受けながら自己の考えで国の安定に努力した。ガンジー・ネルがインドで生れていなかったら、インドは必ずもつともつと長く外国の支配下に苦しんでいたとぼくは思ひます。

## 〈生徒作文〉

私立大東文化大学第一高等学校 2年5組

最初にガンジーとは、どんな人ですかと授業中たずねられたとしたらわたくしはその時何と答えるだろう、何も考えずに「はい、ガンジーとは偉大なインド独立の父です。」と簡潔に答えてしまおうだろう。その偉大さにも気がつかず当時に生きたガンジーを良く理解しないからであろう。同じ東洋に生きながら日本の安楽な毎日の生活に流され自分自身が墮落しているからであろう。これといって何も考えず主体性のないままで家と学校を電車のように往復する生活の中から、これからの日本を方向づけるような思想が生まれるわけがない。わたくしは授業中ガンジーの思想を聞いていると次第にほんとうのかれの偉大さがわかってきた。インドには4億5千の人口と低教育、それに多数の低生活者、飢えた貧しい人びとがいるという。タースト制度封建社会と当時のイギリスの植民地支配と東インド会社の加工貿易二重搾取の悪どいやり方の中でガンジーはイギリスに留学し法律を学び一時弁護士となったが、愛国心の強いガンジーは、イギリスの不平等政策に対して、国民の自覚と独立を呼びかけ、貧困の中にあつて、先進国イギリスの政策に屈服している主体性のないインド国民の為に身を投じた。人間は尊厳とあり民は皆平等であるというかれのヒューマニズムは、イギリスに対して非協力非暴力不服従の態度をとらせ、自己の欲望をすてて万物を愛し、博愛主義に生きさせた。何回もの断食をし、かれはこうしてインド独立に貢献しインドの父となった。かれは欲望をすてて思想をつらぬいたが、ある意味では自分に勝ち世界に勝ったといえよう。しかしわたくしとしては、独立の父としてのかけがえのないその偉大さはわかるが、考えれば考えるほどガンジーの思想はむずかしく、その深さをわたくしはついに理解することができなかった。

## 現代の倫理学

(1時間分)

都立上野高等学校・教諭 石 森 勇

## 〈授業内容のまとめ〉

## (1) 古典的倫理学の特色

## ①人間にとって善い生活とは何か

} 答え⇒ 生活のための助言

## ②人間はいかに行為すべきか

## (2) 現代の倫理学の特色 (アメリカ・イギリス)

道徳論に対して

哲学的分析を行

なう

{ ことばの意味を決める必要・十分条件を研究

ことばの意味を明らかにする過程そのもの

## (3) 哲学的分析による三分類

## ①動機主義・結果説

動機主義 行為の正・不正は行為がなされる動機と依存—カント

{ 結果説 行為の正・不正は行為がもつ結果に依存—ベンサム

## ②主観主義・客観主義 道徳言語の分析 → 道徳基準を引き出す

{ 主観主義 倫理的判断は真・偽と無関係—ホッブス・カント

客観主義 倫理的判断は真偽が適用—プラトン・ベンサム

## ③自然主義・非自然主義・情緒主義

自然主義 倫理的判断は真・偽→自然科学の概念に変形—ホッブス

非自然主義 倫理的判断は真・偽でない→自然科学の {

概念に変形できない—プラトン・キリスト

情緒主義 倫理的判断は感情の表現—カルナップ

〈ねらい〉 現代倫理学（米英のみ）が、先哲の道德論の哲学的分析を行なうことによって、古典的倫理学の研究した成果を、いっそう深める目的で発生したことを説明する。

①両倫理学の特色をのべ、②現代倫理学についての批判および③仏、独その他の倫理学（あるいは哲学）の傾向にもふれる。

次に1時間分の展開例のうち①のみをあげる。

### (1) 哲学的分析の必要なわけ

古典的倫理学は「問い」と「答え」の意味がわかっている、という前提がある。ところが、「問い」の意味は必ずしもわからない、明らかにされていない。「問い」に答えるためには、「問い」の意味が明らかにされなければならないという反省が生じた。こうして問いと答えの意味を明らかにするべく哲学的分析を行なう。→ 問いの分析の具体例を二つあげる。

### (2) 三分類 (①～③) のちがいとその意味することを具体例で説明する。

#### ① 動機主義、結果説、処罰の正当性について（交通事故の場合など）

動機主義 意図が悪 → 処罰できる  
 害意がない、偶然に人に害をあたえる → 処罰されない

結果説 処罰はそれ以上の罰を防ぐ  
 （行為が不正なので処罰する）

#### ② 主観主義、客観主義

主観主義 「これは善だ」 = 「わたくしはこれを知る欲する」 (ホッブズ)

客観主義 道德的判断 = 数学的判断 ( $1 + 2 = 3$ )

「それは善だ = 善のイデアについての判断 (プラトン)

よからの主観主義批判 道德的判断の基準が主観 = 個人の心理 (気まぐれ) にある。道德的生活は成立しない。

## ◁生徒作文▷

都立上野高等学校 2年1組

ぼくたちがこれまで学習してきた、プラトン、アリストテレスから中世キリスト教を経てカントまでの倫理的、人間にとって善い生活とは何か、いかに行為すべきかの二つの問いに答えようとしたものだといギリス、アメリカの倫理学（一部）はいう。

日常生活でぶつかった困難が倫理学の「問い」になり、困難の解決が「答え」、つまり生活の助言ということになる。たとえば、快楽主義では、「善い生活をえるために行為すること」を教えてくれる。

ところが、よく考えてみると、快楽主義でいう「善一正」という意味は何かハッキリしない。こうした反省として、道徳的に使われている言語の意味を明らかにしてこそはじめて、ぼくたちがどの倫理思想を正しいと判断できる、という。

ぼくは、この着眼は面白いと思った。そして、かれらのいう哲学的分析の内容、成果を期待した。しかし、三分類とその具体的展開の説明をきいて、納得できる内容ではなかった。というのは次の2点からである。先生も、授業で批判されたように。

まさに、カント的な古典的倫理学に対して、現行の倫理学には、プラグマチズム、実存主義、マルクス、レーニン主義、毛沢東、弁証法神学などの思想があり、それだけぼくたちにうったえるものをもっている。ところが、哲学的分析で先哲の思想を理解し深めるといったネライは失敗している。

第2に、倫理学。哲学者は自説を説明するのに自説を説明するのに、自動機械をヒュに使うって説明した。自動機械の代表として、18世紀前半までは「時計」、ついで「蒸気機関」、20世紀の現代は「電子工学機械」である。したがって、現代社会に生きるぼくたちの新しい倫理として、先生がまえにいわれた“サイバネティクス”の理論を、くわしく教えていただきたいと思う。

## 〈生徒作文〉

都立上野高等学校 2年5組

わたくしが先生の講義をきいて強く感じたことをのべる。

まず、倫理学は、先哲がいつてきたように、「善い生活とは何か、いかに行為すべきか」——要するに、「いま、いかに生くべきか」といつたわたくしたちの切実な問いに対して、「しかじかに生きよ」といつる指針をあたえるべきものだと思ふ。

ところが、①～③のどの方法をみても、「善・悪・幸・不幸・正・不正」など単なる道徳上のことばの分析だけで、いつころに具体的にこうせよといつた力強い道徳的生き方は示されていない。

わたくしは、善のイデアの存在をいつたプラトン、中庸をいつたアリストテレス、愛をいつたキリスト、善なる意志にもとづく定言命法をいつたカントのそれぞれにひかれる。

つぎに、立場によつて解釈が反対になってしまう点、不思議とも思ふ、かつ、道徳上の真理追求といつた場合、これでいいのかとわり切れない気持ちをもつた。たとえば、自然主義の立場に立つと、倫理的な心理学のような自然科学の部門にすぎなくなり、正しい倫理的判断をするためには、わたくしたちが科学を学ぶ必要があるといふ。自然主義や情緒主義の立場にたつと、倫理学独自の体系をもつことになり、おおいに学ぶべき知識があることになる。

自民党と社会党が国の安全を守るといつたごくあたりまえのことがらにさえ、全くちがつた解釈をするように、道徳上の問題、道徳基準といふものは、立場がちがうとまるで反対になってしまうてよいのだろうかと思つた。

わたくしの考えでは、正しいことはどこでも、いつでも、だれにとつても一つしかないように思ふのだが。こつういふ考えはまちがひなのでしょう。先生、教えて下さい。

## 第Ⅴ分科会

## 親鸞の思想

(1時間分)

都立向丘高等学校 教諭 米田成夫

## 〈授業内容のまとめ〉

## (1) 法然と親鸞

法然と親鸞は、その表現に個性<sup>おられ</sup>的な相違はあっても、その根本は一つの信仰で結ばれている。それがまた親鸞の意であった。

## (2) 親鸞の教え

## ① 南無阿弥陀仏 (namó amitayurbuddhāya) とは

- (a) 無量光 (知恵)  
(b) 無量寿 (慈悲)

仏とは覚体であり、それに帰命すること

弥陀に帰命するとは、自然に帰趣することである。

## ② 絶対他力

(a) 自己のはからいによる信心ではなく、弥陀の方よりたまわりたる信心。

(b) 念仏は弥陀にたいする「報恩感謝」のあらわれである。

## ③ 悪人正機

- (a) 悪人とは煩惱にさえぎられる無明の凡夫のこと  
(b) 正機の機とは弥陀の本願をうける対象のこと

衆生が救われなければ、われもまた仏にはならないという大悲の本願と凡夫の信心が一体となって成就される。

## ④ 自然法爾

- (a) 真理は自<sup>その</sup>から然る、そのごとくあるということ (b) 法性

〈ねらい〉 親鸞の学習にあたって、まず考えなければならないことは、それが師法然の教えの忠実な祖述者であったということである。それはまた親鸞が七祖（龍樹・世親・曇鸞・道綽・善導・源信・法然）を通して釈尊の教えが正しく伝えられていることを確信して疑わなかったことを意味する。そこを正しく押えておかないと親鸞が独自の宗教を開創したようなことになり、親鸞の真意を誤解することになる。『歎異抄』にいわゆる「弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教、虚言なかるべからず。……」の条はこのことを如実に物語っている。

つぎに親鸞を論ずる場合、まず問題になるのは「悪人正機説」である。それは多くの人の共感をよぶところのものである。しかし、それは「弥陀の本願」に裏づけされて初めて可能なのであるが、この方は案外看過されやすい。『歎異抄』の本文の初めに「弥陀の誓願不思議にたすけまいらせて往生をばとぐるなりと信じて念仏まうさんとおもひたつところのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり……（中略）。そのゆへは罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。」とあり、親鸞の説くところ、すべては弥陀の本願海から流出してまたそれへと還流してゆくのである。「悪人正機」も、そうした本願海の中にあり、それを成就するためには「ただ信心のみを要とすべし」（『歎異抄』）なのである。

そして信心が決定したとき念仏となってあらわれるのである。念仏（南無阿弥陀仏）とは、知恵と慈悲の覚体であって、それは「自然」を意味するものとする。つまり生きとし生けるものを、はぐくみ育てている大自然である。そのお陰を被って、われわれは日々を暮らしているのであって、その自覚に立つとき「報恩感謝」の声となって念仏が自然におこるのである。親鸞が「仏にしたがふて逍遙して自然に帰す。自然はすなわち弥陀國なり」（『教行信証真仏土巻』）というのは、正しくこのことであろう。それをまた「自然法爾」ともいうのである。

## 都立向丘高等学校 3年A組

「善人なおもて往生をとくいはんや悪人をや」——これは歎異抄の中の一節である。善人でさえも浄土へ往生させてもらえる、まして悪人はなおさら往生させてもらえるというのである。見方をかえると、悪人でさえも往生できるのなら、善人はとうぜん往生できるはず、という考えがおこってくる。逆もまた真なりである。しかし親鸞はいくら善人であっても、自分が悟りを開こうとするひとは、他人、すなわち弥陀の救いにまかせる心が欠けているから、弥陀の本願にはずれている。・・・要するに善人であるからといって信ずる心がなければ往生できないと説くのである。

親鸞の思想の根底は、あくまでも心から念仏を唱えて弥陀の力にすがるという点にあると思う。もっとも、これはかれの師の法然の説いたことでもあるが・・・。

この考えがひとびとの心を強くとりえたのだと思う。それまでの宗教は、豪華な寺院や塔を建立したりすることが信心の深さを示すと考えられていた。してみると富や権力のある者はよいが、多くの下層のひとびとは救われないことになる。そこへ学問・財産の有無を問わず、善人であれ悪人であれ、すべてのひとびとを対象とした教えがあらわれたことは大変ありがたいことであつたにちがいない。

いったい、宗教というものは、ある特定のひとのためのものであつてはならないと思う。

人間一つのことを信じているということは、何にもまして強いことである。親鸞の場合、弥陀の力にすがり、念仏を唱えるということであつたのだと考えられる。自分が完全にその中にうちこんでいなかつたら、それを他人に広めてゆくことは、とうていできないことだからである。信じるということが、いかに人間を強くしていくことか、——わたくしが感じた所である。

## 〈生徒作文〉

都立向丘高等学校 3年A組

先生は親鸞をはじめ多くの宗教家たちの思想について講義して下さいましたが、その中でも親鸞の述懐の一句「浄土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし 虚仮不実のおが身に 清浄の心もさらになし」は、その溢れる真実感、そしてことばの流暢さにひかれる何かを感じ、自分で残しておきたいと思ひ暗んじてまいりました。それはまた親鸞が生涯を賭けて徹底的に自己と対決した結果、自然にでてきた告白に思えるからです。

親鸞は幼少にして両親と死別し九才にして入山し、そこで人生の実相を見きわめようと20年の自力修行の限りを尽します。しかしきわめればきわめるほどどうにもならない自己の姿に気づいたのです。つまり凡夫の自覚をえたといえましょう。そしてついに洛中吉水の庵室に法然を訪ねて弥陀の救いにあうことができたのです。八方ふさぎの境地に立たされた親鸞は、もはや「よきひとの信仰をかふむりて」念仏に自分を委ねるのはか道はなかったのでしょうか。極言すれば、他力本願（如来の本願力をたのむ信心）そのものが親鸞のさがし求めていたものだったといえるのではないのでしょうか。だから「たとひ法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。」ともいえたのではないのでしょうか。そのように親鸞は自力のはからの空しさを知ったのでしよう。

そこで初めて、わが身を「愚劣親鸞」と呼び、「親鸞は弟子一人ももたずさふらふ」といきり、念仏は自然の道理こゝろ、「如来よりたまはりたる信心」のみが絶体的なものとなりえたのでしよう。つまり親鸞においては、愚かな人間が救われるのは弥陀の本願をすなおに信ずるのはかないのです。

このように考えてくると「悪人正機」の教えも分かりそうな気がします。ここでいう悪人とはいわゆる凡夫でありましょし、凡夫とはわれわれ俗人のことであり、いつ何をしだすかも知れない存在なのですから。

## 日蓮と日蓮宗 (1時間分)

都立江戸川高等学校 教諭 高橋定夫

### 〈授業内容のまとめ〉

- (1) 法華經信奉の伝統——日蓮の独自の宗派運動開拓の位置
  - ① 法華經義疏，奈良時代各国分寺の首位の經典，法命・写經の隆盛，源氏物語，栄華物語への反映 ~~……~~ 祈禱・儀礼が中心
  - ② 日蓮の宗派活動の独自性 ~~……~~ 法華經に安國の道理発見
- (2) 日蓮の発菩提心（修道発願）の動機
  - ① 個人的不遇の無常感からでなく，末法救済の眞の道理を探究
  - ② 神仏加護への信頼に拘らず末法現象→通俗信心への疑惑
- (3) 求道の経緯（概略）——およそ2年の求道履歴，大蔵經研究——  
 1才発心（清澄寺）。鎌倉修業（大乘教への確信，密勝顕劣）。  
 比叡山・高野山ほか京・奈良の寺遍歴（顕教への確信）。3才で  
 法華經が衆迦のあかした眞精神であることを確信。→父母説得
- (4) 日蓮の基本的考え，および法華經を眞実教とする理由
  - ① 密教→顕教への脱皮：仏の教えは人々救済の道を示す知恵  
 Cf. 布教手段の呪術的手法，伝説化された通俗日蓮像（通俗性）
  - ② 法華教は眞実教（入滅時顯示の眞精神結晶）他經は權教：方便  
 〈法華經は仏教眞髓の劇映画的手法による表現——啓蒙畫〉
  - ③ 題目「法華の道理を信奉する」：一念信解→善根，命を知る
  - ④ 布教法：眞受<sup>しんじゆ</sup>→無明の者に，折伏<sup>しやくふく</sup>→法を曲げる邪智謗法に
  - ⑤ 実乗の一善に帰せ：日蓮の念い。生ける者に生きる心の目覚め。

〈ねらい〉 (1)祈禱・儀礼の信仰→人間の心の道、いのちを浄化する真のおきての目覚め、という鎌倉仏教思想を認識させる。(2)日本において長い伝統をもつ法華思想、現在なお関心の高い日蓮の思想において、それがどのように行なわれたかを理解させる。(3)こう開拓された思想を現在どう受けとめているか、また何を学びとるかを洞察させる。

初めに生徒の理解する観念を注目しなければならない。仏教を生徒も体験的に知っており、日蓮宗系の活動もみている。だが、その直観的観念はなまなましいが、教授者が専門的情報で再構成している観念とは異質である。主観的判断——体験的直観が真の認識でないことをわからせる必要がある。

釈尊は人びとに迷妄を脱却させるため機械的盲目的欲と感情の支配を断ち、心眼を説いており、法華経は禅定に入った釈尊が人びとの(心の)眼に人びとの生活の実相をまざまざと示し、生活の因果関係、また志をもつものゝ生活のありかたを明かしたことを最もよく物語っている。日蓮はそう把え、人びとにこの物語りを少しでも分からせ、それを生活のなかで大事にさせていくことによって国と人びとを救済みちがあると考えたのである。念仏が来世を語って真の現実の行を忘れ、禅が不立文字といて釈尊の教えを軽んじて空想の戯れをする、当時の宗教界は俗人の無明に乗じて秘儀を専らにし思想としての真の宗教を曲げている、こう他宗の僧に挑戦したのは独自の宗教観の開拓から来たのである。真の法に由らなければ乱世避け難しと警世の暗示をセンセーショナルにするため諸経をひいて予言するが、毒簡集など信者に語るものは人の道を勝かに説いて善心を起させるようにしている。生徒達の把え方は迫害に屈しない日蓮像で、情緒的であり、従って他宗攻撃を感情的対立と見てしまって、思想的葛藤の中で使命感を強くしていく内面的日蓮像を見落していることを指導上留意する必要がある。

なお宗教観上、物質的利益観、弱気の逃避的呪術宗教観でなく、現代的発想の信仰探究、崇高なものへの目覚めへの役割を考慮させる必要がある。

〈生徒作文〉

都立江戸川高等学校 2年9組

これまであまりにうっかり歴史を見ていたものだとあらなめて考えさせられた。日蓮を知らなかったのではないが、自分の人生と結びつけて考えることは想像したこともなかった。

12才で日蓮は釈尊の教えに興味をもったという。宗教家として偉大だったといえばそれまでだが、わたしだって仏や神を拝む習慣をやはりもっており、そうしながら、子どもの時も拝んでほんとによいことがあるのかと思ったこともある。私の場合それ以上に考えなかったのに、日蓮の場合は「人びとに大切だという釈尊の教えとはほんとはなんだろう」と考えたのである。私が平凡で日蓮の人生が違うのはそこにあつたといつてよいのかも知れない。

日蓮は、現世を仏法の行なわれる国にし、人々に生きる喜びを与えなければならぬと考え、20年間以上の研究や思索の結果、信頼に足る思想をもつたのである。ことばは違っても、生き甲斐をもってよいはずの世の中で矛盾が多ければ、正義という法に強く関心をもつだろうし、正義に目覚めれば、不正の行われるのに我慢できなくなるだろう。鎌倉時代という事情の違いはあっても、その点で日蓮に共感する。わたくしには法華經のよさがまだよくのみこめない。人間の迷う心を放り、真の教えが釈尊の説く思想の中にあるという理解ができたなら、人びとに正しい考えを啓蒙しようとするのはよくわかる。わたくしたちは信頼できる考えをもとうとする。真に信頼できる考え（簡単には伝えられないかも知れないが）を仏の教えとして理想化して表現し、これを追求していくことは正しい。われわれも日蓮の信念や根性を学ぶ必要がある。わたしたちの時代は理想が皮相的すぎるからである。もちろん困難な道であろうが、目さきのこと、もっと、より大事なことから見直して、ほんとの人生というものをつかむ必要がある。日蓮については、理想の国に到達する方法はどうみても、人生観、そしてかれのいう法華經のよさが何か興味がある。

## 〈生徒作文〉

都立江戸川高等学校 2年4組

日蓮のお話を聞き、プリントや資料を2度3度と読むうちに、信仰するしないを別として、その生き方に強く興味をもった。このような関心を今まで殆んど持たなかった。私たちの世界に真に迫るものがなかったのです。

日蓮は特に不幸を感じずる境遇にいなかったのに、この世の人の幸福を考えて学問の道に入ったことを知り、ハツとした。つい忘れていた大事なことを指摘されたようなショックを感じた。

生きる悦び——思索の出来る人間が生きていくのに最も大事なものです。不幸な境遇におかれて、それから逃れようとするのはわかります。(現代っ子はそれさえもあきらめているともいえる)。だが、ぬくぬくしておれば自分の悦びにも無感覚になり、習慣的に疑問をもつでもなく、なんとなくしてつい人を傷つけても気づかないで罪悪を重ねていることのあるのを思うと、自分が恐ろしくなります。たゞ、なんとなく生きているのではなく、偶然をたのみにしない、やはり選んでいく生き方に意味があると思うのです。

日蓮が人びとのためにこの世をよくしようと生きたことは大事なことだと思います。その信念や情熱はうらやましくさえ思います。たゞ法華経だけがよいというのはよくまだわかりません。法然や親鸞、そして道元にも、正しくあろうとした人生があると思います。日蓮から見て他の宗派はまちがっていると思えたかも知れません。でも、邪心のない信心から、情熱をこめて行動を厳しくしていく、そこにはやはり、同じように真実の生活があったのではないのでしょうか。念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊はのみこめません。

草木国土悉皆成仏には興味をもちました。輕卒にして後で悔んだり、なるようにしかならないとしないで、この世を住みよくしようと殉教的にますます強く生きぬいた日蓮を指針にして、私にしてできることをできるだけ努力しようと今考えています。私の成仏するみちはそこにあると思います。

## 伊藤仁斎の思想 (1時間分)

都立戸山高等学校 教諭 渡部 武

## 〈授業内容のまとめ〉

## (1) 生涯 (主として思想の形成過程)

- |                |             |
|----------------|-------------|
| ① 京都の町家の出身     | ② 日常人倫の道の探求 |
| ③ 形而上学的な朱子学の批判 | ④ 独自の古義学の形成 |

## (2) 学問研究の方法——古義学

- |  |
|--|
| ① 原典主義 四書批判→論語・孟子の尊重 (孔子にかえれ)                  |
| ② 古義の解明 語孟の熟読精思→意志語脈の把握→意味血脈の把握→字義の理解→(正しきを得る) |

## (3) 思想内容

- |                              |
|------------------------------|
| ① 生の尊重と生の発動としての情の尊重          |
| ② 日常人倫の根本は仁愛にある (残忍酷毒の心の否定)  |
| ③ 誠—— (衷心) (a) 私のない純粋な心のありかた |
| (b) 誠は愛情が発露するための前提条件         |
| ④ 仁愛と誠による道の実現……              |

誠をもって仁愛の徳を行うとき、仁義礼智、孝悌忠信が正しく実現する。

- |                               |
|-------------------------------|
| ⑤ 学問と教育の重視…誠と仁愛はこの二者を通じて現実化する |
|-------------------------------|

## (4) 仁斎の思想の意義

- |                              |
|------------------------------|
| ① ヒューマニズムの思想 (情の重視) ——近代性の萌芽 |
| ② 日本的儒教の形成 (誠の重視)            |

<ねらい> 仁斎の思想が、人間性に注目して、万人に共通する愛情を基礎に、誠を核心とする日常の実践倫理を追求した点に着眼し、かつその思想史的意義にもふれながら、授業を構成する。

さて、徳川幕藩体制の精神的支柱となった朱子学は、理気の形而上学に基づいて、天地を貫ぬく理が人倫にあつては君臣、父子、夫妻などの名分として具現し、従つてひとは義を守り教を重んじ身分秩序に従つて生きるべきであると説いた。

仁斎は商家の出身であつたことも幸いして、人間の日常生活の実際に注目し、人間を生々不息の生とその発現としての情においてとらえ、ここから朱子の形而上学を批判して、独自の思想を形成していったのである。

仁斎が学問研究の方法においてとつた語・孟にかえる原典主義も、古義を直接明らかにする独自の研究方法も、すべてこの立脚点から必然的に展開してきたのである。

さて、動いてやまざる人間の生の直接の発現は情である。情のうちで人倫の成立にかかわるものが愛情である。ゆえに仁は愛なりと解され、孝悌忠信は愛によつてはじめて徳として実現するのであるとされる。

ところで、この愛情が素直に発露して人間相互の間にかよひあうためには、それをさまたげる私心のないことが必要である。ここに衷心とか、とくに誠が強調される所以がある。

このような仁斎の人間性を情においてとらえる思想は、(1)理を重視し、内に敬、外に義を生んで名分を尊ぶ封建教としての朱子学とは異つて、万人に共通する人間性を重視する近代性の萌芽を有し、(2)とくに私心をさる誠を強調する点では儒教を日本人の心性に則して同化しており、(3)かくして新しい日本的な儒教を成立させることになつたのである。

(注)『語孟字義』『童子問』より学問研究方法、生、仁愛、誠に関する四つの資料をプリントし、生徒にあらかじめ配布して読ませておいた。

## 〈生徒作文〉

都立戸山高等学校 2年

伊藤仁斎を学んで、仁斎が独自の学問である古義学をはじめたこと、またその思想の中には人間性を大切にするという要素が含まれていることなどを知り、その点で仁斎の思想が江戸時代にあつてどのような歴史的意義をもつものであるかについて関心をもった。

しかし、では仁斎の思想が自分にとってどういう関係をもつのかという点では、自分から極めて遠い、無関係といってよいようなものとしがうけとれない。プリントの仁斎の文をよんでも、一応のことはわかるが、内容的には身近かさを感じない。自分の儒教に対してもつ先入感のためなのか、あるいは文体や文章表現・使用されていることばなどのためなのか、はつきりしない。しかし、自分だけかと思つてみると友だちも同様の感じをもっているものが多い。儒教についてやる場合、この点がとくに問題だと思ふ。

次に、彼の学問研究の方法だが、これはわれわれにとつても大いに参考になるようだ。たとえば、学校での勉強の仕方にしても、限られた時間に多くの事をやるため、そして受験勉強ということも考えると、本当に自分で自分のために勉強しているという気になれない。たしかに仁斎のような方法では主観的になり独断におちいるかもしれないが、それにしても、本当の学問勉強をしているという感じをもちうるであろうし、また大事な事としては、仁斎のように新しい学問や思想をうみだすことができるであろう。参考にもなったし、同時にそのような方法を取りえた仁斎をうらやましいと思ふ。

思想内容の点では誠とか、実心とか、仁愛とかをすえて実践を重視した点はすばらしいと思ふが、しかし誠や実心が心の純粋さで、私心のないことということであれば、むしろ非現実的になるのではないか。封建社会の中であつさり私心をなくすということは、封建社会を受け入れる事になるのではないか。何かわりきれないものが残る。

江戸儒教を勉強して、それが今の自分に何かかわりがあるという風にはうけとめなかった。ぼくたち青年にとって興味のあるのは現代の思想であり、むかしからの数多くある思想のなかでも儒教はもつともぼくらから遠い、日蔭に属するもののひとつだと思う。しかし、仁斎や徂徠を学んで、孔子や孟子の考えが思い出され、対比して、孔子や孟子の思想がよりはっきりつかめたという点は思いがけない成果であった。

ぼくにとって、やはり仁斎の思想は過去のものであって、その歴史的意義を理解することが大切であり、またそれで十分だと思う。この点からみると、彼の学問研究の方法や、朱子学の形而上学的な点を批判して実践を重んじたこと、そして人間の日常生活の実際に目をむけたこと、その結果として朱子学をぬけだして新しい思想をつくりあげたことなどに興味もてた。とくに仁斎が朱子の権威によらず、自分の目で見、読み、考える態度には、賛成だし、今のぼくらにも参考になる点だと思う。

反面、思想の中味については、誠とか仁愛とかについては、個々にはなるほどそうかなと思うが、ではぼくが心を誠にし、私心をなくし、人を愛するということになる、今のような高校生活や社会生活の中で自信はない。むしろ不可能な気もする。こういう点でも儒教はぼくらから遠いということになる。

また、仁斎や徂徠の思想の歴史的意義について学び、それらの思想に近代を準備する芽があったということは、一応わかるが、それならなぜそのような新しいものがのびなかったのかということが逆に疑問になる。ことに儒教といえば、明治以降日本の近代化をさまたげるはたらきをしたものではなかったか。仁斎らの思想の歴史的意義ということが言われれば、逆にこのような疑問がでてくる。できれば、このような問題を授業でとりあげて行けば、面白いと思うし、またぼくたちとのかかわりも少しでてくるのではないか。

# 西洋近代思想の受容 (2時間分のうち) 第1時

都立井草高等学校 教諭 渡辺 浩

## <授業内容のまとめ>

### (1) 西洋思想の受容のしかた

#### ① 日本の近代化の特色

- (a) 幕藩体制の崩壊→近代国家・市民社会への方向
- (b) 近代化における矛盾と混乱：民権運動の挫折と国権主義

#### ② 日本近代思想の構造

- (a) 日本における「近代思想」＝西洋思想の移植
- (b) 欧化への抵抗：和魂洋才（象山）＝精神的伝統→教育勅語
- (c) 思想の重層性：外来思想と伝統思想との抗争・雑居

### (2) 敬愛思想と自由民権運動

- ① 「明六社」と啓蒙活動：開化政策を推進（加藤弘之；西周ら）  
：在野精神の形成（福沢諭吉→植木枝盛）

#### ② 福沢諭吉

- (a) 封建習俗の打破：「門閥制度は親の敵でござる」（福翁自伝）
- (b) 独立自尊と平等：天賦人權論（権利通義→基本的人権）  
「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」（学問のすゝめ）
- (c) 実学：（功利主義→西周の人生三宝説）

普通日用に近き学問（実学）→個人の独立→文明立国

### (3) 自由民権運動の展開

以下第2時にゆずる。

<ねらい> まず明治百年といわれる現在の視点から、明治維新の歴史的意義を反省する。日本史の学習と関連させながら、日本の「近代化」の問題をとりあげてその歴史的・社会的背景に注目し、アジアにおいて西歐的近代化に成功した唯一の国として日本の近代化の特色を理解させる。

そこで日本の「近代思想」と見られるものは何かという問題を提起して、明治以後の日本における、さまざまな社会思想や文学思想の展開を辿って、ヨーロッパの近代思想との共通点・相違点を検討させる。それらを整理し、日本近代思想の構造として、左記の3点を説明する。つまり、(a) 日本の「近代思想」とは西洋思想の移植にすぎないこと、(b) 佐久間象山の「東洋の道德、西洋の芸術」とか、橋本左内の「器械芸術我ニ取り云々」という、「和魂洋才」の精神的伝統が輸入思想に対する抵抗となり、さらにこれがドイツ観念論と結合した国家主義となって教育勅語を生みだす基盤となること、(c) また日本の近代思想は外来思想と伝統思想との衝突妥協した結果による二重構造をなすことなどについて、十分に消化納得のゆくようにさせたい。

つぎに明治初年における啓蒙思想について、「明六社」の成立事情と思想史的意義、同人の活動状況を説明し、とくに代表的啓蒙家として福沢諭吉をえらび、その生涯・著書・思想についてエピソードなど織りまぜながら分かり易く解説する。(あらかじめ予習課題として「学問のすゝめ」を通読させておくことが望ましい。)

福沢諭吉は在野の啓蒙家として開化政策に同調し、欧米の侵略から日本の独立を守るという信念に立った。進歩主義の文明史観により、文明立国を唱え国民独立の気風を強調して愚民政策から脱却するために学問(実学)を奨励した。天賦人權論を主張し、人間関係に権力の介入することを極力排撃したのも、かれの啓蒙精神の躍如たるあらわれといえよう。

諭吉などの影響によって、やがて自由民権論が活発となり、さらにその反論として国家主義の気運を生みだすことに注目したい。

◁生徒作文▷

都立井草高等学校 3年A組

「明治百年」、近ごろこの言葉がひんぱんに耳に入るようになった。それもそのはず、今年はその「明治百年」に当るからである。それではぼくたちはこの年に何を考えてゆくべきなのであろうか。戦前派・戦中派と呼ばれる世代のお年寄(?)たちは古き良き時代を懐かしんでおられるのであろうが、戦後派ないし戦無派のぼくたちは、わずかにミリタールックと日本史の受験勉強から影響を受けているのみといっても過言ではない。

先日「明治初年」の思想について授業を受け、今まで何となく通り過ぎた明治初期の青年たち、かれらの考え方と人間性を学び、大いに得るところがあった。福沢諭吉は、明治の基盤を創くために出現した人のように思う。かれは明治維新を境に江戸と明治の両時代を半分ずつ生き、明治以後啓蒙思想家として活躍した。ぼくはこの冬休みに「学問のすゝめ」を読んでみて、かれの考え方に共鳴した。「なぜ学問をすべきか」という問いに対して、かれは人間は生まれながらにして平等であり、人間の身分はその人がどれだけ難かしいことをしたかによって決まるという。難かしいこととは、頭を使って世間に役立つこと、つまり学問をすることであり、偉い人になるためには学問せよと教えている。すごく理屈っぽく窮屈な気もするが、何につけても正統な理屈を重ねてゆく態度、目的を明確にすることはぼくにとって大切な教えであると思う。

いま、ぼくの心を強く打つのは、諭吉に限らずあの激動期に生きた青年たちの向学心である。新しい日本を造るためには何が必要かと考え、眼を広く世界に向け、西洋近代思想を進んで受け容れ、どれに片よるといってもなくそのすべてを吸収していった、その燃える息吹きがあったればこそ、明治の日本が築かれたといってもよいであろう。「明治百年」とは、新しき日本を造るためのスタートの年でなければならないとぼくは思うのである。

私の明六社の人々についての知識は、非常に浅薄なもので、歴史の授業から得た「1873年に森有礼の主唱のもとに作られた明六社という団体を組織した洋学者達で『明六雑誌』という機関紙を出して、新思想の普及につとめた」ということ位だった。その程度のものであったので、さして興味もおぼえずに過ごしたが、今回の授業を受けて、それらの人びとに対しての興味をそそられ、自分が忘れかけていたことに気づかせられ、わたくし自身プラスが大きかった。それは、これらの人びとが欧米近代思想の普及につとめるとともに、封建的因習の打破に限りなく努力したということである。それまでの大きな流れの一つのピリオドを打った明治維新—そのなかで、まだまだ旧来のものに寄りかかろうとする人びとは数多くいただろうと思う。明六社ができたのは、明治維新からまだ数年しか経ていない時だった。そんななかで、西洋の思想を受容し、参考にして自分達の考えを確立し、それを示すのは、困難なことだったろうと思う。さまざまな方法—機関紙の発行・著作活動など—を通して、在野精神の形成に寄与した人びとがいたことを、新たに知り、わたくしは目をみはらされた。今こんな自由な一言論において、また新しいものを受けとる能力において一状態にわたくし達はおかれている。しかしそのなかで、かれらのように力強く、勇猛な意志表示がわたくし達によってなされているだろうか。自己の考えを確立することは、かなりむづかしいが、内にそれを保持している人は多くいるだろう。しかし自分の主張するところを外部に対して示すことは少ないのではないか。わたくしは明六社の人びとが充実した活動を続け、かつ自分達の言わんとするところを示したその点に啓服し、感じさせられた。このひとびとからわたくしは、わたくしが忘れかけていた自己の内の何かと、わたくし達が甘んじて受けている自由の内にある、先人の足跡、そして自分の進むべき道を、もう一度自覚する必要性とを学んだと思う。

## 西田哲学

(1時間分)

都立武蔵高等学校 教諭 小島章一

## 〈授業内容のまとめ〉

## (1)人間西田幾多郎先生

(イ)西田幾多郎先生の若き日より晩年にいたる写真を生徒に示す。

教材：a 下村寅太郎著「西田幾多郎人と思想」東海大学出版会

b 西田幾太郎全集(旧版)

c Nischida Intelligibility and The Philosophy of Nothinness

(ロ)西田幾多郎先生の若き日の日記，晩年の日記の一部を読み，打坐の日常，生涯を哲学的思索に捧げた直観の人，情愛の深き人を示す。

(ハ)西田琴さん(先生の御令室)の文，西田先生より高山岩男先生(先生の高弟)に与えた手紙の一部をよみ，また，高山岩男先生(弟子)より西田先生(師)を思う。「西田先生の思い出」の一部をよみ，北条時敬→西田幾多郎→高山岩男の師弟の深き愛と哲学そのものの深き内面的連関性と，哲学に生きる者の愛と厳肅さを伝える。

教材は「西田先生片影」：黎明書房

(ニ)西田幾太郎先生自筆の書，二三の作品(筆者所蔵)を示し，先生の品位，と深い静かさを伝える。

(2)西田哲学・・・述語の論理——場所の論理 教材：西田哲学 高山岩男 主知主義批判——「有」に対する 絶対の「無」(角川文庫)

場所の論理が，その実，近代苦，現代苦の根柢の哲学的反省から，仏教的「絶対無」の把握にすすむこと，我・汝の愛の自覚を伝う。

<ねらい> 専門の西田哲学研究者にとっても難解難渋と言われる西田哲学  
 私はこの難解の唯一なるものは、「行為的直観」と「絶対矛盾的自己同一」  
 との関係にあると考える。多くの教科書は、西田哲学の独創性を「善の研究」  
 の出現に見ておるようであるが、「善の研究」は西田先生の独創的哲学の萌  
 芽であって、真に西田哲学の哲学たる所以の面目が明確に現われてくるのは、  
 場所の論理、絶体無の把握にあると考える。しかもその際最も難解なのは、  
 行為的直観と絶対矛盾的同一との関係、統一の問題である。

論理(述語)の極点における自己超越(内在の超越)の行信証ともこの統  
 一は思われる。体験と思索とが一つになってくるのである。我と汝の成立そ  
 のものが、絶体無の自覚的限定として愛そのものなのである。かかる考えを  
 生きた人が西田幾多郎先生であり、哲学の神髄が、「生きること」真に生き  
 ることは「共に生きること」を最もよく教えている哲学は、プラトンの対話  
 篇と西田先生とその高弟達の魂の師弟愛に実践的に見られるので、それを手  
 引として西田哲学理解への道を求めた。西田哲学の神髄は、哲学の「道」を  
 師弟相たずさえて歩くことなのである。人間が自然と共に悲しみ、よろこび  
 相たずさえて歩くことなのである。哲学の論理は決して、他人を敵をたおす  
 生存の武器なのではない。どこまでも共に生きる幸福の「道」でなければなら  
 ない。かかる哲学的精神の見出したものは主知主義的な、主語的論理、尊  
 大な自我の論理ではなくして、「述語の論理」、道と人とがそこに於てある  
 「場所」の論理なのである。はかり知れなく深い、それでいて人間知性の対  
 象とならず、手段とならない。それ故「有」ではなく、「絶対無」の論理な  
 のである。すべての人びとが、それぞれにそれ自身の個性を愛し、楽しく生  
 きるべき、多なる個がすべてそこにある形なき「絶対無」の場所、すべてを  
 包摂する場所の論理なのである。「形」「有」はすべて仏の慈悲、仏の自覚  
 的自己限定なのである。このことを生徒に伝える為、私は高山岩男先生の「赤  
 は色である」赤→S(主語)、色である=P(述語)、S←Pの包摂論理の  
 説明を手引とした。

## ◁生徒作文▷

都立武蔵高等学校 2年E組

西田幾多郎先生についての授業は、まず「人間西田幾多郎先生」という題を始めた。毎日、朝夕に打坐して心を静められ、心が迷う時には、習字をされたということであった。そして教学的、文学的才能にすぐれ、そこから生まれる宗教的哲学的直観をそなえた方であったということである。

このような規律正しい生活とすぐれた才能とから恩索に生きる人間としての先生が形成されていったのであろう。

先生の言われた「共に生きる」ということ—先生と生徒が真理を求めて共に生きるということは素晴らしいことだと思ふ。同じ目的—真理に向って一体となってお互いを向上させながら進んで行く。そこには形式的な師弟関係ではなく、真の理想的な師弟関係が見られる。又自然と「共に生きる」ということは現代においては忘れられてしまっている。これはやむを得ないことではあるかも知れないが、反面、現代に生きるからこそ、自然と共にいうことを忘れてはならないと思ふ。そしてそういう考えをいつも心に持っていたい。

授業は、先生の無の論理へと進んでいった。西洋の考え方である主語的な「有」—神（実在）を主軸とした考え方ではなく、無限に深い「絶対無」においてものごとを成立させる考え方である。「述語の論理」＝「場所的論理」と、この考え方はわたくしにとって難かしかった。しかし絶対無限において自己を限定するということを学んだことは、ものごとの考え方という面で有益であった。

なんという偉大な先生であろう。これが私が西田先生の人柄についての講義をきいての第一印象である。

哲学的には、先生が自ら実践された「共に生きる」という事に集約されると思う。事実、西田先生が北条時敬先生の御宅で日夜机を並べて勉学に精進され、真の師弟関係を身につけ、それがりっぱに西田哲学に反映されているのではないだろうか。それは又別面人間西田幾多郎先生の重要なエレメントになっていると思う。それは西田→高山先生という美しい師弟関係に現われている。その良い例は、第二次大戦中、第一回の東京空襲の直後、高山先生にあてて書かれた文面にも見られる様に、西田先生は真に日本の行く道を案じ、弟子を思っている事がひしひしと感ぜられる。事実、高山先生自身その手紙を先生の遺言であるとさえ言っておられる。

又、先生は思索に迷う時、また講義の前にはよく書を書かれたという。そしてその書を見したが、実にすがすがしい感じがした。素人の私が思うに、きっと先生の心が底深く澄みきっているからこそあのようなものではないだろうか。又書を書いて心を落ちつけたという事実からは、先生の学問に対する厳しい心構え、講義を聞く生徒を敬愛する気持がありありとうかよえる。これが学問の道であり、ひいては哲学の道ではないだろうか。

私は、今、東洋における偉大な哲学者西田幾多郎先生のはんの人柄の一面を知って深い感動が心の底から込み上げてくる。西田哲学についてはまだまだ勉強しなければならない私であるが、先生の人柄、人格に深く敬意を払うと共に、私自身も自分についてもっと考え、真剣になる事を学ばなければいけないと思った。これが偽わらざる私の気持である。

また、真理の探究は自ら努力する所にあるという所から発展し無限に深い絶対無への禪による東洋的境地が西田哲学の神髄ではないだろうか。

大衆社会と個人 (1時間分)

都立城北高等学校 教諭 籠原 幸一

〈授業内容のまとめ〉

(1) 大衆社会の定義

日常生活の例から大衆社会の特質や発達の歴史をまとめあげる。

① 特質

(a) 生活様式・知識・政治意識・社会観の均一化された社会

(b) 疎外された人間の巨大な集団

② 歴史

(a) マスコミの発達 → 受動的な人間

(b) 巨大組織の出現 → ビュロクラシー } 都市化現象

(c) 大量生産(オートメ化) → 生活様式の画一化

(2) 大衆社会と人間性

① リースマンの「孤独な群衆」=大衆=他人志向型

他人志向型が日本人にもあてはまるかどうか、またはわれわれに共通するものはないかをマスコミやマイホームなどを例に討議する。

② 大衆社会の矛盾

(a) プラス面—封建的前近代的環境からの解放

(b) マイナス面—内面的紐帯の欠如、個性の喪失、自己疎外など

③ 新しい人間のあり方

(a) 個人または集団活動による主体性の回復

(b) マスコミ、新中間層、巨大組織の授業との関連によって結論づける。

<ねらい> 現代社会のはじめに「大衆社会」をとりあげた。すでに前単元で現代思想にふれてきたので現代社会のヒューマニティを考えるばあい関連はあると思う。そこで「大衆社会と個人」というテーマで大衆社会の意味を考えながらそこに存在するいろいろな問題を追求させたい。

資料としてリースマンの『孤独な群衆』の一部を参照した。孤独な群衆とは大衆のことである。「現代人の心理的メカニズムを、わたくしは他人志向型と名づける。他人志向型とは、他人によって指導される人間の性格構造で、社会からレーダーのように信号を受けとり、そのメッセージに従って行動する型である。かれを支配するものは、もはや伝統でもなく、内的信念でもなく、漠然たる不安である。」かれはアメリカ社会について語っているが、それは寓話であるといっているように、このような他人志向型が日本人にも類型化されるかどうか、あるいはどんな点で共感をよぶか、討議させたい。そのさい最近の読売新聞のつぎの記事をヒントの一つの例としてあげる。「大衆消費時代、いやがうえにもマイホーム・ムードをかきたてられる。“うちでも車がほしい”“お隣はカラー・テレビを買った”それにひきかえ……とわが身を嘆く材料が次々にあらわれてくる。それがいつの間にか妻の心の中で愛情の有無とすりかわる。しかも反面住宅事情や子供の学校のために、夫が単独転勤したり、企業競争の激しさとともに残業がふえたり、といったぐあいに、マイホームをくずす要因がいくつもある。その不安感を忘れるために、一方では教育ママという形で自分を子供の中に埋もれさせ、一方では家を捨てて別の生き方をくわだてる。」(43・2・6)

つぎに、現代社会とよばれる所以はなにか、その特質がわれわれの日常生活の上でどのようにあらわれているか、そこにはどのような矛盾があるか、および現代社会における新しい生き方や責任はどうあるべきか。以上のことを討議させる。ただし最後の新しい人間のあり方については、マスコミや巨大組織の授業でもふれるので、結論を急ぐ必要はない。

都立城北高等学校 2年1組

「大衆社会」という言葉から感じられることは、なんとなく無気力で均一化された社会というふうに感じられる。

では、現代が大衆社会になったかという、思うに現代社会がそういう均一化された人間を望んでいるのではないかと思う。いいかえれば、社会が発達し組織が巨大化してしまえば、もはや一人一人の意見が尊重されなくなってきているということができると思う。そこに他人志向型が生れてくる。日本人は元来他人志向型ではないだろうか。歴史をふりかえっても「ながいものにはまかれろ」主義である。その結果、表面だけをみればうまくいってように見えるが、個人個人をみれば、かれらの心の中はきっと不安・孤独といった感情がおこってくるにちがいない。こうなると「大衆」あつての「個人」というようになってしまっている。

授業では、大衆社会における各人は伝統的な社会規範から解放されて自由である、とあつたが、はたしてその通りであろうか。逆のことは言えないだろうか。現代の日本では、大衆社会と個人とは相対立して、いまだに社会の方が重んじられていると思う。わたくしはそれでもかまわないと思う。むしろ社会よりも個人を重んじすぎる時代よりはよいと思う。なぜならそれを解決しようとする気運が必ずおこってくるはずだから。そこに文化・政治その他の面が進歩していくのではないだろうか。だからといって個人を無視していいというのではない。理想としては個人あつての社会というふうになってもらいたい、個人が大事にされすぎはいけない。うまく言えないが、スウェーデンのように社会制度が整った国でも自殺者はたえないという。こういう点から、個人の尊重とは主体性をもった個人の尊重ということではなければならないと思う。われわれは、古い社会から解放されるとともに、個人の意味を考えながら大衆社会を見つめなければならない。

わたくしはこの大衆と個人という対照的な言葉については、一度も考えたことはなかった。わかりきっていると言うか、あまりにも抽象的すぎていたからである。しかしわれわれが社会人となっていくには、是非考える必要があるということがわかった。しかし、こんなにも身近かであって生活に溶けこんでいるものなのに、全然自分の見方がどうなのかわからない。一つ一つをとってみれば、大衆とは大衆であり、個人とは個人なのである。しかしこれを結びつけてみると、それだけでは片づけられない何かがある。

大衆とは、わたくしに言わせれば、ユラユラと揺れた船であって、それにうまく飛び乗れば大衆の中の個人となり、踏みはずしてもしたら見はなされたことになる。こんなことを言うと個人が大衆に縋りついているように聞こえるが、実際にはこのような状態なのではないか。個人では何もできない。大衆なら何でもできる。この大衆の事実がわれわれに大分影響を与えていると思う。もはや大衆の中には個人を見出せないようである。

よく人は社会的動物と言われるが、人は社会を作るために生れたようなものである。そしてその社会とは集団—大衆—の集まりである。つまりそこがリースマン的に言うと発信地になるのである。わたくしはリースマンの考え方にとても魅きつけられた。社会というものを深く指摘していると思う。しかしこれだけははっきり言われると、少し行動をしにくくなる恐れもあるが、やはりわたくしも「不安」のとりことなって大衆というものに目を向けるようになるかもしれない。

人がいるかぎり大衆も存在しているのだから、わたくしは喜んで入っていく。少々風は冷たいかも知れないが、わたくしは集団に入って何を求め何を求めるだろう。個人を見失うだろうか。大衆と個人という関連性はなんであるうか。わたくしが生きている限り、この疑問と不安は続くであろう。

# 現代の社会病理 (1時間分)

都立葛飾商業高等学校 教諭 浅香 育弘

## <授業内容のまとめ>

### (1) 現代における社会病理現象

- ①青少年の非行増大 ②犯罪の増加 ③自殺・心中・家出の増加
- ④精神障害(ノイローゼ等)の増加 ⑤交通・火災事故の激増
- ⑥賭け(ギャンブル)の流行 ⑦暴力団の横行 等

### (2) 社会病理現象増大の原因

- ①大衆社会の孤立化からくる精神的不安定
- ②政治・経済・社会環境・文化の貧困と混乱(繁栄の中の貧困)
- ③政治への不信と無関心(太平ムードと精神的弛緩・無気力)
- ④社会構造や機能のあり方・ゆがみ(合理化)からくる疎外感
- ⑤各集団間の社会規範の分裂・葛藤(価値観・利己心の衝突)
- ⑥現代人の“病める精神”の反映→社会病理は氷山の一角

### (3) 現代社会病理への対策

“失われた人間性をいかにして回復するか” (作文と話し合)

#### (一案)

現状打開の応急策……家庭機能の改善, 職場の明朗化, 仲間集団づくり, 都市環境整備, 政治, 経済, 社会, 文化機構の改革など  
 抜本的恒久的対策……趣味, 芸術の愛好, 自主的判断力と社会的連帯感の育成, 健全な人生観の育成, 宗教への期待(無痴・本末顛倒への自覚)

<ねらい> 現代社会の問題としてマスコミや消費、余暇の問題をふまえて、現代の社会病理について関心と理解を深めさせる。

まず現代の社会病理の意味、特徴、種類、内容を理解させる。社会病理とは人びとの健全な社会生活をむしばむような現象、正常を欠く社会的現象、社会の病気をさし、正常・不正常的の基準として一応社会集団の規範に反した行為や思考、態度をいう。(社会逸脱・社会解体などともいっている。)前掲の他アルコールや麻薬中毒・スラム・貧困・失業・売春・疾病(性病等) 棄老・棄児・離婚のような社会現象も入る。

このような社会病理現象は何故起るか。これらにはいずれも個人的原因と社会的原因が考えられる。前者には悪質の遺伝・ゆがんだ性格やパーソナリティの所有など、後者には経済的圧迫・社会機構のゆがみ・政治の欠陥・戦争社会変動などがあげられる。社会変動などに適応不能になった個人の側に問題があると共に、現代人の悩みを十分に救っていない現代文化の貧困、混乱にも大きな責任があるから両者はからみあってこのような現象を生み出しているといえよう。家庭機能の減退、都市生活の多忙、騒音、消費や娯楽をあおる宣伝等からくる無力感・疎外感もこのような現象を助長している。更に社会規範の動揺や価値基準の変動からくる道徳意識の乱れや個人の人生観・世界観の混迷、それに伴う人間性の喪失に、より根本的原因があるといえよう。戦後の日本では兎角経済的繁栄のみ追求され、精神面での貧困・退廃が著しいが、その歪みがこのような形でてて来ているといえる。従って社会病理は現代人の“病める精神”の氷山の一角に他ならない。

では現代の社会病理を解決するにはどうしたらよいか。結局は倫社・政経等の全分野に関連してくるが、応急策と抜本策に分けて考えられる。いずれにせよ社会と自己の現状を直視し認識することから始まる。真に目覚めた者以外はすべてが狂っているといえるから、まず無知の知、共是凡夫を自覚し、その上で真の人間のあり方、仏陀・君子の言行→文の学習が大切である。

都立葛飾商業高等学校 2年4組

現代社会における人間疎外の事実の中で、人間性を回復するにはどうしたらいいだろうか。

人間の真の幸福をうるためには、われわれはまず現代社会の実情をよく理解し、個人の内面的安定を高めることが必要であると教科書に書かれているが、何事においても、内面的安定を高めることは重要で、社会の構造が悪いとか、時代が悪いとかを理由に、内面的安定に努力しないのはおかしいことである。誰しもが、その努力をおこたらないならば、人間疎外などはありえないし、社会病理現象なども、ずっと減るのではなかろうか。

今の時代に、社会構造の悪さ、時代の悪さはたしかにあるかもしれないが、それは何時の時代にも少なからずあるのではないか。ましてや、戦後の日本のあらゆる発展の中で、内面的にすぐれている人は少ないかもしれないが、経済的・文化的発展による弊害が、社会発展のためにさけられない必然的なものならば、それに流されない内面的発展を重視しなければならないと思う。

その内面的発展を促がすのが、学校で言えば、クラブ活動や読書などであり、また友達との交際であると思う。更に広く言えば、自分にあった趣味をもつというか芸術に親しむことであり、宗教でもよいと思う。要するに何か一つをもちつづけ、それに打込むことができればいいと思う。

そして人間性の回復には、個人がそれぞれ内的発展に努めると同時に、社会の方も、それを行なわせるのにふさわしい場にするのが大事だと思う。たとえば都市の騒音や公害をなくし、静かな公園や文化施設をふやすなど社会環境を整備したり、マズコミの質を高めたりすることである。

しかし内面的・精神的発展こそ大切であると思う。

## 都立葛飾商業高等学校 2年6組

現代社会における人間疎外の事実の中で、人間性を回復するにはどうしたらよいだろうか。

わたくしの意見としては先ず一番大事なことは現代社会の実情をよく理解することだと思ふ。たとえば大きな会社はもちろん、中小企業の会社もだんだん機械化が進んでいくと、労働者達は毎日同じ仕事のくり返して創意を失い、まるで機械の奴隷のようになりかねない。これでは人間性を失うどころが神経まですり減ってしまいます。またテレビ・ラジオ・新聞等のマスコミによって報道される解説・意見などがそのまま無批判に受け入れられたり、興味本位のもものが提供されたりすると、わたくし達はマスコミにあやつられる人形のようにしてしまふ。このようにして人間疎外そして人間性の退廃現象が起こるのだと思ふ。人間疎外とは自己の本質を見失い、非人間的状態におかれてしまったことだと言われていますが、これをなくし社会病理現象を直すには、以上のように人間性が損なわれているという事実をまず反省し自覚することが大切だと思ふ。

次に各自が友人や家族・仲間集団を通して、話合いをしたり、趣味や娯楽レクリエーションをやることによって、人間性の回復に努めることが大事だと思ふ。特に家族や仲間集団は精神的緊張を解消させ、新たな生活意欲を回復する所として重視すべきだと思ふ。

三つとしていろいろな本をたくさん読んで、いろいろな人間性のあり方を学びとったり、しっかりした人生観を持てるようにし、自己の内面的な生活や思想を安定させ高めることがかんじんだと思ふ。各人が真の幸福は何かを求め、生きていく目的をはっきり自覚し、それに向って着実に進むようにすれば、少しでも人間性の回復に役立つのではないだろうか。



<ねらい> 前時では、マスコミの役割を、世論形成という政治的側面で、明らかにしたが、本時では、われわれの日常生活において、マスコミがどういふ影響を与えているかを追求する。そして、マスコミに対決する方法を模索してみたい。

われわれ自身が、四六時中マスコミに溺れているので、まず、マスコミをわれわれから引き離して、客観的に対象視する操作が必要である。そのために、マスコミの意味、分類、機能等をかたんに整理して、然る後に問題点の分析に入る。送り手側の問題点を検出してみると、大企業による営利主義と政府の官僚統制が浮び上がるが、後者は前時まで取扱ったので、ここでは前者に焦点を当てる。購読数、視聴率を引上げようとして、平均人をイメージしながらいわゆる興味本位の紙面や番組を流していくことになる。マスコミ企業間の競争が激化すればするほど、スリル、セックス、スポーツ等の内容がふえていく。一方、受け手側は、大衆社会のなかで歯車の生活をづづけているうちに、受動的習性を身につけてしまっているし、また機械的環境のせいで情緒的不満に陥っているので、マスコミの提供する宣伝や娯楽を無批判に受け入れてしまう。こうして、マスコミに流されていくステレオタイプが生れることになる。

以上の事実を、高校生の場合に即して自覚させることが必要である。そこで、「高校生とマスコミ」というような話合いをすることも効果があろう。高校生の多くは、受験勉強の息抜きとして、マスコミに接している。娯楽に見られて面白いもの、快い刺激を与えてくれるもの等が好まれる。そういう接し方によって、ギャグを覚え流行を知り、しだいにステレオタイプ化していく。

こういうマスコミの影響をいかに克服するかが、いちばん重要な課題である。読書やパーソナル・コミュニケーションの意義を示唆しておく。

都立南葛飾高等学校 2年4組

ぼくたち新聞部では、昭和

41年6月、2年生(男107名

女104名)を対象に、「マスコミと南葛生」というアンケート調査を行った。この調査結果のうち「よく視聴するテレビ番組」を参考にして、南葛生のマスコミに対する接し方をまとめてみよう。

右に掲げたのは十位までの番組であるが、これを見てすぐ分ることは、テレビをもっぱら娯楽として受けとめてい

男		女	
野 球	24	青春とはなんだ	24
青春とはなんだ	20	ただいま11人	16
ナポレオンソロ	20	ナポレオンソロ	15
ニュース	19	ニュース	13
スポーツ	11	寄 席	11
源 義 経	10	ザ・ヒット Parade	10
寄 席	10	若者たち	10
若者たち	9	風のある街	10
コンバット	9	奥様は魔女	8
逃 亡 者	6	野 球	8

ることである。さきごろベトナム戦争の取材番組で問題となった「ノンフィクション劇場」日本の社会のさまざまな現実を描いた「日本1966」「現代の映像」などはほとんど見られていない。

娯楽として愛好される番組は、スポーツ、アクションもの、青春ドラマ、ホーム・ドラマ、ナンセンス・コメディ、歌謡番組等である。このうち、スポーツとアクションものは、快い緊張とスカーとした感じを与えてくれる。青春ドラマやホーム・ドラマは、非現実的環境を設定して、ユーモアをふりまきながら夢を抱かせる。(現実からの逃避だ)寄席を含めたコメディは、まったくバカバカしいが、気休めにはもってこいというもの。

要するに、最大のマスコミであるテレビから吸収しているものは、快い刺激であり、楽しいムードであり、ナンセンスな笑いであるということができよう。

## 都立南葛飾高等学校 2年3組

倫社の授業で、マスコミによってわたくしたちがステレオタイプ化されていることを学んで、まったくそのとおりだと痛感しました。わたくしたちひとりひとは、みんな自分だけのおしゃれ・趣味・生活等々を持っているつもりでも、じつはマスコミによって与えられたものにすぎないのです。なんとゆううつなことではありませんか。

わたくしたちの学校では、さいきんまでエレキがはやっていました。とくに男子はバンドなんかつくって熱心でした。エレキはどうしてはやったのでしょうか。いちばん大きな理由は、ビートルズがマスコミでさわがれたからです。フォークは、反戦の意志をこめた歌だそうですが、そんな理由ではやっているわけではありません。エレキの場合と同様に、マスコミが採りあげたからにほかなりません。わたくしたちは、趣味の世界で、まったく自主性がなく、マスコミの提供するものにそのつとどびついているといった恰好です。

わたくしたち女子の関心の深いファッションの流行について考えてみましょう。ファッションは毎年変わります。例えば、色について言うと、シャープ・トーンがはやったかと思うと、フルーツ・カラーになり、そしてまた変わっていきます。流行というのは、わたくしたちの好みで反映して生まれるというより、どこか上から作られてくるといった感じです。おそらく、繊維会社や化粧品会社やデパートが、マスコミと結託して、わたくしたちに押しつけてくるのです。その結果、わたくしたちは、まだじゅうぶん着られるものであっても、みんながもう着ていないということで、着られなくなってしまふのです。

マスコミとは、なんと恐ろしい存在でしょう。知らず知らずのうちに、わたくしたちの生活をみだしてしまふもので、気がついたときには、がんじがらめにされているのです。わたくしたちは、どうしたらよいのでしょうか。

## 現代の日本社会

(1時間分)

都立深川高等学校 教諭 道広 史行

## 〈授業内容のまとめ〉

## (1) 講義

## ① 日本の社会構造の特色

フォーマルな構造とインフォーマルな構造について

基本的文化の共通性——同質社会・感情の優先する社会

## (a) 「場」による集団形成

## ② 資格と場との概念の相違

## ③ 場の意識——「ウチノモノ」「ヨソノモノ」意識など

## (b) 「タテ」組織による構成

序列的關係・同類との競争關係など

## (2) 討論

## ① 日本人の生活態度について

## (a) 戦後、変わったと思われる点——その事例

## (b) 基本的な面が変わっていないと思われる点——その事例

ヒント……敬語の変化、クラブにおける上級生・下級生の関

係など、生徒の身近なものから摘出させる。

## (c) 両者の調和・総合について

## ② 日本社会の諸現象についての理論的考察

「近代的であるかどうか」という観点からではなく、客観的な

理論的考察を中心におき、そこから問題意識を起させる。

<おらい> 前回の「現代社会と文化の特質」についての学習を基礎に、現代の日本社会の特色について考察する。日本的な現代社会の諸現象の底に深く貫かれているメカニズムをとらえ、それが現代の日本社会における人間関係をいかに特色づけているかを考えさせる。

現代の日本社会の構造分析についての手がかりとして、中根千枝著『タテ社会と人間関係』を参考資料とし、「場」による集団の特性、「タテ」組織による構成についての著者の見解を、かみくだいて生徒に紹介する。そして、「戦後飛躍的に、日本人の生活態度——衣食住に現われているように——は変わってきている。来日する外国人を驚嘆させるほど西歐的な様式をぐんぐん取り入れて。目に見える文化という点では、これほど変わってきているのに、日常の人々の付き合いとか、人と人のやりとりの仕方においては、基本的な面ではほとんど変わっていない」という見解について、生徒に討議させる。

①日本人の生活態度が変わったと思われる点 ②基本的な面で変わっていないと思われる点、の両面について、生徒自身が気づいた具体例を述べさせる。ヒントとして、敬語の変化やレジャーについての考え方の変遷、クラブにおける上級生と下級生との序列的關係など。

以上2面の具体例を対比させて、社会組織は変わっても、日本の社会に内在する基本原理ともいべき人間関係の主要な部分は変わりにくいものであること、変わりにくい部分の基底には、「場」を強調する日本人の特性や能力平等視、論理より感情が優先する社会形成など、日本の社会・文化の伝統的性質がひそんでいることを理解させる。

最後に、現代の日本社会において、変化したものと変化しないものとか、どのように総合されているかについて考えさせ、さらに、日本の社会の進むべき方向について、生徒各自の問題意識を喚起し、「社会と人間」の単元のしめくりとする。

## 〈生徒作文〉

都立深川高等学校 2年1組

われわれの社会を、「場」と「タテ」組織という角度から考えてみると、なるほど変わっていないものだ、と痛感した。討議の時間が短かったので、自分が考えたことを、ここに記す。

封建主義から抜けてるまでの日本は、「家」を第一に考えた。また自分の主君の家を第一とした。そういう封建的な日本人の考え方が、「場」を一番に考える一つの要因であると思う。また日本語の特質からもそのようなことが言えるのではないかと思う。まず大きなことから言っていき、最後になるにつれて核心にせまってくる。住所が一番よい例だと思う。日本語では、まず大きな都道府県を言い、次に市町村、次に番地を言う。しかし英語では番地からはじまり順序が逆である。これは、英語では最も身近なことから言うことを現わしている。だから、職業についても、ヨーロッパ人は、まず身近な仕事——建築技師だとか、キーパンチャーだとか言うが、日本人は大きく、〇〇会社のものだと言うのだろう。日本語自体がすでに外国のものと異質なものであるから、考え方が異なるのも当然で、「日本は封建的だ」とか「前近代的だ」とか一概に言えないと思う。

しかしながら、現在日本が世界の中の一國となった以上、「日本語も場を先に考えるように造られているのだから、しかたがない」と言って、このまま、ほっておいていいとは言えないと思う。日本の特色というものは薄れるかも知れないが、世界国家としての日本は、「場」と「資格」との考え方の両方から、よい点を導入し、悪い面を排除しなければならない。われわれは、日本と外国との社会の特質を掘りさげて比較し、現在の状態を「あたりまえのこと」として、無自覚になってしまわず、よりよい社会のあり方を、さぐり出し、つくり出さなければならないと思う。

今日の授業から、こんなことを考えた。

## 都立深川高等学校 2年1組

先生は「資格と場」「タテとヨコ」ということについて、本を参考にしながら、いろいろと話して下さったわけだが、ここでは、感じたことをいくつか羅列的にならべたいと思う。

日本のタテ社会、しかも能力の差別が認められず、年功序列などで成り立っている社会。これはたしかに、ヨーロッパ諸国などとくらべて、日本の発達をおくらせる原因になっていると思った。しかし、わたくしは、必ずしもタテ社会を否定するばかりではない。ヒューマン・リレーションがうまく行くということもあると思う。しかし、このごろのように大会社が発達して、外から見ると近代的組織のように見えるものも、内部の関係は、前近代的なように思えてならない。(父やおとなの人の話を聞いていると、そんな感じがする。)××君が発言したように、「これでいい」とは思えない。

また、日本人には場を強く意識する特質があり、それを維持するようにタテの関係が成り立っているということ。たしかに、場というものを考えた場合、統制力が必要になってくる。自然にタテの関係を柱にしなければならなくなるだろう。しかし考えてみると、タテの関係は資格の関係にもあるのではないだろうか。ある水準ではヨコの関係はあっても、タテの関係が重なり合っているのではないだろうか。はっきり判らないが、そんな質問をして、みんなの考えや先生の意見をききたいと思ったが、時間がなくなって、残念でならない。

本当に羅列的にのべてしまったが、思想の問題よりも、わたくしたちが現に見ることのできる問題だったので、非常に興味ももてた。今まで、あまり気にしなかったことについて、考えるようになった。これから社会に出て行くと、実際の問題として、ぶつかることがあるだろうと思うし、もっと深く考えてみたいと思う。

# 家族の諸問題

(1時間分)

都立荏西工業高等学校 教諭 綿貫 博

## <授業内容のまとめ>

### (1) 家族集団とその機能

家族——婚姻関係にある男女を基礎として、比較的少人数の近親者を  
主要な構成員とする、扶養共同の基礎的社會集団

家族の機能

- |   |   |                 |
|---|---|-----------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>① 子女の出生・養育・社会化</li> <li>② 家族員の、物質的・精神的安定</li> <li>③ 家族員の生活の保護</li> </ul> | } | ( 社會の近代化により変化 ) |
|---|---|-----------------|

### (2) 家族の形態

- ① 夫婦家族——一代家族……近代家族
- ② 世代家族——直系家族 } ……前近代家族
- ③ 拡大家族——複合家族

### (3) 近代家族の成立

- ① 近代社會に成立(日本では、戦後、新家族法が成立)
- ② 結婚によって成立し、夫婦の一方又は双方の死で消滅する。
- ③ 人格をもつ自由な個人が、愛情に基づいて作る。

### (4) 現代の家族問題

離婚、家出、少年非行、捨子、一家心中など、特に大都市に集中

原因 ①近代家族に内在するもの ②戦後の諸事情(經濟不安定)

### (5) これからの家族関係

<ねらい> 一言で言うならば、家族の機能と形態とを理解させ、それが現代社会において、最も基礎的な集団であることを自覚させ、更にこれからの家族関係を考え、今後の生き方の見とおしをたてさせる、ことにある。

われわれは家族のなかで生まれ、家族のなかで生活を送る。家族は人間の歴史とともに古い社会集団であるが、現代においても基礎的社会集団であり生活共同体であるという点で、変ってはいない。それは、人間にとって運命的に（出世によって）その所属が決定されるという集団であり、生物学的基礎にたつ集団である。また家族は、人間の一人一人のパーソナリティの形成にあたって、極めて重要な機能をもっている。家族が、基礎的集団のなかでも最も代表的なものとする理由が、ここにあるようである。このように重要な集団としての家族は、人間の一生を通して常に人間と関わりをもっている。だから家族は、人間にとっていつでも心のよりどころであり、家族員に経済的安定を保障し、老、幼、病者を保護する集団として生き続けてきた。ただ歴史的にみると、家族の機能はだんだん減少してきて、今日では、ただの消費団体になりそうな傾向がみられる。しかし、そのすべての機能が、全部他の集団に奪われ、家族はやがて消失してしまうということは有り得ない。なぜなら、家族は男女両性の愛情にもとづく結合としての、子女の出生と養育という機能は、絶対のものとして持ち続けるに違いないからである。

第二次大戦後、わが国においては、家族生活における問題が激増している。それは家族病理だけでなく家族組織化上の問題である。言うまでもなく、その一つの原因は戦後の政治経済上の不安定から来ているが、一方、新民法の制定による近代家族の確立の時期とも一致するのである。近代家族は、純然たる個人的愛情と意志によってのみ、実現され継続される自由な家族であるから、ともすれば永続性を欠く性格がある。そこで、われわれは、今後この近代家族の中にあつて、新しい愛情中心の、個性を尊重しあつた、信頼をもととした 家族関係を作るような努力をしなくてはならないのではないか。

都立葛西工業高等学校 2年6組

わが家族について考えることにする。わが家の家族は5名である。これは最近の日本全国の平均世帯人員より多いそうだ。(昭和40年4.05人)しかし、それは当然で、わが家には祖母がいるからである。だから、わが家は、三世世帯であり、直系家族の形をしているのである。クラスでも、祖父や祖母がいる家は珍らしいようだ。このクラスでは、そういう家は他に3人だけだ。(おもしろいことに全員、祖母であった。)あと父母と姉がいる。

わが家の一日を紹介しよう。一日のはじまりは、母の朝食づくりからである。まだ暗いうちにガスに火をつけ、父やぼく達が起きると、すぐ食べられるようになっている。次に祖母がガタガタと雨戸を開けはじめ、その物音で姉が目をさます。突然、目さましがなる。ぼくは寝たりないが起きだす。起きた順にテーブルについて食事をとり、また、すんだ順に会社や学校へ出ていく。母は、食事のあとかたづけをしながら、洗たく機で洗たくをはじめ。お勝手がおさまると、部屋の掃除をはじめ。父はそれまでにバイクの点検をして会社に出る。祖母は、自分の部屋でほどこものをしている。母は、洗たくがすむと干し場へ行って来る。それが終ると夕方まで内職に精を出す。いして夕方になる。ぼくが帰り、姉が帰り、父が帰る。こんどは一家で揃って食事ができる。両親は、しつけはきびしい方だが、細かい事にはあまり口だししないで自由を尊重している。一家団らんの時間が多いので、みんなの生活がよくわかる。祖母がもう少しガンコでなければよいと思う。

一家族の人員が減少しつつあるそうである。(東京昭和42年 3.31人—広報による)アメリカ合衆国や西欧なみに近づいているそうで、その点では良いような気もするが、一家が、3人だけになったら、淋しいものになるに違いない。わが家のような状態なら、今後、家族員が多くても、近代家族と言われなくとも、長く続いていって良いと思う。

今日の授業を聞いてから、未来の家族生活を考えてみた。もちろん、現在の社会体制も変わらず、大きな世界戦争などが無いことを前提としてである。

20年後としよう。ぼくは37才。人間としては一番仕事に力が入る年頃だ。ぼくは、官庁で通信関係の仕事をしている。家族は10年ほど前、恋愛の未結婚した妻と2人の子供がいる。環境のよい筑波山のふもとの住宅地に住み、モノレールで通勤する。家庭内では電化が進み、高度な電子機器が家庭化されて、ほとんど何でもスイッチ1つですませる。だから妻は、ほとんど肉体的労働はしない。わたくしを送りだしたあと、妻は2人の子供を育児センターと18年制学校へと車で送る。どちらも国営なので無料で、育児センターは希望者のみだが、ここでは早期科学教育を、学校は普通中等義務教育をすることになっている。だから子供は、20年前とくらべると、ずっと長く親のすねをかじるわけで、親はつらくなった。妻は昼間は一人なので、立体カーTVとか美容体操で時を過ごし、その後子供の教育法の研究。妻も大学を出ているし子供の教育については専門的である。両親は少し前まで一緒に住んでいたが、先年開設された第9国立老人ホームに入りたいと言い、そこで暮らしている。富士山のふもとで空気も良いし、設備も整っているので満足の様子だ、それでもぼくは、月に1度はドライブがてら、そこを訪ねている。家庭内は、ますます平和だが、近頃また問題がでて来た。それは余暇の過ごし方についてだ。ぼくはふだんから外へ出ていることが多いので、休日(週3日ある)には、家でくつろいだり、近所へ散歩に行きたい。それに何しろ週4日の勤務が実に神経を使うからである。しかし妻はそうではない。さかんに遠くへ出かけたがる。それも子供の教育のためだと言うのである。子供まで妻の味方をする。言うことを聞かないと離婚すると言わんばかりである。仕方がない。また今度の休日も妻と子どものお相手か。女はますます強くなる。

## 職域社会の人間関係

(2時間の1時間分)

都立蔵前工業高等学校 教諭 木村 正雄

## ＜授業内容のまとめ＞

## (1) 職場集団の人間関係

① ホーソン工場の実験：物的条件より、むしろ心理的要因が必要

② morale (勤労意欲)の問題

要因：自覚度、愛着心、満足感、信頼感、一体感の度合

これら感情的のフクターを包む人間的集団管理が必要

③ informal group：人間関係をささえる基盤

形成される条件：成員同志が阻難的に近い、少数、持続的

親密な人間関係(出身校、趣味、同郷等)→生産活動の実際単位

informal g：感情と心情の論理、自然的、活動力を与える

formal g：費用と能率の論理、人為的、秩序と一貫性を保つ

④ 日本的なもの：伝統的、家族主義的(温情主義) 補完的←

## (2) 労働組合の人間関係

① 組合組織の原則：平等な人間関係と民主的運営→モラール、一体感

② " 現実：巨大化、運営の形式化→無関心、幹部の独走

③ " 民主化：幹部と組合員の意志の疎通をはかる(集団討議)

## (3) 望ましい職場

① 人格の尊重、公私の区別

② ガンセリングの活用

③ 組合活動・リクリエーション、サークル活動への積極的参加

<ねらい> これから(あと2か月で)、新しい職場に入ろうとしている生徒にとっては、非常に関心も深いし、職域社会への期待と不安が混同しているのが現状である。また、定時制生徒にとっては、現実の職場のなやみ(人間関係が多い)を常にうたっている。しかも、その解決は容易なものではない。現実の職場の人間関係は、いわば、倫社の学習の集約化したものといえる。かれらが(新しい)職場で、望ましい人間関係がつけられることを祈りながら。

現代の職業は、多くの分化と階層化を生じさせているが、生活の維持、個性の発揮、社会連帯性という社会と個人の結合点であり、職業倫理への自覚の必要性和、しかも、人間疎外の二面性を有するものである。

現代社会の経営体は、ピューロクラスンであり、ここにおけるヒューマンリレーションズを、なんとかして人間性の回復のために、あらゆる面から努力していかねばならない。フォーマルとインフォーマルな組織の構造と機能モラルの諸要因を追求し、そして、その重要性を理解し、また、日本独特の伝統的、家族主義的な職場の人間関係を無視してはならない。

特に、インフォーマルグループは、職場の人間関係をささえる基盤であり、学閥や性別、郷土閥や国籍によって自然につくられる親密な人間関係で、職場での精神的安定をもたらす、職場への定着性と有意義な生き方をもたらすものである。しかし、それは、フォーマルな人間関係と補完的關係にあることとはいうまでもない。

労働組合の組織もまた、巨大化、形式化し、分裂と抗争を続けている。そのような中で、労働組合の真の民主化をはかり、その機能を十分に発揮させる方法についても考えねばならない。

以上から、現代の職場の人間関係の理解を深め、理想的な職場への積極的な意欲をもたせたい。

## 〈生徒作文〉

都立墨田工業高等学校 3年3組

ぼくは、あと2か月で職域社会に入るわけだが、インフォーマルなグループの働きが非常に大きいように思う。学校では自分の諸問題を、このグループと一緒に話し合っていたが、職場にでてからの諸問題は、個人に対する責任が多くかかってくるので、1人では処理できない問題が沢山でてくる。その時に相談したり、話し合ったりするのに必要だと思う。早く、このグループに入りたい。そして、人間関係をよくしていきたい。また、勤労意欲について、ぼくは仕事に対する愛着心より、人間関係の信頼度の方が大きく作用するものと思う。というのは、われわれは、大きな社会の中で仕事をしていく場合には、愛着心だけではとてもやっていけない。だから、ぼくはモラルは、職場での人間関係の信頼度の上から生まれるものであり、そのつぎに愛着心が生まれてこそ、ほんとうに湧いてくるものと思う。従って、職場に入らないうちに、与えられた仕事を確実に処理できるよう頑張りたい。それから、リフレッシュも積極的に参加し、同じ課の人は勿論、他の課の人達とも話し合いすることによって、いろいろなことがわかるし、自然と人間関係がよくなると思う。また、職場に知っている人が多い程、楽しい毎日がすごせると思う。サークルやクラブなどにも入って、先輩や同輩の相談相手や話し相手を得たい。たしかに、ホーソン工場の実験結果のように、仕事は、すごく気分的、精神的なものが影響すると思う。だから、職場の人と楽しく仕事ができれば、8時間でやるべき仕事を6時間でやってしまうかも知れない。ぼくは、一人で勉強していると、なかなか進まないが、グループでやるとスムーズに進行することがあり、能率があがる。だから、仕事でも心理的影響は大いにあると思う。良い気持で仕事ができるということは、ぼくは、やっぱり職場でよい人間関係につながってくると思う、ぼく自身、積極的に、よい人間関係をつくっていきたい。

## 〈生徒作文〉

## 都立蔵前工業高等学校 定時制 2年 男子の感想

- a ・ ホーソン工場の実験の話を書いて、やはり、だれでも自分は他人よりできるんだな、と思っているが、これをできるだけ少なくし、みんなで一緒にやる雰囲気が一番大切だと思った。
- b ・ ほとくの職場は、単純作業のため、勤労意欲が全くなく、生きるために、しかたなく働いているような気がする。
- c ・ 勤労意欲というものが、自分にいつでもそなわっていれば、今より以上に仕事の能率もあがると思う。しかし、そういうことは理想的ではないか。
- d ・ 職場で一番むずかしいのは人間関係で、8人でいつも作業しているが、なかには、よい人も悪い人もいて、理由もないのに叱られたりして非常に腹がたつ。そんな時、全く勤労意欲がなくなる。信頼度が薄いのであろう。
- e ・ 自分の勤めている職場の理解がよくできたように思う。そして、インフォーマルグループをつくり、もっと、もっと話し合いが必要だと思った。
- f ・ やはり年齢がはなれていると、話があわないので、同年令のものとインフォーマルな関係をもつようになる。職場内の交流について再認識した。
- g ・ 月に2回の野球大会があり、汗を流し、職場や仕事のいやなことをふきとばし、明日への活力がでてくる。これからも、大いに参加し、人間関係をよくしていきたい。
- h ・ 上役のいうこと、社長命令をきくことについては、いままでのようにやってきたが、誤っていたことを確認した。
- i ・ 人と人との話し合いの気楽さがないので、もっと話し合っって明るい職場にしたい。自ら進んで、みんなと話し合い、一日一日を楽しく過せるように努力している。

## 東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約

1. (名称) この会は、東京都高等学校「倫理・社会」研究会といたします。
2. (目的) この会は会員相互の研究によって、高等学校社会科「倫理・社会」教育を振興することを目的とします。
3. (事業) この会は、次の事業を行います。
  - (1) 「倫理・社会」教育の内容および方法などの研究。
  - (2) 研究報告、会報、名簿などの発行。
  - (3) その他、この会の目的を達成するために必要な事業。
4. (事務局) この会の事務局は会長在任校におきます。
5. (会員) この会の会員は次の通りです。
  - (1) 正会員 学校またはその他の研究団体に所属して、この会の目的に賛成する者。
  - (2) 賛助会員 この会の目的に賛成し、会の活動を援助する団体または個人。
6. (顧問) この会に顧問をおくことができます。
7. (役員) この会の役員は次の通りです。任期は1年ですが留任を認めます。
  - (1) 会長 (1名)
  - (2) 副会長 (若干名)
  - (3) 常任幹事 (若干名)
  - (4) 幹事 (若干名)
  - (5) 会計幹事 (若干名)
8. (総会) 総会は毎年6月に会長が召集し、次のことを行います。
  - (1) 役員を選任
  - (2) 決算の承認、予算の議決。
  - (3) その他重要事項の審議。
9. (年度) この会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わります。
10. (経費) この会の活動に必要な経費は、会費その他の収入でまかないます。会費は次の通りです。
  - (1) 正会員 学校または研究団体を単位として年額 1500円
  - (2) 賛助会員 年額 1口、2000円
11. (細則) この会の規約を施行するについて、幹事会は必要な細則を作ることができます。
12. (規約の変更) この会の規約の変更は、総会の議決によります。

### 附 記

1. この規約は昭和37年11月20日から施行します。
2. 昭和42年度総会で、会計年度と会費の変更がみとめられた。

## 事務局を担当して

事務局長 増田 信

感想を書けといわれる。事務局をあずかっていると、経過や歩みを書けといわれることが多く、このほうは食傷気味となり、そういわれないだけありがたい気持ちなのだが、それなりの事務屋になってしまうと、感受性もまた乏しくなるようだ。田舎まさに荒れんとなすである。感想といえば、帰りにいさの気持ちきりであるというところか。

ことは経常活動のほか、五周年を1本たてたので、会員の先生がたには忙しい思いをさせた。とくに世話人代表の小笠原先生の仕事をやりにくくした。しかしことが大詰めに近づいて、それもこれも滞りなく仕上りそうである。事務局同人石森先生をはじめ、会員の先生がたのご協力には感謝のほかはない。

この3月には、矢谷会長が都立の高校長を勇退される。それにとまって、会長のバトンも、つぎのかたに渡されることになるだろう。そろそろ、上野高校での事務局も店じまいである。ばくも事務室から、ふつうの会員のひとりにかえることになる。任されたり、しぼられたり、明敏な会長のもので、ときに衰龍の袖に隠れることもあったが、いい仕事をさせていただいた。謝意の尽せぬものがある。

努めれば興り、怠れば廃る。理法は昭々として明らかなようである。ばくはなに努めたということもないが、事務局の2年間をかえりみて、その感が深い。たしかに都倫研の過去5年間には、気運に乗じたものもあった。しかしそれにもまして、会員の先生がたの旺盛な研究意欲に支えられたものが大きかったと思う。これからも自強怠まざるべしと、ばくは大きな時のうねりのなかで、会員の先生がたとあいともに言い交したいと思う。

## 事務局 石森 勇

「とうとうおわった、やれやれ。」というのが現在の実感である。事務局の仕事もこれでおわると思うと、いろいろな思い出が湧き出てくる。

「いっぱいやったあと書いておいたよ」増田事務局長はいともかるがるとあって、全国大会の楽屋裏準備いっさいを、こまごまと盛こんあざやかに書いた手紙を出す。ちみつま、そして自宅に持ち帰ってまで仕事をし、研究会のことが念頭から離れないでいる。局長としての責任の重さをずしんと見せつけられる。やめてはまた吸う、喫煙と禁煙の教えきれない戦いを増田さんはする。少しもテレずに、「ぼんのうだよ」とずましている。

紀要第6集の執筆要項の説明文で玄人はだしの腕前をみせてくれた小笠原さん、記念出版で電気掃除機そのけの吸引力で原稿を集めまくり、編集・校正に力を示された伊藤・中村さん、  
“尾瀬・白馬に初雪のたより……”と会報のあとがきで研究会にムードを持ち込んだ小川会報担当官……教えきれない。

都内全部に連絡の手紙を出すには、授業のあい間にやるため、3日間にかかる。当日になって、公開授業・研究発表など、多数の方々が真剣にとり組んでいるのを見るとき、事務局をやってよかったとつくづく思う。

会員諸氏にお願いする。ぜひ新事務局を盛り立てていただきたいと。

## あ と が き

会員みなさんは、それぞれの学校で重要な役割を果たしておられる方ばかりである。その方々を動員して一つの仕事をまとめるということはなかなかの難事業である。多くの方々のごせいがあって、やっと刊行するのはこびになった。各分科会の世話人の諸先生ありがとうございました。

生徒作文のアイデアは岡本武男先生（都白鷗）であった。増田事務局長はコントロールタワーの存在で、よく各人の特性を生かして、それぞれのパートでうまく人を動かせる技術をもった先生である。そして、事務局の仕事だけで月給がもらえそうな働きを自らもなされた。都倫研は、アイデアマンとチームワークのよさとよい事務局に恵まれたすばらしい会であると思う。

矢谷会長はこの3月でご勇退とのこと、初代会長のため何かはなむけをしようという気持ちが会員のすべてに伝わった。ご自身は、「ベレー帽」と称しながら、都倫研、全倫研のためにご尽力下さったご功績は、会員すべてが認めるどころである。かたや、会員の面倒もよくみてくださった。

万感胸にせまるものを覚え、ここに無理を承知の上で、増田・石森両先生に感想を求め、後世のための記録とした。ご諒承をいただきたい。

また、印刷をお願いした（有）照美社顧問四条輝雄氏は、身障者にタイプを指導し、更生に尽力しておられる方である。印刷所はどこにでもあるが、このような方に紀要の印刷をお願いするところに、都倫研の性格をお汲みとりいただきたいと思う。

最後に、各高校の生徒諸君、作文をどうもありがとうございました。みなさんのお力で、この紀要も世に出るわけです。会を代表して、あつくあつく御礼を述べさせていただきます。

昭和43年3月31日

（小笠原 記）

